

774. 2-Mi 53ウ



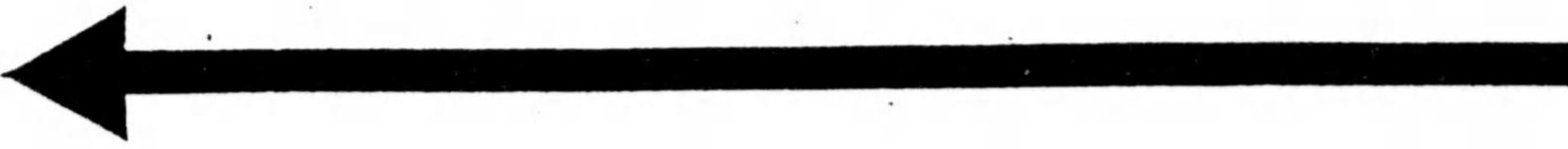
1200500752638

774.2

Mi53



始



3-3345
千

774.3
M153

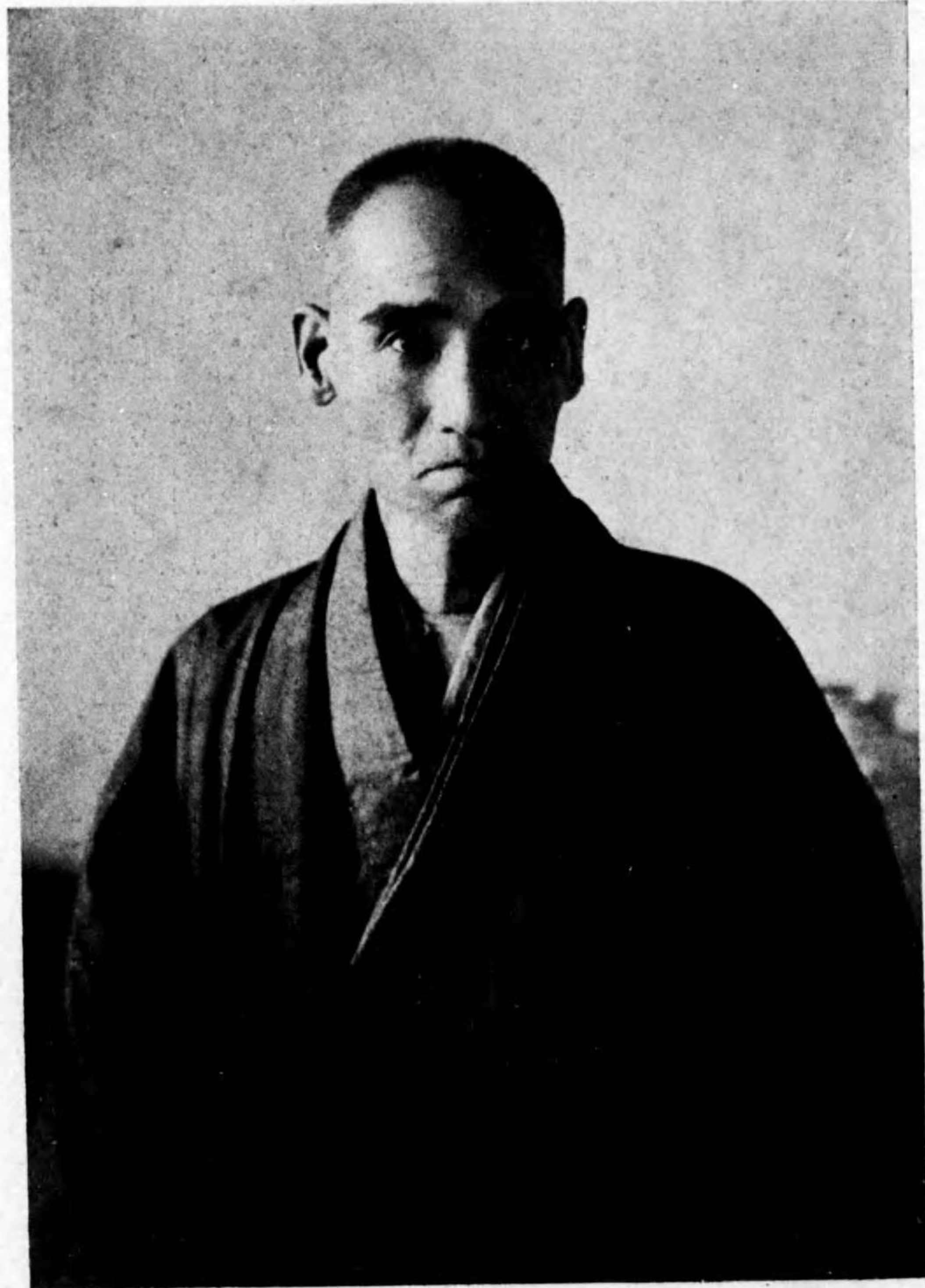
三島霜川著



役者藝風記

中央公論社發行





著者影像

三島霜川略歴

明治九年四月富山縣礪波郡の郷里に於て、醫師三島重法の長男として生る。才二と命名。幼年の頃、父に隨從して東京に出でたることあり。長ずるに及び文學を好む傾向つよく、爲に醫學を修めしめんとする父との間に屢々抗爭を醸せり。父三十七歳にして逝去するに遇ひ、霜川は志を立て、一家を纏めて上京し、いよいよ文學に精進せり。それは、十八歳の頃なり。明治三十一年「新小説」に「埋れ井戸」を發表す。これ恐らく處女作ならん。「人民新聞」に「除夜」を「世界之日本」に「ひとつ岩」をひきつゞき發表し、大いに認めらる。その後、尾崎紅葉の門を敲き、泉鏡花、徳田秋聲等と知り、後、小杉天外に親炙せしことあり。「民聲新聞」に入りて、竹越三又、國木田獨步等と相知る。これは僅かにして退けり。創作活動は追々盛んとなり専ら「世界之日本」「小天地」「文藝俱樂部」「新小説」「半面」「小柴舟」「文藝界」「新聲」「婦人界」「文庫」「文章世界」「趣味」「中央公論」等に續々發表せり。「山靈」「聖書婦人」「惡血」「沈鐘」「解剖室」「虛無」「平民の娘」「蒼い顔」「短篇集」「スケッチ」等は代表作といふて可ならん。

明治四十年の頃、舊知仲田辰之助創刊せる「演藝畫報」に寄稿し初めたるが機縁となり、同誌との關係は晩年まで繼續し、大正二年より十二年までは、入つて編輯を主宰し「芝居見たま」の創始、自ら執筆せる「大正役者藝風記」その他演劇に關する多くの優れた業績をのこせり。震災後「南蠻文選」「柳橋新誌」等多くの文獻の校訂に従ひ出版し、傍ら「少年日本外史」等少年の歴史譚、物語等を創作し出版し大いに世にひろまれり。明治四十二年、廣島縣人松本ちか子と結婚し一男三女を擧げ、悉く健在にして、三女は出でて姻戚をつげり。

昭和九年三月七日腎臟癌にて中野の自邸に逝く。行年五十九歳。法名は清心院高才霜川居士。墓碑は多摩墓地に建立し、碑面には辭世の句たる「暮れ初めて鐘鳴り渡る臨終かな」を刻せり。

序

三嶋霜川氏は本名を才二といったところから、劇に關する述作には犀兒といふペン・ネームを用ゐたこともあるが、本來は小説家で、大正の初め頃「中央公論」掲載の「解剖室」其他の二篇は氏の天分を窺ふに足る名品であつた。少年少女もの、又は小品には傑れたものが頗る多い。それ以前から私とは親交があり、家庭生活に入る以前は、文字通り影の形に添ふ觀があつた。素とく名人氣質でもあつたのだが、今人に話しても想像がつかないくらゐ無精であり物臭ものくさであつて、貧乏は病膏肓に入つてゐたものである。その頃から芝居は好きで、一廉の通であつたが、劇に關する識見においても大要私と一致するものが多かつた。後歌舞伎劇の研究は益々微に入り細を穿ち、歌舞伎劇の生命であるところの古今名優の型についての造詣が深かつたと同時に、各俳優の氣質、特徴、長所短所について、觀

察頗る鋭きものがあつた。詰るところ氏は藝の鑑賞においては、人の追隨を許さぬものがあり、嘗に歌舞伎劇のみならず、義太夫及び他の藝道においても、優れた耳をもつてゐたのである。劇評は餘り書かなかつたが、それは氏が「演藝畫報」の編輯者として、劇場に出入し、興行者や俳優に接近した關係からでもあらう。劇作の野心もあつたが、餘り歌舞伎劇に對する道樂が嵩じ、樂屋うちることが解り切つてゐたと同時に、潔癖と無精と臆病とが手傳つて、偶に私が激勵してみても、遂にばつとした作品も書かなかつたのは遺憾である。それが益々歌舞伎劇の研究に没頭せしめた所以でもあらうが、氏の創作的天分が中頃挫折して歌舞伎鑑賞に深入りさせたのも、一つは創作の場合、好い加減に書きなぐるといふことの出来ない氏の名人氣質の爲せる業であつたのだと思ふ。

私は茲にこの書の序を書くとともに、氏の創作における天分の厚かつたことを併せて讀者に記憶してもらひたいと思ふのである。

この書が、漸く崩壞の運命に嚮ひつゝある古典劇の傳統保存について、多大の

便益となることは勿論で、それだけでも相當大きな仕事であることは更めて贅するに及ばない。

昭和十年二月

徳田秋聲

役者藝風記

目次

序 文

德 田 秋 聲

- 一、中村勘五郎(四世中村仲藏)……………三
- 二、嵐 璃 玨……………六
- 三、片 岡 我 童……………九
- 四、淺尾工左衛門……………三
- 五、市 川 男 寅(現市川男女藏)……………五
- 六、中村兒太郎(五世中村福助)……………七
- 七、片岡千代之助(現片岡我當)……………九
- 八、中 村 扇 雀……………三

九、市川猿之助	二四
十、市川新十郎	二九
十一、中村翫助	三一
十二、中村歌十郎	三四
十三、尾上卯三郎	三五
十四、坂東三津五郎	三九
十五、市川市十郎	四三
十六、市川蕙女	四六
十七、市川小團次	四八
十八、市川壽美藏	五三
十九、澤村宗十郎	五五
二十、尾上紋三郎	六一

二十一、市川左升	六四
二十二、市川團右衛門	六七
二十三、守田勘彌	七〇
二十四、片岡島十郎	七四
二十五、尾上樂之助(現尾上菊右衛門)	七五
二十六、中村成太郎(現中村魁車)	七七
二十七、市川權三郎(現河原崎權十郎)	八二
二十八、市川九藏	八四
二十九、中村梅玉(先代梅玉)	八七
三十、澤村源之助	九二
三十一、澤村傳次郎(現澤村訥子)	九六
三十二、澤村訥子(先代澤村訥子)	九八

三十三、林長三郎	101
三十四、中村米吉(現中村時藏)	104
三十五、市川右團次	106
三十六、中村福助(現中村梅玉)	110
三十七、中村翫太郎	115
三十八、松本虎藏	117
三十九、尾上幸藏	118
四十、中村鴈治郎	123
四十一、中村林左衛門	126
四十二、尾上梅助(先代)	129
四十三、市川齋入	133
四十四、關三十郎	136

四十五、中村翫右衛門(先代)	141
四十六、松本幸四郎	143
四十七、中村雁童	150
四十八、片岡我藏	153
四十九、市川箱登羅	155
五十、尾上松助(先代)	159
五十一、中村又五郎(先代)	166
五十二、中村芝鶴(中村傳九郎)	173
五十三、坂東壽三郎	177
五十四、尾上菊四郎(先代)	180
五十五、尾上芙雀(尾上菊次郎)	184
五十六、市村龜藏	190

五十七、市川段四郎……………一〇九

五十八、市川荒次郎……………一〇〇

五十九、市川吉三郎……………一〇四

六十、市川八百藏(現市川中車)……………一〇五

六十一、中村吉右衛門……………一一一

六十二、岩井彖三郎……………一二九

六十三、實川延二郎(實川延若)……………一三三

六十四、吾妻市之丞……………一三一

六十五、中村歌六……………一三三

六十六、坂東秀調……………一三七

六十七、澤村宗之助(先代)……………一四一

六十八、河原崎國太郎(先代)……………一四六

六十九、尾上多見之助(多見藏)……………一四九

七十、市村羽左衛門……………一五八

七十一、尾上榮三郎(現坂東彦三郎)……………一七三

七十二、澤村宇十郎(先代)……………一七九

七十三、嵐巖笑……………一八一

七十四、中村嘉七……………一八六

七十五、松本高麗三郎……………一八九

七十六、嵐徳三郎(嵐璃寛)……………一九三

七十七、市川松蔦……………二〇〇

七十八、市川市藏……………二〇八

七十九、中村東藏(現大谷友右衛門)……………二一一

八十、片岡松之助……………二二六

八十一、片岡市藏(先代).....	三八
八十二、市川米藏(市川米升).....	三五
八十三、市川門之助.....	三七
八十四、中村芝雀(中村雀右衛門).....	三八
八十五、嵐三五郎.....	三六
八十六、尾上菊五郎.....	三九
八十七、市川左團次.....	三三
八十八、片岡仁左衛門.....	四〇
八十九、中村歌右衛門.....	四三
<small>跋</small>	
三島霜川氏のこと.....	三宅周太郎 四〇
役者藝風記に就て.....	渥美清太郎 四七
	装幀 小村雪岱

役者藝風記



昔は年々に評判記が一冊子になつて出て、これで役者の位附も極まれば、出来不出来も定められたものだといふ。此の藝風記はそんな氣の利いたものではない。氣紛れに思付いたままを書きならべて見たといふに過ぎぬ。

しかし明治も大正になつた。明治の劇壇が團菊によつて代表されたやうに、大正の劇壇も誰かによつて代表されなければなるまい。誰が其の代表者になるだらう。——此の藝風記の記者はそれを豫言して見たいと思はぬでもなかつたが、あひにくそんな立派な鑑識眼も持ち合はせなければ、人相、家相、八卦占の研究もしてゐない。

謂はば出たとこ勝負である。出たとこ勝負で感じたまゝ、思つたまゝ、を忠實に書きならべ、大正の初は、斯ういふ役者達によつて劇壇が賑はされてゐたものと、後々の好劇家に幾らかの参考ともなれば記者の望は足る。

何うで出たとこ勝負。また人間の智慧と云ふ奴が、公平なる批判だとか鑑賞だとか、其様な洒落臭いことが出来やう筈がない。蟲の居所次第なら、勝手な熱も吹く、出鱈目も云ふ、ヨタも飛ばす。分の好い人もあるだらう、悪い人もあるに違ひない。それは記者の筆の先の切

三世中村仲藏の門人、初名銀之助、のち四世中村仲藏襲名。大正四年七月死去。

喜撰は明治四十五年一月宮戸座演。

舞鶴堂といふのは、勘五郎が役者の傍ら經營してゐた骨董商の屋號で、お成道にあつた。

捨御免だと、豫め尻をまくつて置く。

したが芝居好冥利、新しいの古いのと好嫌をせず、こゝもと役者諸彦に、敬意を卸並の安賣と出掛けて、胃散代りの悪口だけは堅く差控えますこと、誓文々々。

元來これは日本中の役者の總まりをやる積りだつたが、何分にも數が多い。東京役者のうちでも所謂お名題さんどころで二三書き洩した人がないとは謂へぬ。況して大阪となると、腕利のうちにも洩れたのが大分ある。新派や女優と名のついた女の役者もさうである。これは無い袖は振れないやうに、見ない人のことは書けないのだ。また見たことがあるにしても、何も書くことの無い人もあれば、頭で顔さへ覺の無い人もある。尤も嚴笑のやうな立者も、有様は棕右衛門尙だ一度も見たことは無い。それで特にさる方から意見を借用することにしたと、念の爲、耻をさらけ出して置く。

二

一、中村勘五郎

舞鶴屋も近來滅切老込むで來た。もう六十になるだらう。古い勘チャンだ。

幾ら氣が若くても、白が齒洩れするやうになつては、役者にも矢張り年はある。

老込むでも、鍛へた腕前である。することなんか尙だく確なもんだ。藤娘なんか踊つても

顔さへ見なければ、有難い代物としなければなるまい。柄と顔は云ひつこなしにして、關兵衛などもその通りである。越後獅子や舌出し三番や、乗合船や、また此の春踊つた喜撰にしても、やれお手の物だ、軽いもんだ位のこと片附けて了つても、釣女では罰が當るだらう。尤も踊は舞鶴堂老人の御自慢物には違ひないが、皮肉で、枯れて軽いところに、鹽煎餅



でも喰べるやうな一種の味がある。何時だつたか、京人形の甚五郎を踊つた時に、舞臺で、團十郎や菊五郎の甚五郎は名人の甚五郎だが、私は勘五郎の甚五郎でございとやつたさうだ。大きに御尤のやうな皮肉である。

勘五郎には、どんな役をやつても舞臺を舐めてか、つてゐるといふ風がある。また他を小馬鹿にしてゐるやうな點もある、對手が對手だからと額をく、つてゐるのか、それとも藝に熱がないのか、但しは持つて生れた性分といふ奴か、左に右、大概の場合、「此の位の事にしておこうぢやないか」と謂つたやうな心もちを見せつけてゐる。それで投げてるやうに見える事もあれば、無精に見えることもある。勘五郎は何でも心得てる役者だと云ふ。然うらしくも思はれる。またナカク工夫もあれば癡りもあり、一見識ある役者だと聞いている。成程是も然うありさうに思はれる。しかし舞臺がお茶漬式にサラ／＼としてゐるので、

其が其だけに光らない。光らないが、出来ない奴が光り得ないのとは違ふ、何處かに巧いところがチラ／＼する。よし爲ることは爲ないでても、嫌なことを爲ない。また役が柄になかつたり、面白くなかつたりしても爲ることにソツが無い。勘五郎の舞臺は面白くないかも知れないが、其の役者ぶりには確に面白味がある。

其の柄を謂へば、小作りな、好いお爺さんであるが、舞臺ぶりが不思議に安つばい。白も然うである。顔も然うである。眼鼻立、輪廓、全てきり、つと引締つて、勘五郎の顔は決して悪い顔ではないが、奈何にも小作りに出来てゐる。駄目を押して云へば、役者の顔として全てが小さ過ぎる。加之勘五郎一流の皮肉が鼻頭にぶら下つて、眼から鼻へ抜けると云ふやうな慧しさが顔中に躍動して居る。それで舞臺の人體が狡ツ辛くもなれば、小意地悪さうにもなつて、頭から役を打壊して了ふことが少くない。いや、少し重いやうな役をするとな概さうだと謂つて差支へはあるまい。けれども其がまた勘五郎の身上だとも謂へる。勘五郎が重い役が出来ないと謂つて、格別勘五郎と云ふ役者の沽券にか、はりはしない。勘五郎には勘五郎の領分があり、繩張りがある。其の繩張うちでさへ活動したら、勘五郎の那の顔も、柄も、調子も、藝風も、彼是の詮議はいらぬ。

顔付から云つて勘五郎は、ナカ／＼きかぬ氣の爺さんらしい。そして役者中の冷笑黨らし

い。よし口に出さないとしても、その冷笑が腹の中で、ブツ／＼湯玉を揚げてゐると思はれる。それが顔に出て皮肉となり、素振に出て小馬鹿にしたやうな舞臺ぶりとなる。勘五郎が真劍で芝居をすることは、一年中に何度あるだらう。謂ふまでもなく、出来ないやつに真劍になられて、悪くいきむだ芝居を見せられるより、勘五郎の勘ちゃん式サラ／＼芝居を見せられる方が、いくら面白いか知れない。況んや風の吹き廻しで、偶時にはひねり屋さんの、ひねつたところを見せられるに於ておやだ。

其の得意藝を謂へば「毛谷村」の斧右衛門や「八百屋」の婆さんなどは動かぬところであらう。これは確に柄にある役である。「夏祭」の義平次や「四谷怪談」の宅悦や、松助の専賣のやうになつてゐる蝙蝠安、なども悪くはあるまい。見たこともなし、またやつたかやらぬか知らぬけれども「笠森おせん」の仲間市助などは、屹度好からうと思はれる。市助と謂はず、悪仲間などは全て勘ちゃんのお手の物だらう。一體に勘五郎は仲間と按摩と、仕出式の酔ッばらひが巧い。固い彌陀六など樂に行ける。宗清になつてからは、其の調子に云分があるにしても、彌陀六のうちには、あの小馬鹿にしたやうな顔付と態度とが利いて、確なものである。「逆櫓の松」の權四郎のやうな役は、些と空々しいにしても、先づ繩張りのうちへ入れなければならぬ。何時か伊達の毒茶と刃傷の、外記を見たことがあるが、柄は左にまれ、

八百屋の婆は仲藏譲りで當り藝であつた。宅悦も安も得意だつた。

好い型とは、わざと隙を見せて、力彌に脇腹を突かせる型である。

藝の力は強く、硬直な奥州武士の気分を出してゐた。

忠臣蔵で云ふと、伴内は無類、九太夫も本役であらう。師直も幅は無いにしても、歌六などよりも小意地が悪くて、齒切が好いやうに思はれる。本蔵は少々、人が悪くなるだらうが、爲ることは心得たものであらう。見ないけれども山科の力彌に突かれるところなど、勘五郎獨得の好い型があると聞いてゐる。

此の他、法界坊や、岸姫松の與茂作や、直助權兵衛、加賀騷動の大六、——然う云ふ役々も勘五郎一流の面白味を見せるに違ひない。見たいのは、この人の六法である。出る舞臺にさへ出たら、きつと取つて置きの秘藝をつくして、好劇家を堪能させることだらうと思はれる。何にしても、勘五郎は修業の積んだ役者である。人氣もなければ地位もないが、時流の圏外にあつて挺然として古格を守つてゐる古兵である。よし馬を陣頭に立てて叱咤する威望は無いにしても、兵法を諳んじて將軍の帷幕に參ずる資格は十分ある。

二、嵐璃珩

これも古い豊島屋である。大阪では丁度東京の松助のやうに、名人藝の折紙がついてゐる

大正七年十一月死去。

人だと云ふ。成程名人藝に違ひあるまい。そして藝の貫祿からいふと、或は松助などよりも上にゐる人も知れない。

璃珩ばかり云ふのではないが、全て斯う云ふ上手役者の古老になると、その藝の何となしに深刻なところがあるものである。殊に璃珩の藝には、骨を刺すやうな深刻なところがあるやうだ。

さればと謂つて璃珩の藝風は、苦つばいと、辛味があるとか云ふのでは無い。何方かと謂へば至つて尋常な方である。年の故でもあらうが、突つ込むところもなければ、激しいところもなし、おつとりとしてゐると謂へば、然うも謂はれる行き方である。それで何となし深刻なところがある。庵室のみを見たゞけであるが、清立は蓋し豊島屋の得意藝であらう。この清立を見て、自分は璃珩と云ふ役者は恐ろしい役者だと思つた。



近頃の言葉で云ふと、藝の力が自分を壓迫したのかも知れない。

「清立庵室」とは陰鬱な芝居である。見てゐると、息苦しくなるやうな凄惨な芝居である。璃珩の深刻な藝風は、またさう云ふ芝居をするに適してゐるのであらう。墓穴から脱出したやうな憔悴した姿、皸枯れた低い、しかしながら能く徹る白、どうかするとギロリと光る大きな

著者の見た璃珩の清立は明治四十四年一月東京新富座「見たま」を書いたもので見た。

若い時、五段目の勘平をして、箕に火がついて大火傷をした。それ以来、五段目の勘平はしてゐない筈だ。

八
な眼、その眼には、執着の凄いが籠つてゐるやうであつた。そして此の眼は、璃珩といふ名人藝の役者の眼と云ふよりも、清玄其の人の眼を見るやうであつた。眼ばかりでなく、その舉止、その氣込、璃珩の清玄は、その魂まですっかり清玄になり切つてゐるやうであつた。至藝と云はなければならぬ。神品と云はなければならぬ。

清玄の外に、此の人の勘平は有名なものである。佐野源左衛門も得意藝だと聞いてゐる。また團七九郎兵衛のやうな役も結構なものだと聞いてゐる。何にしても藝の範圍が廣い上に顔も柄も融通の利く方であるから、立役、敵役、老役、重い役、軽い役、江戸狂言式のものを除いたら、一通り何でもいけるだらう。此の點から謂つても、同じ名人藝にしても、役者の格が松助よりも一二枚上にあるとしなければならぬ。松助には松助の芝居は出来ないが璃珩には璃珩の芝居が出来る。別の言葉で云ふと、璃珩の藝は座頭藝だとも謂へる。同時に重寶役者だとも謂へる。重寶役者ではあるが、しかし謂ふところの重寶役者ではない。璃珩の重寶には寂がついて骨がある。よし腰が曲つてゐないにしても、柄は小作りの方である。加之もう首も縮こまつてゐる。従つて押出しは見零らしい。それでゐて、瀬尾をやつても、「時雨炬燵」の五左衛門をやつても、何點かしつかりした重味の見えるのは、眞箇、藝の力とでも謂はなければならぬ。子供役者である時分に火傷をして、璃珩の片頬は引きつれて

あるといふ。その故か璃珩の顔は何となく怖い。怖いと謂つても赤面式といふのでもなければ、嚴いといふのでも無い。何方かと云へば、穩やかな顔立ちであるが、何處かにきつい點がある。名人式利かぬ氣が顔に出てるのかも知れない。役者の顔として璃珩の顔は大して好いと云へぬ。雖然自分の持つてゐる廣い藝を自在に使つて行くに、些の不自由もないやうだ。顔の輪廓と眼が割合に大きいのも一つの徳であらう。要するに璃珩は、小さく埋れた玉である。その光は餘り世に認められぬにしても、その質は貴い。着實な藝、穩當なる舞臺ぶり、年を老つて舞臺には力が無いにしても、玉は玉である。ゆかしい古風な味のする玉である。

三、片岡我童



土坊ツちゃんも何時の間にか立派な花形役者になつて了つた。我童は先輩福助と共に、東西を通じて花形らしい花形役者である。藝の好い悪いは假に暫く謂はぬとして、その役者ぶりは、福助と共に當代劇壇の花であらう。残念ながら東京には、我童、福助といふやうな、柔かな、そしてナツトリとした役者は居ない。

十世片岡仁左衛門の男、初め土之助。

この福助は今
の梅玉の事
である。

我童の朝顔が
東京の初役
は、明治四十
五年六月の歌
舞伎座。

同じテットリとしてゐると謂つても、我童は福助にくらべて餘程沈むだところがある。頭が
悪いと云ふから、その故かも知れないが、我童の美しい顔には、青ざめたやうな憂鬱な気分
が漂つてゐる。そして何となしうるほひがある。單に美しいとか男が好いとかいふ顔を求め
たなら、東京にも大阪にも、我童以上の首が幾つもあるだらう。雖然我童のやうに、柔かに
うるほひのある顔といふのは無い。我童の顔は自らなる藝術である。
我童は顔が美しいばかりで無い。聲も美しい。「朝顔」の露の干ぬ間の唄なぞを聞いている
と、眞んとに朝顔と云ふ女の唄を聞いてゐるやうで、シミ／＼哀れが感じられた。これは
然し、美音だとか、唄ひツぶりが上手だとかいふより、我童の聲の質に、朝顔の呼吸が通つ
てゐたとしてもいふ方が可いかも知れぬ。朝顔の唄ばかりでない。見なかつたが、與次郎の、
お猿は芽出度やの唄にしても、床の太夫顔色なしといふ位に振るつてゐたさうだ。唄ばかり
でない。白も美しい、そして優味がある。我童の顔が自ら藝術になつてゐるやうに、その
聲も又自ら藝術になつてゐると謂つて差支へあるまい。何にしても、我童の美しい聲の響
は、何時までも耳の底に残る。

我童は今のところ、顔と聲と役者ぶりとで持つてゐる役者である。よし朝顔のやうな頭拔
けた傑作があるにしても、藝は要するに未成品なるを免れぬ。五條の橋の牛若の如きは、踊
の無い人ではあり、勝手の違つた物に違ひないが、お目見得式の曠の役として、甚だ損な卦
であつたと謂はなければならぬ。東京人の第一印象とかいふ、喰付が悪いと直ぐに安く購つ
て了ふ。「双蝶々」の吾妻の如きは、決して未熟な代物では無かつたと思ふ。メランコリー
な顔が利いて、情もあり、うるほひもあり、科も柔で、我等甘い連中、好い吾妻だと思つ
た。尤も幾らか明治式の匂がないでは無かつたが、その故か世評は、喜多村臭いにして無慘
に片付けて了つた。どうも牛若が崇つたらしいやうに思はれる。

大阪でも我童のことを「仁左衛門についてゐては爲様がない」と云ふ人があるさうだ。一
應はお説御尤ものやうだが、當節、型崩しの爲勝手をやるのは仁左衛門に限つた事ではない。
又、仁左衛門についてゐるやうが、我童は我童である。我童には我童の天分がある。我流だら
うが未熟だらうが、我童は、型や藝から超越した或る優れた物を持つてゐる。それは我童自
身の體に附いた、自らなる藝術的の匂とか、気分とか云ふものである。

我童の役者修業には、大いに缺陷があるに違ひない。しかし、その舞臺ぶりには天才的な
閃がある。役者修業に缺陷があるから、役に出来不出来はあるが、天才的天分は、その
弱點を補つて玉と光る。

我童の東京上りは、要するに失敗に終つたらしい。來る時には前觸が可成騒がしかつたが

我童は明治四
十五年四月、
改名以後初め
て東上し、五
條橋の牛若
と「双蝶々」
の吾妻を勤め
た。

この仁左衛門
は十一世、我
童の叔父、昭
和九年十月死
去。

我童はその後
二三年にして
東上、今は殆
んど東京役者
になつてゐる

この時代の歌
舞伎座はまだ
松竹に屬して
ゐなかつた。

歸る時は煙の消えたやうなものであつた。人氣が思ふやうに無かつたので、座方が冷遇したのか、それとも我童の辛抱が足りなかつたのか、左に右二興行で飽氣なく歸阪して了つた。我童にしても歌舞伎座としても、餘り見切が好過ぎたやうだ。

口惜しいが、東京には若女形が拂底である。仁左衛門と云ふ眼の光る叔父さんも居ることだ。何うかして引止めて置くことが出来なかつたものだらうか。我童から謂へば、何も修業の爲た、役不足など謂はずに辛抱して居るべきだつたのだ。また歌舞伎座から謂へば、この天才的花形を仕立てて賣物になるやうにすればよかつたのだ。龜藏や國太郎の娘役では、歌舞伎座といふ大舞臺が些か貧弱になる。

我童の藝の量は豊富でないかも知れぬ。又藝の質にも熱せぬ果實のやうな、生々しい點があるだらう。しかし其の役者ぶりには優婉とでも謂つたやうな、一味深い味がある。よし何うかすると、小手先が悪く活躍して、狂人が蜂に刺されたやうに、ヂタバタすることもあつたけれども、其のしつとりした優しさは、荒き風にも耐えぬ雛罌粟といふやうな趣がある。要するに我童は藝の役者ではないが、役者らしい役者である。役者らしい、なつかしみのある役者である。そして其の天分に、藝より優れた或る何物かを持つてゐる。

四、淺尾工左衛門



工左衛門と云ふ名前は、昔は大きく光つてゐた名前だといふ。成程大きな役者らしい名前である。一體衛門のつく名前は、何となしにえらさうに思はれる。今でも歌右衛門、仁左衛門、羽左衛門、何れも好い役者である。尤も團右衛門、翫右衛門、薪左衛門

など、餘り好くない連中もあるけれども、是等は昔から三枚目格の名前としてあるから、幾ら名前の響が厳格でも、不思議にえらさうに思はれぬ。羽左衛門の歴代を初として、一二の例外はあらうが、全體何衛と云ふ役者には、大きな敵役が多いやうである。中島三甫右衛門、哥七、梅玉の兩歌右衛門、七代の仁左衛門、何れも敵役で名高い古名優である。

今の工左衛門は、何代目になるか知らないが、藝の質から謂つて、何うも工左衛門と云ふ柄ではないやうだ。藝の質を謂へば、今の歌右衛門などは、最も柄に無い名ではあるが、これは、役者の總巻軸ともいふべき地位に居るに免じて、先づ文句ないしななければならぬ。しかし工左衛門の工左衛門は少々困る。工左衛門と云ふ名が昔大きく光つてゐただけに變である。勿論恰憫でない賢太郎もあらうから、理窟から謂へば、左や右は無い譯だが、感じ

三世淺尾工左
衛門男、右團
次の門に入つ
て市川鬼丸と
いふ。
大正十三年死
去。

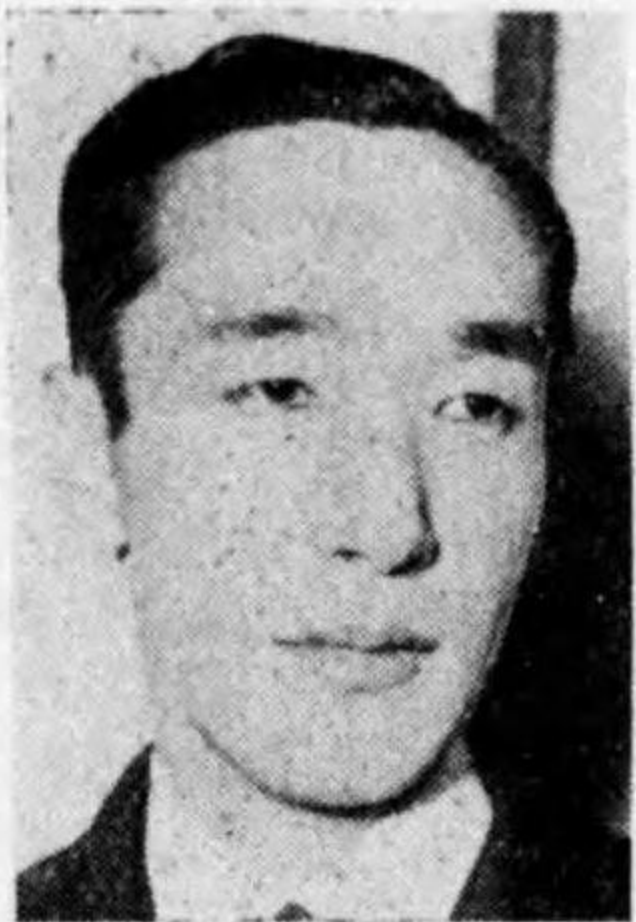
晩年には工左衛門も、老役や敵役を盛んに演じた。

といふ奴がナカ／＼皮肉で爲様がない。お世辭ツ氣のないところ、工左衛門は鬼丸で居れば可かつたのだ。藝も、柄も、貫祿も、何うしても工左之丞といふところである。幾ら何でもござれで、好い氣持にこなしてのけるにしても、根が二枚目どころの役者である。よし年をとつて艶が抜けたにしろ、鬼丸時代の色氣に免じて、工左衛門でもありますまい。名前なんか何うでもいゝとして、重寶と謂つて、こんな重寶な役者も、今時些つと珍らしからう。何でもやれるのが偉い役者としたらば、工左衛門は確に一流の偉い役者である。老役と敵役だけは、尙だ見たことが無いから何とも謂へないが、敵役でも星影土右衛門だとか提婆の仁三だとか、岩藤だとか云ふものなら、樂々としたものらしい。先づ忠臣藏で謂へば、九太夫と本藏と師直を除いたら、後はみんなこなす丈の腕がある。それから、頼兼も仁木も政岡も、尾上もお初も、八重垣姫も横藏も、伊左衛門も喜左衛門も、梅川も八右衛門も、治兵衛も孫右衛門も、お七もお杉も、松王も千代も相承も源藏も、伊右衛門もお岩も、光秀も十次郎も操も、鐵ヶ嶽も稻川も——並べたら際限はないが、大ざつぱに謂つたら、菊五郎畑の三尺物と、團十郎畑の活歴物と十八番物、加之熊谷とか、金藤次とか、御所三の辨慶とかいふやうな役々を嫌つたら、後の役は大概やつてのけると謂つて差支へあるまい。

藝の質は柔かな方である。そして、何をさせても然う拙くはないが、さればと謂つて工左衛門の何を見やうといふ物も無い。踊もある。型物もある。柄に些ツと品もあり、素顔は左にまれ、舞臺顔には今でも二枚目の骨相が備はつてゐる。それから、出来合ながらも貫目と云つたやうなものも無いではない。

工左衛門は自ら小芝居の座頭役者に出てゐる人のやうである。また古い旅役者としてもいふやうな芬のしてゐる人である。見て呉れの好い役者である。藝が薄ッぺらだ、役者が安つばい——一口に謂つてしまへば實も蓋もないが、左に右、工左衛門には工左衛門の味があり面白味がある。臭くても枯れたところがあり、嫌味でも練達老熟な點がある。

五、市川男寅



六世市川門之助男、いま市川男女藏と改名。

男寅も子供ばなれがして、ソロ／＼力彌役者になりか、つて来た。同時に那の凛々しい美しい、響のある聲がつぶれて、悪といふ字がつくやうになつて来た。生理的現象だから爲方がないが、何だか無惨なやうな氣がする。男寅の爲ばかりでなしに、何うかして那の美しい聲を回復させたいものである。父門之助は、舞臺姿が淋しいので、損をして

市川男寅

此の春とは、大正二年正月の市村座。吉右衛門の「五斗」に男寅は龜井六郎を勤めた。兒太郎とは先代中村福助。

るる役者である。何となしに出雲々々として固いとこがあり、野暮つたいとこがある。それと違つて男寅は、スツカリ江戸の水で洗ひ上げられて生れて来たらしい。顔も粹なら、舞臺姿もスツキリと水際立つてゐる。此の春の市村座の龜井六郎など、調子やこなしは水つばいものであつたにしろ、顔や姿に惚々した紅い見物も少くは無かつたらう。

男寅は兒太郎ほど純な、おつとりした點はないが、しかし餘りこせつかず、伸々した點がある。その舞臺ぶりに、何となしに若様らしい點がある。先づ能く培はれてゐる花と謂はなければなるまい。

父門之助は、或る一部から名優門之助と謂はれてゐるほどの上手役者ではあるが、人氣の無い役者である。また藝の質や柄、顔から謂つても、人氣の出さうな人ではない。

男寅はさうではない。男寅の柄にも顔にも、まだ／＼出来ては居ないが、藝の質と謂つたものにも、何となし人氣の出さうな資格がある。否、或はもう出つ、あるのかも知れない。繰返して云ふ、男寅は屹度遠からぬ將來に於て、人氣役者となる役者である。これが餘り獨斷的ならば、然う云ふ資格を持つた役者だと云つて置く。強ち若いからと云ふのではない。其の役者ぶりに然ういふ華麗な、活々とした色が漂つてゐる。

男寅は役者ぶりから云つて、遙かに父に優つた役者である。しかし父ほど實質のある役者

現代中村歌右衛門の男、のち中村福助。昭和八年八月死去。

に、なれるかどうかは保証の限りでない。だが其は勉強次第である。修業次第である。女に中毒せず、慢氣と云ふ奴を封じたら、男寅の前途は頗る多望と謂つて差支へ無いやうだ。但し男寅は瀧の屋の太夫となる柄ではなく、若衆役から立役の方へ出て行く役者らしい。

六、中村兒太郎



おつとりとしてゐると謂つて、此の位おつとりとした子役も珍らしからう。おツと、兒太郎は、もう子役とは謂へぬ。男寅同様、スツカリ聲がつぶれて、これまた恐ろしい聲變りである。聲は變つても、矢張りおつとりとしてゐる感じが好い。兒太郎は、おつとりと謂ふ言葉の象徴のやうな役者である。おつとりしてゐると謂つて、兒太郎の舞臺は、凡クラといふのでもなければ、無器用者といふのでも無い。眞に好い意味に於て、おツとりしてゐるのである。名づけて藝術的おつとりとでも謂はうか。おツとりしてゐるので、兒太郎の舞臺には氣品があり、匂があり、味がある。

自分の見たうちでは「女楠」の正行などは、荷が勝ち過ぎて、只鷹揚にやつてゐたといふだけで、格別何うといふことは無かつた。が、「志度寺」の坊太郎、「先陣館」の小四郎、「蘭

平物狂」の繁藏「宗吾子別れ」の彦吉「男重の井」のおさん、「春日の局」の竹千代、——是等子役としての大役は夫々に爲出來して、何れも寧馨兒たる面目を發揮したと謂はなければならぬ。

「戻り駕」に
禿をつとめた
は、大正二年
一月の歌舞伎
座。

此の後は解らぬが、兒太郎は今もなほ可憐なる寧馨兒である。聲こそつぶれたれ、春狂言の「戻り駕」の禿など、少し脊が伸び過ぎてゐたやうではあつたが、其の顔、その姿、楚々として大いに兒太郎黨を悦ばせたものだと思ふ。身の構へ、こなし、殊に歩き振りの如き、スツカリ歌右衛門式であつたのは争はれぬものである。

育ちの故か、それとも天性か、兒太郎の舞臺はおツとりとしてゐると同時に、大人のやうな沈んだ落着がある。それが企んだのではなしに、自ら備はつてゐるのだから、見榮もあれば床しくもある。

兒太郎は、何となしに親しみのある床しい役者である。そして、いたゞしいやうな點もある。多分藝の質にも役者ぶりにも、圓く柔かなところがあるからであらう。また其の舞臺ぶりに、子役に共通な小ましやくれたところが無いからでもあらう。

顔から謂つても兒太郎は、父歌右衛門のやうな、貴族的の氣品と美しさは無いにしても、昔の雛でも見るやうな、ふツくりした可愛らしさがある。父歌右衛門は端麗優雅とでもいふ

べき風格であるが、兒太郎は豊麗でもあり、悠揚としてゐる。氣高さに於て兒は到底父に及ぶべくもないが、柔かさと、悠揚たる點に於て或は父に勝るかも知れぬ。父は若い時分から其の氣分は冷なところがあるが、兒は暖である、何處までも穩である。父の調子には凛として犯し難い點がある。兒の調子には何處か茫漠としたところがある。概括して謂へば、兒太郎は種々な意味に於て父歌右衛門より多く、祖父芝翫に似通つた點があるやうに思はれる。祖父芝翫は、茫漠として大きな、感じの好い役者であつた。兒太郎の舞臺ぶりは尙だ大きさは無いにしても、茫漠として感じの好いところがある。其の他の役者ぶりの穩なところも豊麗なところも、ただ祖父芝翫に似てゐるやうに思はれる。只しかし顔だけは絶対に男性的であつた祖父芝翫よりも、父歌右衛門の系統を引いて女性的である。

梅檀は嫩より芬しいといふ。兒太郎は、その才氣に於て、はたらきに於て、芬しいとまで謂はれぬにしても、其の風格に於て、梅檀の若木と云ふやうな感じのある役者である。將來歌舞伎劇壇の爲に、偏に父歌右衛門の周密嚴格なる指導、扶育を俟つ。

七、片岡千代之助

千代之助は仁左衛門の祕藏ツ子である。東京に於ける初お目見得に、孫のやうな私の悴で

十一世片岡仁
左衛門男。昭
和六年片岡我
當と改名。



二〇
ございますと紹介された仁左衛門の一粒種である。その頃は未だチヨコンとして可愛らしい子で、見たところ到底舞臺など踏めさうになかった。それが「櫻しぐれ」の丁稚豆太で山椒は小粒でもといふところを見せた。それから父と共に歌舞伎座に出て「恨

鮫鞘」のお半で、大いに巧者ぶりと伶俐ぶりとを發揮した。以來千代之助は一役毎に英才的天分を流露して、少々ならずヤンヤと謂はせてゐる。
千代之助と謂へば、誰でも直ぐ伶俐と云ふ。伶俐と云ふ言葉は千代之助の代名詞のやうになつてゐる。其の舞臺ぶりを見ても、千代之助は確に伶俐過ぎる位伶俐である。才氣が逆る、慧しさが閃く。何うかすると小面の憎いやうなこともある。
蛇は寸にして其の氣ありと云ふ。千代之助を見ると何んだか其様な感じがして、一緒に芝居をしてゐる大人が馬鹿に見えて爲様がない。ふざけて謂へば、大々的凸坊で、爲ることに全て奇抜の氣が溢れてゐる。

千代之助は大人を子供にしたやうな役者である。舞臺に油断もなければ隙もない。それで舞臺が小氣味の好いやうにキビ／＼してゐて、少しの滯滞もなければ、抜目もない。伶俐ばかりでない、天性器用だからでもあるらしい。

この双蝶々は
明治四十五年
四月の歌舞伎
座。

千代之助は聲色が巧いといふ。殊に歌六のなどは甚だ振つたものだといふ。然うかも知れない。去年歌舞伎座の「双蝶々」の時に、何とか云ふ丁稚になり、羽左衛門を當込んで盛綱の首實驗のところをやつて見せ、大いに笑はせてゐたが、自分は笑ふよりも、何だか恐しいやうな氣がした。眼から鼻へ抜けるやうなその器用な舞臺ぶりに脅かされたのである。英才千代之助は、どんな役者になるだらう。些つと考へさせられる。その柄と云へば、カリリツとして、噛めばカリ／＼音がしさに引締つてゐる。顔は寸がつまつて、丸まツちいが、慧智敏銳の氣が顔中に活躍して、舞臺をも人も、なめてか、つてゐるといふ風がある。柄こそ小さいが、千代之助の膽なかく、大きく出来てゐるやうである。舞臺度胸といふ奴が、好い役者になる最大條件の一つであつたとしたならば、千代之助の前途は刮目して見るべきものがある。否、其の潑刺たる才氣と役者ぶりとは、將來何事かを爲出来さずには置かないだらう。

十で神童、廿で才子、卅過ぐれば凡人、——と云ふ皮肉な名言がある。千代之助も父仁左衛門も、此の名言を胸に彫りつけて置いて貰ひたい。それが英才千代之助を大成せしめる最大要件であるらしい。

千代之助の舞臺ぶりは見てゐて面白い。巧者である。味をやる。それには、すべてに過ぎ

「先陣館」の
小四郎は明治
四十四年十一
月の歌舞伎座
「御牛」の竹
王は大正二年
一月の歌舞伎
座。

てゐるといふ言葉がつく。敢て過ぎたるは及ばざるに如かずとは謂はぬが、些か危険性を帯びてゐないとも謂へぬ。

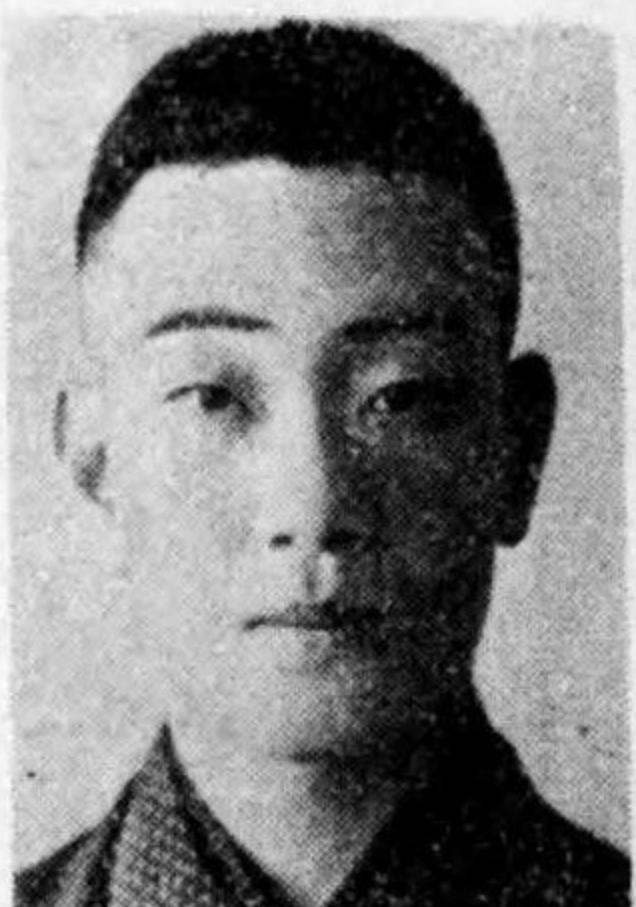
其の得意藝たる丁稚役は、須く謂はぬとして、ついこの間やつた「御牛」の、何とか云ふ子役の主人公にしても、また去年やつた「先陣館」の小四郎などにしても、餘りに役の性根が入り過ぎ、爲ることが大人の芝居に過ぎ、反つて衰氣も薄らげば、感動の度も減じられた。千代之助にはもう少し兒太郎式茫漠としたところがあつて欲しい。

若い芽は何でも麗はしい。小四郎などをやると、品位も備はり、顔も姿も麗はしいが、小型の業物といふやうな感じがあつて新しみが無い。しかし幸にも愛嬌といふ天與の利器があつて、これが少なからず、人を引付ける魅力がある。英才千代之助は、大人を縮少したやうな巧者な役者である。雖然不思議に悪腕もしなければ、悪くこせつきもしないので、嫌味もない。こ、が千代之助の前途に矚目すべきところで、また役者ぶりに強味のあるところであらうと思はれる。左にまれ、千代之助は今のところ凡物ではない。

八、中村扇雀

雁次郎の二番目の坊ンちで、東京には馴染が薄い。去年新富座に来て「どんどろ」のお鶴

「どんどろ」
のお鶴は、明
治四十五年二
月、新富座。
雁治郎はこの
時代、また雁
の字を使つて
ゐた。



子役である。

父雁次郎は小手先の利く、役者ぶりのすぐれて好い役者である。扇雀も小手先が利く。そして役者ぶりも上方でいふところの鮮なものである。何んだか父の小さな影を見てゐるやうだ。殊に阿古丸の白の呼吸など、父にそっくりだと謂つて差支へない。教へも教へた、習ひも習つたといふのか、それとも自然父子とて争はれぬ奴か、一句一句刻みこんでゆく具合、音に少し濁つたところがあつたので、能く那如も似たものと思はれる。但し扇雀の舞臺ぶりは、父雁次郎よりは餘程凛として調子がある。白とてそうである。少年の聲だから甲高いといふのではなしに、扇雀の聲は雁次郎よりも朗々としてゐる。

雁次郎の役者ぶりは柔かで幅がある。扇雀には柔なうちに凛々しいところがある。此の相違を除いて、もう少しほかしをかけたなら、扇雀は實に父に似た子と謂はなければならぬ。藝も柄も各自で、親に似た子の少い役者のうちでは此の父子の如く似てゐるのは先づ珍らしい方と謂はなければならぬ。

伶俐な顔、柔かで、尋常な役者ぶり、舞臺の器用さ、扇雀は何となしに頼もしげな役者である。兒太郎、千代之助、扇雀——、年と藝に長幼はあるが、三名家に生れた三秀才、大正劇壇の若木の蒼として、特に珍重しなければならぬ。

九、市川猿之助



猿之助は、數ある役者のうちで、最も正則に學問をした人だと聞いてゐる。又若手役者のうちでも特に「若い」といふ冠がつけられた、若い猿之助と謂はれてゐる。更にまたある側では喜劇斗君と呼ばれてゐる役者である。

喜劇斗君に何も不思議はないが、しかし喜劇斗君の君には、寺島君や、波野君、守田君と

二世市川段四郎の長男。

猿之助の洋行は、大正八年三月出發、同年九月歸國。

「道明寺」の輝國は大正二年一月の歌舞伎座。

違つて、君の響に知識的の新しい響がある。確か去年の夏頃の事であつたと思ふ、若い猿之助君は、新人小山内さんと一緒に、歐羅巴へ劇研究に出掛けて、君の響を一層新にして來るとか云ふ噂が盛に傳へられてゐるが、それは何うやらお流れになつてしまつたらしい。だが新橋あたりへ發展のついでに、相變らずブランタンとかへは時に影を見せると云ふ。椋右が小耳に挟むのでは、ブランタンいふところは、新しい男女が、紅い酒や青い酒を飲み集るところだといふから、して見ると猿之助君は、尙だ若いと新しいの組を脱けないものと見える。

それは左にまれ、若い猿之助の役者ぶりも、近頃大分歌舞伎役者めいた色が出て來たやうである。此の春の歌舞伎座の「道明寺」の判官代輝國など、左右の沙汰はあるにしても、左に右大分納つた舞臺ぶりを見せてゐると謂はなければならぬ。

納つたと謂へば、猿之助は新しい人と云はれるに似ず、何處となし納つたとこのある役者である。必ずしも取澄ましてゐるといふのではないが、然う見れば、然う見えぬでもない。その人に接して見たら、何とだか分らぬが、舞臺の猿之助は無愛想で、おつにツンとしてござる。ツンとしてゐるのは猿之助の特長である。白く塗つても、紅く塗つても、また黒く塗つてもツンとしてゐる。笑つてもツンとしてゐる。泣いてもツンとしてゐる。

市川猿之助

「双蝶々」の團子山は、明治四十五年四月の歌舞伎座

去年の春だつたか、矢張歌舞伎座の「双蝶々」に、トリテキ團子山といふふざけた軽い儲役をやつて、大分大向から聲をかけられてゐた。些かツングリ氣味のある猿之助の柄から謂つても、篋り役だつたに違ひない、ところが此様な道化じみた役をしても、猿之助には矢張ツンと納つてゐるやうなところがあつた。顔付の故もあるだらう、白のメリハリの具合もあるだらう。また無遠慮に謂へば、年が若いと共に、藝に若いところがあるからには違ひないが、更に重なる理由は、猿之助の心もちとか性格とかに依りはしないかと思はれる。猿之助は所謂お坊様育ちで、眞ッ直に育つて来た人らしい。それで腹にわだかまりもなければ、邪氣も苦勞も、當氣とか山氣とかいふ奴もない。謂つて見ると、立てた棒のやうな人で、唯ツンベラと眞ッ直である。

それが舞臺にも現はれて、あやもなければ素ッ氣もない、しなもなければ曲もない、那のツンと納まつたやうな舞臺ぶりになるのでは無からうか。其の役者ぶりを謂へば、決して悪い方ではない。判官代輝國など、もう少し長があり、もう少しスツキリと、もう少し優美に、と慾はいふけれども、男前に於て、那の大舞臺に立つても申分が無いと謂はなければならぬ。只役者ぶりにも藝にも味がないから、しっくりと來ないのである。歌舞伎役者は頭に理窟はなくとも、役者に味が無ければならぬものらしい。

「狐喰」の獵人は大正元年十月の歌舞伎座

猿之助は決して不器用な人ではないやうだ。近いところで云ふと、去年師走、父段四郎と共に踊つた「狐喰」の獵人の出來榮を見ても其が解る。本人は息を切らして居やうが何であらうが、この獵人は血が躍つてゐる若人の生氣瀦刺たる踊を見せて、見た眼には頗る痛快に且つ振つたものであつた。勿論仕込まれた腕だと謂へば其迄のことだが、性得無器用な人に那の藝當、あのはたらきが出来るもので無い。だが然し、猿之助の舞臺ぶりは、何となしにぎぢない。舞臺に氣を入れても居れば、藝にも熱があるのだが、それでゐて面白味も薄ければ、勿論人を引付けるやうなところもない。そして稍もすれば素の猿之助が飛出して、役者ぶりを白ツぼくしてしまふ。白にしてもさうである。猿之助の白は、音に於て、調子に於て、又量も力も、悪聲揃ひの若手役者のうちにあつて、鐵中の鏘々とも云ふべき質のものである。雖然メリハリとか呼吸とかいふ奴に、ウツついたところがあつて、矢張、白ツぼいとかお若いといふ代物になつて、我等の耳に響く。力はあつても底力がない。幅はあつても上ツ滑りである。顔を謂へば、可成融通の利く顔のやうに思はれる。若衆方、若女形、二枚目、立役、敵役、三枚目——これこそ四通八達で、「千本櫻」で謂へば、義經、忠信、静、藤太、權太、お里、梶原、小金吾、若葉の内侍、小千、知盛、相模五郎——何でも向く。輪廓も造作も出來方を

謂へば確かに然うに違ひないが、遺憾ながら艶がないので、此の結構に出来た顔の價値が少なからず割引される。

要するに猿之助は、役者の質に於て修業に於て不足の無い役者である。しかし持つてゐる藝の光と、思つてゐる心もちとを絡めてしつくり舞臺に出すこつを得て居ない役者である。自分も齒痒いことであらう。見る方も物足らなくて仕様が無い。と謂つて、此のこつといふ奴は、理窟でなし、形でなし、教へられて得られるので無いから、皮肉で且つ惨忍な奴と謂はなければならぬ、眞の藝術家は誰も此の皮肉で惨忍な奴に惱まされるのだ。水中の月でも捉へやうとするやうな努力、苦悶、——其處に若い藝術家の悲哀がある。新橋どころぢやないだらう。

猿之助の舞臺ぶりには、熱もあり力もある氣込も努力も勇氣もある。しかし前述の次第、何か謂ふところのお目まだるいとこがあつて、尙だく感心する氣にはなれない。只悪腕をしないのと、嫌味がないのと、質に申分がないのと、そして猿之助一流、薪ざつばでも割るやうな小氣味の好い調子のあるのを敬重して、此の後の發展を期待しておく。最後に一句駄くつて、妄評多罪の代りとする。

牡丹その白きを愛す猿之助

十、市川新十郎



團七時代には新十郎も、今のやうにムズムズしてゐなかつたと思ふ。何うも此の頃藝がスツカリ寢込むで了つたやうである。團十郎の名言ぢやないが、立者ばかりで芝居が出来たもので無いのだから、お時節柄、足下などが奮發して呉れなくては困る。剣道の

九世市川團十郎の門。初め市川蝠之助、また團七、のち新十郎と改む。死去。

の極意は師範ばかりが能でない。

と謂つて人には能不能がある。新十郎とて何も後見役師範役にならうとて役者になつたのでは無からうが、種々の成行と事情とでそう成つて了つたらしい。自體團門の人は玉石混合で玉の方は頭抜けて光る代りに、石の方が徒にごろちやらしてゐる人が多い。

新十郎は道にこのごろちやら組とは謂へまいが、無論玉の方に編入する事は出来ぬ。謂はば宙ぶらりんの人で、何うにか成りさうで、遂に何うにもならずになつて了つた人らしい。それは、歌舞伎役者に大切な家柄に生れなかつた故もあらうが、又、柄や藝風の故でもあると謂はなければならぬ。

新十郎は役者ぶりの悪い役者である。悪いと云ふよりも安ッばい役者である。安ッばいと

市川新十郎

云ふよりも、燦んだ見栄のせぬ役者である。――さればとて影が薄いのではないが、何だか貧乏くさい。一言に盡せば、一體に調子が低いと云ふのであらう。

本役を云へば、端敵どころであらうが、踊もある、型も知つてゐる。嚴ましい故實にも通じ、市川流の荒事の心得も確だといふのだから、御免を蒙らせたら、團十郎系の物なら、殆んど何でも行く。柄と調子さへあつたら、當代の直實役者であらう。辨慶役者であらう。また仁木も男之助も、勝元も、高時も彦七も、梅王も松王も、吃又も河内山も酒井の太鼓も、やつて退けるのに何の苦もないことであらう。現に是等の役のうちには、やつたものもある。然し出来栄は甚しく芬しくない。

何しろ役者としての知識の充實した人であるから、する事も手堅ければ間違ひも無いやうである。だが芬しくない。生焼のかき餅でも食べる様に、當りも悪ければ味もない。悪くすると頭で役にならないことさへある。好い役者になるといふ事は、難かしいうちにも難かしいものらしい。役者の知識と藝ばかりで駄目なら、柄や顔や調子ばかりでも駄目、それを程よく運用する。才氣とか天分とかいふ大切な奴がなくては、折角持つてゐる寶も持腐にならうといふものである。

新十郎の舞臺顔は、松助程でないが、ナカ／＼狡ツ辛いやうに出来てゐる。雖然爲ること

は克明で、馬鹿ツ正直な百姓のやうにムツ／＼してゐる。謂はば、手織の木綿のやうな感じのする役者である。自分は寶の持腐で些ツとも光らないが、役には立つ。人の役には立つ。新十郎は遂に師範役で、樂屋で大切な役者らしい。

十一、中村翫助



新十郎を手織の木綿としたら、翫助は瓦斯双子とでもいふやうな質であらう。手堅さは左もあれ、舞臺では新十郎よりも、光りもすれば働きもする。

もう二十年の前の事であらうと思ふが、開盛座あたりで、先代左團次を張つた調子で、大分大きな役者になつてゐた事もあつた様な気がする。此頃では先代左團次張りがスツカリ抜けて了つた様であるが、それでも何うかすると、白の響か癖に、高島屋を思出させることもある。

白と謂へば、翫助一流の調子と響がある。幅もある。底力もある。調子が好いと謂へば然うも謂はれる。また翫助の役どころにしては、少々重ツくるしく堅過ぎると謂へば、然うも謂はれる。何にしても耳に立つ白である。そして、此の白は、翫助といふ役者が持つてゐる

四世中村芝翫の門。今の尾上鯉三郎の父。

死去。

この時代、歌舞伎座と市村座を駆逐して、敵役専門であった。

物具のうちで最も役にも立ち価値もあるものらしい。

元來翫助は、いッかりした、齒切の好い役者である。歌舞伎座に来る迄は、小芝居の立者として、腕の冴えてゐた方であつたが、その代りあくが強かつた。今でも満更あくがないではないが、先づ有るか無いか位までに抜けて来たと言はなければならぬ。其の代り役者ぶりが小さくなつたとも、軽くなつたとも謂へるかも知れない。しかし是は勤める役の故で、翫助自身、役者を小さくしたのでも軽くしたのでも無いだらう。

藝の質を謂へば、固い方で、役者ぶりにも骨がある。それが軽い三枚目どころばかりをやらせられるのであるから、役に依つては無理がないとは謂へぬ。無理は見えても、質を殺して、こなして行くだけの腕があるから、拙いの、柄に無いのとは謂へないが、何だか不足がある。突ツ込むで謂へば、藝の故か役者の故か、翫助の體がビタリと舞臺にくツつかない點が微見える。そして何うかすると、些と騒々しいこともある。また顔と首と眼のはたらきが小うるさく思はれることもある。一生懸命だからと謂へば然うも謂へるし、當込氣があるからと謂へば然うも謂へる。謂つて見ると、此ういふところに翫助は尙だあくの抜けきらぬところがあるやうだ。

沼津の安兵衛などは、歌舞伎座でさせられてゐる翫助の役として、何時までも眼にのこる

「沼津」の安兵衛は明治十四年四月の歌舞伎座。

「道明寺」の偽迎は大正二年一月の歌舞伎座。

「大和橋」の馬子は、明治四十二年九月の歌舞伎座。

當り役であつたと思ふ。近頃では「道明寺」の偽迎彌藤次などは、上出来との評判ではあつたが、何だか味が無く、安兵衛ほどの面白味は無かつた。只間違のないところを、親切にやつてゐるとしか購へなかつたが、或は此方の眼がどうかしてゐたのかも知れぬ。

「先陣問答」の軍内や「濱松屋」の番頭「桐一葉」の珍白、何れも面白くは見せてゐるが、それと同時に、夫々に不足があつた。殊に珍白の如きは、翫助は遂に三枚目役者でないと思はせたやうな、嫌な點が眼に残つた。それは、あの強味のある白の故でもあつたらうが、大體その舞臺ぶりに、あくが抜けてゐないところがあつたからではあるまいか。「大和橋」の馬子となると、これこそ翫助の柄にある役だから、恐らく市藏を喰つて、大いに小氣味よいところを見せるだらうと思つてゐるが、期待してゐた程のことも無かつた。尤も市藏に花を

持たせて、手加減してゐたと謂へば其迄のことである。脊こそ低いが翫助は、役者ぶりも悪くない役者である。眼はギョロリと光るし、藝もチラ光るし、何となしに上手さうに見える、また實際上手でもある役者である。だが、今の役どころで仕上げやうと云ふには、今一段の洗練を要するやうである。翫助は、藝が枯れか、つてゐて、未練にも枯れ得ないでゐる役者である。

十二、中村歌十郎



現中村歌右衛門の門。大正六年十一月死去。前名澤村春五郎。

寫眞は歌十郎の荒獅子男之助。

歌十郎は歌十郎では未だ通りの悪い向もあるかも知れぬ。歌舞伎座では未だ新参のほやくの方である。そして尙だ一度も是と云ふ役がついた事がない。

春五郎時代には、訥子門下として、山の手邊では可成賣れてたこともあつた。そして訥子の丸橋に、伊豆守と云ふやうな役どころをやつてゐた。

役者の質を云へば、立役らしい。立役も些と武張つた方で、袴姿がうつりも好ければ、役にもなる。春五郎時代の記憶によれば、舞臺ぶりにナカ／＼落付があつて、達者ぶりもしなければ、悪腕もしない。普通の意味で云ふ人柄な役者であつた。

歌舞伎座に来ては、その人柄などを見せやうにも、見せる役が付かないから、氣の毒のやうでもある。忠臣藏で謂へば、茶屋場の三人侍などが先づ動かぬ役どころであらう。しかし小芝居に出たら、ナカ／＼働ける役者である。また地方に出れば、歌右衛門の向に廻つても、武張つた立役ならば立派に間に合ふ腕前も儲もあらう。此の春の「生玉心中」の傳與茂などは先づ無難にしてゐたと謂はなければなるまい。

今のところ、歌舞伎の役者として此うといふところは無い。辛抱が出来たら見どころの役者のやうに思はれる。役者ぶりに嫌味の無いのも取得の一つである。

十三、尾上卯三郎



初世尾上卯三郎の門。

死去。

一風變つた役者である。舞臺ぶりに役者ぶりに、また藝の質にも卯三郎一種の味のある役者である。白にまで卯三郎獨得の調子がある。此の調子は誰にも真似が出来ないが卯三郎も又誰の調子を張つたといふでもなければ、誰の型をやつてゐるといふ

のでも無い。眞箇卯三郎の獨創にか、はるものである。白ばかりでない、卯三郎の藝風も、型も呼吸も、役に對する心得も、全て卯三郎が、自分の工夫で作上げた物でやつてゐる。得意の立廻りにしても然うである。腹の切り方も然うである。殺され方も然うである。落入る具合なども然うである。其の他眼の配り方も、腰の掛方にも坐り方にも、皆卯三郎一流の行方がある。

然う云へば、卯三郎に限らず、誰にしても然うだとも謂へる。しかし卯三郎のは、在來りの歌舞伎の型から脱却。脱却——といふより、寧ろ近づかず、力を借りずに、全て實事らし

尾上卯三郎

い、獨創的の仕草を以て、歌舞伎式の舞臺に調和させるやうにしてゐるのである。そして其は、物に依つては甚だしい失敗を見るのであるが、卯三郎といふ役者としては、大體に於ては成功してゐると謂はなければならぬ。

卯三郎は一流の工夫があり、才覚のある役者である。そして、此の工夫と才覚とで築上げた自分の物を持つてゐる役者である。天分があるかと云へば然うかも知れない。間違ひの無いところは、好い意味の上手役者、巧者役者であらう。

今の新派の頭領株のうちに、此の人の藝の呼吸を見て、少々ならず啓發された人もあるさうだ。また亡くなつた川音先生が、「大阪にして此の人あり」と感嘆して、然ういふ文字を現はした引幕を贈つたとも聞いてゐる。成程然う謂へば「大阪にして此の人あり」と謂ひた

いやうな役者ぶりである。質が確に東京向に出来てゐるやうだ。しかし川上の革新軍に加はつて、初めて東京に來た時には誰も卯三郎とは云はなかつたやうである。卯三郎が東京で、いくらか芽をふきかけたのは、松竹の手で延二郎等と一緒に、新富座に來てからであらう。歌舞伎座へは松助の穴を埋めに迎へられたといふ噂であつたが、それが眞んとすれば、卯三郎も所を得たものと謂はなければならぬ。

松助の穴に迎へられたと謂つて、卯三郎に松助の替役が出来るといふので無い。成程出来

明治四十三年
五月、新富座
へ登場。

「菊畑」の湛
海は、大正元
年九月、歌舞
伎座。

「道明寺」の
兵衛は、大正
二年一月の歌
舞伎座。
「生玉心中」
の長作も右に
同じ。

「浮名巽」の
丈左衛門は、
明治四十五年
六月の歌舞伎
座。

大野道犬は、
「新難波戦記」
大正元年九月
の歌舞伎座。
「四千兩」の
六兵衛は、大
正二年十月の
明治座。

るやうな役もある、が頭で御相談にならない役も少くない。必ずしも卯三郎が松助よりも役者が悪いと云ふのではなしに、松助と卯三郎では、藝も柄も、舞臺に於ける心もちも違ふ。もし松助であつたならば「菊畑」の湛海にしる「道明寺」の土師兵衛にしる、那程に他と不調和の無臺ぶりを見せない。代りには「生玉心中」の長作らしい長作や「浮名巽」の丈左衛門のやうな役になると、眼の卑しい一種の人間味、とでもいふやうな味は、松助には到底出し得ないかも知れない。時代物で云ふと、大野道犬の如きも然うである。道犬は卯三郎の特色を發揮した役の一つであらうが、那が松助であつたら、所謂御苦勞様に屬する役になつて、面白くも變つても無かつたらうと思はれる。

もし二人に共通したとことか、似よつたとこがあると思へば、無論味は違つてゐるが、二人とも其の役者ぶりに人間味と云ふやうなものの出でることである。

松助に比べると卯三郎は、全て調子が低いやうだ。それでその舞臺ぶりに卑しげなところがある。然かと思ふと、また實體なところが有り、ボク／＼してゐるところがある。そして衰氣なところもある。御金藏の富藏の女房の親、六兵衛のやうな役にそれが見える。此の六兵衛は書下しの時は松助であつたと云ふが、出来不出来は左もあれ、松助には卯三郎ほどの衰氣がなかつたやうに思はれる。それから恍けたやうなところのあるのも、卯三郎といふ役

者の一つの味ひになつてゐる。

「双蝶々」の相撲場に出る、何とかいふ茶屋の御亭などは、役としては其の例であるが、役に拘らず、卯三郎の役者ぶり、または舞臺ぶりに、幾分恍氣があるやうだ。

敵役として悪の質を云へば、圖太いとか根強いとか——謂つて見ると、國崩し式の大きなところもなければ、たけぐしい點も、鋭いところも、また狡ツ辛いところも無い。だが何となしにねついいところがある。文字で現はせば、佞といふ質である。それに陰險な分子も加はつてゐる。當りは荒くないが、對手にしたら嫌らしい奴と云ふ方の質である。

舞臺は静かで、落付もある。一體芝居式の芝居をせぬと云ふのが卯三郎の價値ともなつてゐる。従つて、何様な舞臺でも、調子を張つたり、調子に乗つたりする様なことは無い。一體卯三郎は一流の氣合とこつで、巧むと見せず、巧むだ芝居をしてゐるのだから、張合のないやうな事もある代り、騒々しいやうな事は勿論、うるさいと思はれることも無い。何時も同じやうな心もちで靜に落付いてやつてゐる。その故でか、卯三郎は年より老人じみた役者に見える。

また實力から謂つて卯三郎は老練役者と謂つて可いやうだ。しかし此の人にして、尙だあゝの抜け切らぬところのあるのは、何うしたものだらう。あくといふより、一種の、一方臭

かも知れぬ。何か知らぬが卯三郎の舞臺ぶりには、何となし俗つぽいところがある。嫌味でもなければ、臭味でもなし、要するに只何となしに俗つぽいところがある。そして工夫にも過ぎたるは及ばざるに如かずとも謂ひたいやうなことが、チラ／＼見えぬでない。卯三郎は其の工夫にも、また藝にも、尙だ／＼一段の醇化といふ奴が要求されるやうである。よし其にしても卯三郎は、當代に於ける際立つた特色のある役者である。其の品質は高くないにしても、得難い器だと謂はなければならぬ。頭のギリ／＼から足の爪先まで、自分の工夫自分の藝で芝居をしてゐるだけでも天分のある役者だと謂へる。

十四、坂東三津五郎

十二世守田勘
彌の男。幼名
坂東八十助。



三津五郎は、大人を子供にしたやうな役者で、何となしに可愛氣がある。顔も然うなら、白も柄も然うである。

幾ら柄が出来てゐると謂つて、三津五郎の舞臺ぶりは、何うしてあゝ子供ツぽいのであらう。子供ツぽいと謂つて、何も藝が子供ツぽいのではない。藝はずんと大人びてゐる。藝の出来てゐることから云へば、三津五郎は確に若年寄の資格がある。

坂東三津五郎

三津五郎は、藝の出来てゐる役者である。役者ぶりにも、舞臺ぶりにも、もう小さく固つてしまつたといふところが見える。それで大人を子供にしたといふやうな感じもするのである。此の人に勘彌の長さと、菊五郎の肉を少しづつ、分けて遣つたなら、三人共に好い役者ぶりになれたらう。

子供つぼくても、小作りでも、三津五郎には些ツと小意氣で、又いなせ、と謂つたやうな姿がある。それで、紺のはつぴに股引、豆絞りの手拭を肩にかけたやうな扮装が、ナカ／＼好く似合ふ。遠に江戸前である。袴姿は尙だ／＼然うでもないが、烏帽子に狩衣、または素袍、其の他少し華美な時代の扮装をすると、不思議に山車人形のやうになつて見える。鎧姿も敦盛位のところを除いたら、後は大概然うだと云つて差支へない。

下品だといふのではないが、三津五郎は舞臺ぶりの引立たぬ人である。貧相だといふのではないが何だか淋しい。調子の悪いのは八十助時代から、心配物になつてゐたのだが、今となつて何うにもならず了のやうである。惜しい役者である。敢て惜しい役者だといふ。もう少し調子があり、もう少し柄があり、もう少し艶があつたらは好子は使道の廣い人である。ナカ／＼働ける役者であるのだ。何うかして顔なりと、もう少し大きくなつて欲しかつた。藝の質を謂へば、當氣もなければ悪腕もしない。地道で温順な方と謂はなければならぬ。

是、好は三津五郎の俳名。

そして何をさせても拙くない。柄の領分も廣い。若衆役、女形、立役——忠臣藏で云ふと、師直と九太夫さへ嫌つたら、後の役は何でもやれる。世話物も好い。デン／＼物も行ける。源藏も、松王も櫻丸も、千代も、やらせたら八重もやる。岩永も重忠も、阿古屋もやれるだらう。八重桐や源七や狐忠信や吃又のやうなものであつたら、お手の物に近いと謂へるだらう。また佐野次郎左衛門といふやうな役もやつたことがあれば、福岡貢などもやれるだらう。

踊は殊に三津五郎の身上になつてゐる。菊五郎と双人で若手の双壁と極印が打たれてゐる。巧いとか上手とか云ふ、素人眼で見た詮議を通り越して、専門家にその格とか質とかを糺さなければならぬ位のものであらう。

専門家とか、眞んとに眼のある鑑賞家が見たら、何うか知らないが、素人眼には形にも動きにも間然するところが無いとして、氣込とか氣合とかいふものは是好式細心に過ぎるところがあつて、踊りを小さくしてゐるやうであらう。柄が小さいと云ふばかりでない。踊つてゐる心もちに何か障があつて、混然としてゐるといふ風がある。手がひらききらぬといふのでもなし、足が伸び切らぬといふのでもなしに、何だかノビ／＼しないところがある。で見えて巧いと感じながらも、何と無しに窮屈な感じがする。これを繪で謂つたならば、三津五郎の踊りは描方も緻密なら、線も柔かで綺麗ではあるが、彩色に榮えぬところがある

も云ふのであらう。

踊は正しく踊るべきものであらう。しかし芝居の舞臺は、大勢の眼を引付けて置かねばならぬのである。少しは嶮道を歩むでも、華美でありたい。活々としたところを見せて貰ひたい。

踊以外の役々とても然うである。親切に間違の無いやうなところを見せるのも結構であるけれども、それには先輩がある。老人がある。三津五郎の舞臺ぶりは老人じみてゐるとまで謂はないが、何うも活々してゐない。三十九ちやもの、花ぢやものといふことがある。況んや、九には大分尙だ間が有るのだ。もう少し華美であつて貰ひたい。しつこく云ふ、もう少し活々とする工夫をして貰ひたい。

三津五郎は役者ブリで、損をしてゐる役者である。そして實力のある割合に光り得ぬ役者である。氣魄に乏しいからだ。こゝに云ふ氣魄とは舞臺に於ける度胸と、氣込みとを意味するのである。三津五郎にこの度胸と氣合とがあつたら、那の柄にも幾分儲がつき、幅があるやうになるだらう。白の如きもつぶしてつぶして、潰し切つて了ふ位の勇猛心を起したら、何うにかならぬではあるまい。死中に活を求めると云ふこともある。是好子の奮勵を望む。

十五、市川市十郎



父市十郎は眼も顔も柄も大きな役者であつた。押出しは立派すぎる位立派な座頭式の役者であつた。得意藝は石川五右衛門で、小紅屋の五右衛門と謂へば、東京大阪よりも、日本中の津々浦々に知れ渡つてゐると思ふ。東京にも春木座の烏熊時代に來たこと

がある。

父に比べると、市十郎はすべて役者ぶりが貧弱に出來てゐる。似てゐるところは眼の大きなところ位なものであらう。

市十郎の顔は、腮と頬の間隔と、そして其の間隔ぶりに特長がある。悪い顔ではないが、見栄えのせぬ顔である。柔味がないではないが、うまみの無い顔である。白く塗れば塗るほど間の延びたとこのあるのが眼につく顔である。

團吉と謂つて、東京座で逢州などをやつてゐた時代には、顔にも、柄にも、又舞臺ぶりに、もう少しふつくりしたとこがあり、華麗なところもあつたと思ふが、此方の見當違ひであつたらうか。

市川眼玉の男。幼名市川團吉。

父の市十郎も大正三年四月に東京へ來た。

東京に來たのは何でも團十郎をたよつて來たのだと聞いてゐるが、歌舞伎座にゐたのは、眞んの間であつた。その後東京座を初め、二三の小芝居を廻つてゐると思ふうち、何時か明治座の役者になつて了つた。市十郎と云つたのは一昨年頃のことであつたと思ふ。

「眞田」の速見甲斐守は、大正元年十月の本郷座。淡路守、登之助は大正二年一月の本郷座。

明治座は勿論、小芝居でも自分は尙だ市十郎の芝居といふほどの芝居を見たことが無い。明治座では「金閣寺」の加藤とか、「曾我」の小藤太とか、「毛拔」の春道とか、「忠臣蔵」の石堂とか、「天狗高時」の安達某とか、自分の見たうちでは是等を重なる役として、後は大概、所謂御苦勞に屬する役ばかりのやうであつた。去年本郷座の「眞田」で速水甲斐守になつたなごは、大役であつたと謂はなければならぬ。今年矢張り同座の「大石内藏之助」に脇坂淡路守だとか、矢頭長助だとか「湯殿の長兵衛」に近藤登之助だとか、ナカ／＼働ける役を勤めて、三月にはまた「ベニスの商人」にアントニオ「室町御所」の主水助とか笛吹く男とか些ツと儲るやうな目につく役をやつてゐた。

左團次組が本郷座に出るやうになつてから、市十郎は役の上で大分芽がふいて來たやうに思はれる。矢頭長助などといふ老役は無論大した役ではないが、氣を入れて好くしてゐた。登之助やアントニオや主水助にしても然うだと謂はなければならぬ。しかし此様な役よりも、自分が最も感じたのは「ドン底」の役者である。「ドン底」の此

「ドン底」の役者は、明治四十三年十二月の自由劇場。

の役者を見た時に自分は、市十郎の此の一役だけは立派に役者としての生命があると思つた。行詰つた死ぬ役者の氣分が能く現はれてゐた。

最後に何か言つてドン底を出て行くところなどは死に行くといふ心持なり、態度なりが鮮かに浮いてゐた。正直に云ふと自分は、この「ドン底」の役者以來、市十郎が好きになつた。そして何様な役に拘らず、また何様な芝居に拘らず、市十郎の舞臺ぶりを注意して見るやうになつた。

普通の芝居では、市十郎は尙だ此うと取立てて謂ふほどの腕前も特色もないやうである。拙くもなければ巧くもない。謂つてみると、普通に出來た役者のやうである。只何様な端役をやつてゐても、おろそかに取扱はぬだけが美點のやうに思はれる。

若女形も行く。「御所三」のおさわのやうな役もやつた。矢頭長助と云ふやうな老役も當てて見せた。速水甲斐のやうな固い役や、登之助位の悪も行く。殿様ぶりも悪くない、先づ可成はたらけると云ふ質の役者のやうである。と謂つて達者なところがあつてもなければ、嫌味も癖もない。麥湯の様な感じのする役者である。只聲に市十郎の音とでも云ふやうな一種の響がある。それは筒拔のしたやうな、ボヤケた、しかも苦々しい、力のない響である。繰返していふ。市十郎は嫌味も癖もない代りに、尙だ市十郎といふ役者の味を出して居な

今は小劇場に折々顔を見せてゐる。

い役者である。従つて興味も薄い役者と謂はなければならない。

十六、市川蕙女

先代市川左團
次の門。初め
澤村曙山。



女形の古株である。殊に今となつては、老女役は殆んど此の人の専賣と謂つて差支へあるまい。本役は内儀役と云ふところであらう。

女形と謂つても、蕙女は芝居道で云ふ三姫どころや、お染やお駒といふやうな娘役は頭から柄にないやうである。年の故もあらうが、顔や柄の故もある。第一には藝の質にもあるらしい。

さればと云つて梅幸に見るやうな意氣なところも無ければ、源之助に見るやうな傳法肌のところも無い。蕙女は顔の感じも固いが藝も固い。これを眞んとの女にしたら、女と云ふよりも、男といふ感じのする女であらう。色氣が無いからである。艶と優しさに乏しいからである。門之助となると淋しいは淋しいにしても、何んとなしに顔にも體にも色氣がある。それで時姫にも薄雪姫にも、また娘役にも嫁にもなれやうといふものである。蕙女には嫁も、花魁も難しい。何うしても老女役と内儀役だけと嚴重に役に繩張をさせられて了つて、それ

から一步も出ることが出来ぬらしい。當代器用揃ひの役者のうちでは、珍らしく窮屈な人だと謂はなければならぬ。

前から餘り舞臺の榮えた人ではなかつたが、此の頃は殊に滅入つてゐるやうである。左團次一座には大概加はつて此の人の役どころらしい役をやつてゐる。それは先代左團次の時も變りは無いやうである。

去年は宮戸座で大分働いてゐた様である。お岩や朝顔や「酒屋」のお園や、種々やつてゐたが、お岩は左もあれ、お園や朝顔は婆あじみて、爲ることにそつはないにしても、要するに老女の粧である。

「どんどろ」のお弓などは間違の無い、此の人の役である。「乳母争」の秋篠や「志度寺」のお辻のやうなものも、此の人のものとして一幕出せると謂はなければならぬ。役の領分こそ狭いが、今となつて心得ある、老巧役者の一人である。

舞臺ぶりを謂へば、何んとなしに、お品の好くない人である。「大石内藏之助」の妻およしや「市若腹切」の尼などは、正札の附いた此の人の役でありながら、何だか安ッぽくて有難く頂戴する氣にはなれない。お弓や秋篠などを見ても然うである。腕はあるのだから、一應は面白いと感心もする。大向から、高島屋と聲もかゝるが、誰にも云ふことだが何うも味

今は大坂にゐる。

といふ奴が無い。そして何役に限らず、動にぎごちないこと、骨ツぱいところがあつて、砂利の飯を食べてゐるやうな心もちがする。損な役者である。薙女は女形として固い役者である。藝もあり、柄もあるのだが、悪く固つて了つたとしてもいふやうな感じのする役者である。一言にして盡せば見てゐて餘り面白くない役者である。

十七、市川小團次

名人市川小團次の子。



名優小團次の實子である。家柄の尊ばれる歌舞伎役者のうちでは、筋目の良い人である。そして今では市川家一門隨一の古老である。

死去。

柄の小さいせるか、それとも先代左團次の大高島屋に對して謂つたことか、何んだか知らないが、大向ふではこの人に小高屋と聲を掛ける。若い時分から人氣は可成あつた人のやうである。端的に謂へば、小團次は人氣と筋目で好い役者になつた人だとも謂へる。振附師にならうとした程の人であるから、踊は確かな人のやうである。所作式のもの小團次の得意藝になつてゐる。また事實輕妙なところもあるやうだ。藝の區域はナカ〜広い。従つて役の領分も多い。世話物は筋目だから、先づ是を本藝と

法界坊はこの人の當り藝であつた。

して型物も行く。近頃は義平次婆々とか「安達ヶ原」一ツ家の岩手とか云ふ世話時代の老役で大いに振つたところを見せてゐるが、若い時分には若衆役も二枚目も行つたやうである。またケレン物に行く。法界坊や小幡小平次といふやうなものも此の人にある役であらう。佐倉宗五郎なども領分内のものであらう、そして幻の長吉も行けば、甚兵衛も行く。その他一役を擧げて謂へば際限はないが、女の方を除いたら、忠臣藏の役々「千本櫻」の役々は、善い悪は云はぬとして、大概やつたこともあれば、またやるだけの伎倆もあるやうだ。それから直侍もやつたことがあれば、花川戸の助六もやり、また左團次畑の大川友右衛門のやうな役も近頃やつた。

概括して謂へば、所作も、型物も、三尺帯も、老役も、敵役も、立役も、可成自由自在にこなせると謂はなければならぬ。そして役者の質がよくとも悪くとも座頭どころに出來てゐるやうである。

その藝の相を謂へば、團十郎前派に屬するやうである。歌六ほどでは無いにしても、小團次の舞臺ぶりには古い芬がある。古格を守つてゐるか何うか知らないが、何處やらに江戸時代の役者の俤が微見える。或は此方が然う思つてゐる故かも知れない。

役者ぶりはお世辭にも好い方とは謂はれぬ。第一背の低いのが、大きな損である。父小團

次も背の低い役者であつたと云ふから、それに似たのであらうが、幾ら名優の親でも此様なところは似なくとも可かつたのだ。顔が比較的大きいから、坐つてゐるか、老役でもしてゐると然うでも無いが、衣冠束帯、狩衣、素袍、鎧袴、然ういふ着付の時には、随分形の悪いこともあれば、貧乏めたく見えることもある。小團次は背が低いばかりでなしに、體に品がないので舞臺が引立たぬ。

顔にしても然うである。眼つきか、頬のあたりか、その舞臺顔が何うかすると、錦繪で見ると父小團次に似てゐるやうに思はれるが、それにしても何んだかせいこましく、不細工に出來た顔と謂はなければならぬ。役者は化物だから、顔なんぞにかけかまひはないと謂ふが、それは頭抜けた名優にいふことである。小團次は老練な役者には違はないが、顔にかけかまひがないといふ程の名優ではない。従つて顔でも損をしてゐる役者と謂はなければならぬ。寸のつまつた顔、尖りがあり嶮しさに見え、それでクシャ／＼したやうな顔、——政治家家では島田三郎が此ういふ顔をしてゐる。島田三郎もチヨコ／＼した點のある人だと聞いてゐるが、小團次も舞臺では可成チヨコ／＼した人である。

小團次は家にゐると、恐ろしく性急の人だといふことを、何かで見たやうに思ふ。然う謂へば舞臺にも其様なところが見える。殊に白に恐ろしく性急らしいところがあれば、疝性なところ

もある。

小團次の白は、響も調子も、別誂に出來てゐる。謂つて見ると慌者が、餅を引つ扯斷ては、ぶツつけ、ぶツつけては引つ扯斷るとでもいふやうな調子がある。何様な役にも此の調子が出る。小團次の聲は口からでなく脳天から出るやうだ。

此ういふ白、クシャ／＼したやうな顔、品のない柄、——小團次の舞臺ぶりには落付のありやうが無い。天稟から謂へば小團次は三枚目にでも行かなければならぬ役者である。天分の貧しい人である。

雖然此の人には筋目といふ奴の光が自ら體に備はつてゐる。それで若い時分から人氣も相應にあれば、好い舞臺を踏み、好い役を爲馴れて來た。役者を安くしなかつたのは、藝より何によりも、これである。加之遺傳的に舞臺に於ける度胸とか、才氣とかいふものもあつたらう。

何んと謂つても小團次は今日では劇壇の古老である。そして舞臺ぶりにも小團次一流の齧もサビもついて來た。また或る手強さも、或る凄味も出て來た。チヨコ／＼しても、ギクギクしても、年功と筋目と、そして藝の力は、座頭役者といふ格を、押しも動かしもするところが出來ぬやうである。

十八、市川壽美藏



先代市川壽美藏男。初め市川登升、のち小満之助、遂に養家をつぐ

子供役者の時分には高丸と謂つてゐた。それから登升と謂つてゐたこともある。子供役者の時分から綺麗でチツトリした人であつたが、何んとなし淋しいところのある人であつた。それだけ可憐らしくもあれば、温順なやうでもあつた。

先代壽美藏には團次郎——今の團九郎といふ實子があつたに拘らず、此の人を養子にして壽美藏を譲つたとこを見ると、何處かに見どころがあつたのであらう。また此の頃の舞臺のはたらき振りを見ると、確に見どころがあるやうである。

壽美藏、市十郎、松蔦、荒次郎、左升、秀調、又五郎、左團次組の若手役者は皆一様の芬のしてゐるところがある。役者の柄、藝の質は違つても、何れも共通した色を持つてゐる。それは歌舞伎味に乏しい、若々しさと、新しさである。尤も又五郎と秀調だけは大分異つた趣もあるから、或は除外しなければならぬかも知れぬ。

壽美藏は、此の若々しい若手揃のうちでも、松蔦と駢んで花形と謂はなければならぬ人であらう。人氣も役どころも然うである。

幸に時世は歌舞伎芝居を餘り見ない芝居好き又は芝居研究者が多くなつて來た。謂ふところの若い時代が、芝居見物の側にも來たのである。それで壽美藏も松蔦も、此の兩三年メキくと人氣が立つて來た。何んでもやつて見るものである。

左團次組以外では、壽美藏の腕前を何う此ういふ程壽美藏の芝居を見てゐないから、それは何も謂ふ事は無い。壽美藏は左團次組の役者として光り出し、また人氣も出だした役者である。何も左團次組を離れて、壽美藏の價値が無いと云ふのではないが、光は確かに薄らぐ。もし假に壽美藏を市村座に加へたとしたら何うであらう。壽美藏も些々と市村座へ入つたことがあつたと思ふが、恐らく勘彌、東藏の下風に立つて、甚だ凡々たるものであつたらうと思はれる。従つて今のやうな人氣も得られなかつたらう。

壽美藏は左團次組に入つて活路を得た役者である。左團次組の人である。その藝風から謂つても左團次組で成長し、發展し、雄飛すべき役者である。

自由劇場では「寂しき人々」のケエテでは可成成功の部に屬する出來榮を見せてゐたと思ふ。此の役は、那の氣の弱い、そして意氣地の無い人となり、——それが餘程日本化せられてゐるとは謂へ、那程に能く現はれたら、愚圖々々いふところのない傑れた出來と謂はなければなるまい。或は那の劇に出る人々のうちで、一等の出來であつたやうに思はれる。自

市川壽美藏

明治四十一年
頃は市村座に
ゐた。

「弟切草」の弟は明治四十五年五月の明治座。

由劇場以外の西洋物では、「鈴」のクリスチアナでも、「犠牲」のアンネットでも、結構なものだつたと謂つて差支無いらう。

新作の方では、「弟切草」の何んとか云ふ弟、「眞田」の大助、「内藏之助」の力彌、「室町御所」の岩千代、——その他尙だ二三の逸品もあつたやうだが、是等の役々は、出来榮に多少の相違はあるとしても、壽美藏の藝にも柄にもしつくり嵌つて自ら壽美藏の優れた役者ぶりをを見せてゐた。

壽美藏は稍新味のある若衆役、または若々しい若人役者である。歌舞伎役者として淋しくて見榮のないのが、反つて新しい意義に適ふのか、左にまれ新しい方の役では此の淋しいのが味ともなり、匂ともなり、そして特色ともなつてゐる。

壽美藏は柄も藝の質も、チツトリとして淋しみのある役者である。歌舞伎劇の方でいふと「梅の由兵衛」の長吉や、「千本櫻」の小金吾位なら可からうが、虎藏や、勝頼となると役者が安くなつて了ふ。況んや辨天小僧となると片なしである。淋しいと謂ひ、チツトリしてゐると謂つても、「武田信玄」の勝頼やクリスチアナなどでは、可成快活なところも見せ、凛々しいところも見える。それは役者である。然う無理な役でなかつたら一ト通りは何んでもやれると謂なければなるまい。

助高屋高助男。初め源平、のち訥升。

明治四十四年四月より帝劇に入る。

壽美藏は左團次組の花である。可憐らしい花である。繰返していふ、桔梗か、藤袴か、秋草のやうな花である。

十九、澤村宗十郎



歌舞伎の老花形であつた宗十郎は、今や帝劇三大家の一人になつて了つた。こゝにいふ大家とは「先生」の先と、「達者」の達と「古株」の古と、「老人」の老とを意味してゐる。先と達と、古と老といふ字を併せ讀むと、先達古老、といふことになる。「老人」と謂ひ「古株」と謂つても、何も老込むだといふのでは無いから、悪く解つてはいけない。歌舞伎の幹部技藝員は、帝國劇場に移つて三大家とも三頭目ともなつた。また帝劇の芝居は一種の三頭政治が行はれてゐるのだとも謂へる。松助や宗之助といふ腕利や花形の大諸侯は居ても、梅幸、幸四郎、宗十郎といふ三頭目の天下である。女優劇の補導とか、補佐役とかいふものも、三人で交々やつてゐるやうである。

それは左もあれ、宗十郎といふ役者は何ういふ役者であらう。家柄もある、地位もある、人氣もある、藝もある、顔も好い、姿も好い、——何れの點から見ても先づ當代屈指の大家

と謂はなければならぬ。だがその舞臺とか藝とかいふよりも、更に別な言葉でいふと宗十郎の役者ぶりと謂ふよりも、寧ろ宗十郎といふ人に、何んだか重味の足らぬ點がある。どつしりした點が無い。もう若いといふ年でもあるまいが、何んだか若々しい點がある。これが宗十郎に對する何により不足であるやうだ。好い役者だとは思ふが、何か物足りぬところのあるのは主として此の故ではあるまいかと思はれる。

だが宗十郎に謂はせたら、これが誇でもあるかも知れない。拙に落付いて了ふよりも若々しい方が氣が利いてゐるとも徳だともいふかも知れない。役者に年を老らせないといふことは昔から役者の味噌として可いことになつてゐるのださうだ。

宗十郎は確かに年よりも若々しい役者である。そして其處に何んとなし物足らぬ點のある役者である。

宗十郎の代々には何ういふ人がゐたか、また其の人々が何ういふ藝風であつたか、それは知らぬ。雖然訥升と謂つても、高助と謂つても、また宗十郎と謂つても、チツトリしたうちにも力があり、柔なうちに性根の据つたところがあり、スッキリしたうちに氣品のあつた役者のやうな感じがする。事實でもなければ、理窟でもない。只然ういふ感じがするのである。但し宗十郎といふと、ぐつと落付のある、典雅莊重ともいふやうな態のある座頭役者

が聯想される。

宗十郎は藝の質から謂つて、役者ぶりから謂つて、宗十郎と謂ふよりも訥升といふ感じのする役者である。柔でもあり、また典雅な處もあるが、莊重の態がない。氣品といふやうなものも無いではないが、スッキリしたところもなければ、また力も性根の据りも足らないやうである。然し艶つばいとはある。艶つばいといふよりも艶麗とでも謂はなければなるまい。その故か、宗十郎は今に花形役者らしいところがある。花形で悪ければ、前に謂つた通り老花形とでも謂はうか。然う思つて見る故か、訥升時代の花形の匂が、此の人の藝からも體からも除れきれぬ點がある、結局若々しいといふ言葉をまたこゝで繰り返さなければならぬやうだ。

若々しいが、生なところは微塵も無い。古風な若々しさとも謂はうか、宗十郎には昔の役者を見るやうな古風なつかしみがある。これが宗十郎黨の甚だ嬉しいところでもあり、また宗十郎の風格とも特色ともなつてゐる。

宗十郎はひと頃嫌味のある役者と謂はれて居たことがあるやうに覺えてゐる。それは些つとギクシャクするところがあつたり、こせつくやうなところがあつたり、またベタ／＼するやうなことがあつたりしたからであるらしい。虚實は知らないが、何んでも團十郎にはお覺目出

度からずになつたといふことも聞いてゐる。

今でも少々ギクシャクするところが無いでもない。こせつくやうな點も幾分無いとは謂へぬ。宗十郎は確にチツトリしてゐるさうに見えて、チツトリしてゐない人である。しかしベタつくのは、寧ろ宗十郎の特長と謂はなければなるまい。此のベタつくやうな點がある爲に、宗十郎は役に依つて大いに光彩を放つことがある。ベタつくのは一種の色氣である。色氣は宗十郎の生命の大部分である。

宗十郎は色氣のある役者である。スツキリせぬ代り濃艶などこのある役者である。

本役を謂へば色立役とか二枚目とかいふのであらう。だが若女形も行けば、奥方とか、内儀役といふやうなところも行く。また敵役でなかつたら、少々黒く塗るやうな役も樂にこなすだけの腕前も柄もある。殿様役なども柄にある役と謂はなければならぬ。殿様のうちでも稍武張つたとこのある本多大内記位のところにしても間違はない。

歌舞伎座では重に娘役の方に廻つてゐるやうである。例へば「太十」の初菊だとか「鎌三」の時姫だとか「桐一葉」の蜻蛉だとか「春雨傘」のお鶴だとかいふ役ならば、夫々に初しいとか、可憐らしいとかいふやうな味を出して見せる。些か獨斷的のやうだが、此ういふ役であつたら、恐らく當代無敵と謂つて差支へあるまい。男でも勝頼や虎藏や、または久

我之助や、絶間之助や、求女や左衛門などのやうな役になるとまるで錦繪から脱出して來たやうな人になる。

「め組の喧嘩」の藤松は、明治四十四年一月の歌舞伎座

柔だ、艶がある、古風だ、可憐らしいと謂つても、根が純女形と謂ふのでは無い。場合に依つては、可成痰火も切れる。「め組の喧嘩」の三河屋藤松の如きが其の一例であらう。例の島崎の場で、何んとかして五一三ぶ六としこみの、障子一重の客間云々と尻をまくつたところなどは、頗る素敵に小氣味好い哥兄になりきつてゐた。

「櫻しぐれ」の世之助は明治四十三年四月の歌舞伎座

しかし二枚目どころの「小磯ヶ原」の禮三のやうな役になると柄でありさうであるながら、不思議に、那の粘つこい白も耳について、嫌らぬ節が少なからずあつたと謂はなければならぬ。「壽門松」の與次兵衛などにしても然うである。それとは變つて、然う大した役と謂ふのではないが、「櫻しぐれ」に出る世之助などは、艶麗な大盡姿と謂ひ、狂ひやうと謂ひ、また鉢た、きになつてからの軽い所作ぶりと謂ひ、何時までも眼に残つてゐる名品であつたと謂つて可い。これは宗十郎の役者ぶりの故よりも踊の力と謂はなければなるまい。踊と謂へば「道成寺」の花子の如きも名品とは謂はれぬまでも、逸品と謂つて差支へあるまいと思ふ。花子役者として、歌右衛門がある、梅幸がある、菊五郎がある、幸四郎がある、何れも長所もあり、短所もあり、また夫々趣も違へば味も異ふが、何れも當今の逸品である。宗十郎

の花子を此の逸品列に加へて、其の踊の手ぶりの柔かさに於て、何人も及ぶまいと思はれる。勿論「道成寺」の踊は柔さばかりで行くものではあるまいが、柔さに於て、宗十郎には、宗十郎の特殊の味と趣があるとは謂へるだらう。何んにしても宗十郎の踊は五指に屈すべきで、しかも古風な匂と趣のあるのを身上とする。

宗十郎は重寶な役者のやうに見えてゐて案外役の領分が狭い。それだけにまた品質に高い分子があるとも謂へる。宗十郎は調子の高い役者ではないが、質が上品に出来てゐるところがある。老役が出来ない、敵役が可けない、全て強味のある役は駄目だ。江戸的世話物は可けない。活歴物も柄に無い。盛綱、實盛、源藏、松王のやうな型物も向かぬ。——此う煎じつめて來ると何んだか心細くなつて來るやうであるが、其の代り宗十郎は宗十郎でなければならぬ物を持つてゐるから埋合せはつく。

殊に役者ぶりに理合の細いところのあるのは、手當のザラ／＼役者の多い當節柄大いに珍重しなければならぬ。

それにしても宗十郎の白には困り物である。眞箇悪である。取得がない。此の白で宗十郎は何程役の上に損をしてゐるか知れない。音も悪い、調子も悪い。そして白を謂ふ時の口の歪方は、これを名づけて變と謂はうか、不思議と謂はうか、嫌な癖である。これがある爲に宗

十郎は役者ぶりまでに少からず傷つけられてゐる。役者ぶりから謂へば、白玉の微瑕とでも謂つて濟まうが、舞臺に働く上から謂ふと其どころでは無いやうだ。單に此の癖ばかりとは謂はぬ、此の癖と、白とが共謀になつて、何程宗十郎といふ役者の働を窮屈にもし、妨げてもゐるか知れない。

宗十郎は白でもつて、役者を狭くしてゐる役者である。これしかし天性だから惜むでも及ばぬこととして、宗十郎は色彩もあり、匂もあり、うるほひもあり、そして見た眼に艶に麗はしい、當代稀に見る古風なところのある役者らしい役者である。

紫の藤や澤村宗十郎

廿、尾上紋三郎

尾上幸藏の男
初め尾上幸之
助、大正十四
年死去。



若手チャキ／＼の達者役者の人氣者である。誰が何と謂つても大橋屋の呼聲は、父幸藏よりも、賢息紋三君の方へ持つて來て了つたやうだ。

二長町でも菊五郎といふ大きな傘の下にゐるだけに、ナカ／＼役がつく。況や、深川や中洲や、赤坂あたりへ出たとなると紋三郎の芝居もする。人氣があ

尾上紋三郎

大正初年市村座を脱けて地方へ行つてゐたが、震災後久しぶりで市村座へ出た。一回出たきりで死んだ。

るからだ。また其だけの腕があるとも謂へる。謂つて見ると、痩せた腕、肥つた腕、青い腕、白い腕、——腕にも種々ある。

但し紋三郎の腕を瘦せたのだとも、白いのだともいふのでは無い。何んと謂つても幸之助時代から、鳴らしても鍛えても来た腕である。ナカ／＼以てヤツでは無いやうだ。

しかし幸之助時代には子供であつたといふ故か、もう少し可愛氣があり、見てゐて心もちの好いところがあつたやうに思はれる。もう少しスッキリした、そして芬しいところがあつたやうに思はれる。

今でも男前に於て、スッキリしたところが無いとは謂へぬ。が芳しいところは確かに無くなつた。そして何んとなく役者ぶりが脂ぎつて来た。役者ぶりにか藝にか、觸れば此う手がヌラヌラしさうなところが出て来た。見る方が好い氣持になるといふよりも、紋三郎自身が好い氣持になつてゐるといふやうな點が見えて来た。無遠慮に謂へば、藝に油が乗つたと謂ふよりも、紋三郎が調子に乗つてゐるといふ風が見える。

ひが目かも知れない。それだつたら幸である。紋三郎は下手な役者ではない。また役者ぶりが悪くない。だが皮肉つて謂へば、紋三郎が思つてゐるほど上手でもなければ、好い役者ぶりでも無い。

何より氣に適らないのは、舞臺ぶりにも役者ぶりにも浮ついたとこの見えることである。叮嚀に謂へば藝にも舞臺にも實を入れてゐないやうなところが微見える。或は器用とか舞臺度胸とかいふ奴かも知れないが、何でもサラ／＼と好い加減にやつてのけて納まりかへつてゐるやうなところがある。

成程拙いより好いかも知れぬ。悪く固くなつてゐるよりも働きがあるかも知れぬ。雖然今の若さでは少々拙くてももう少し神妙であつて欲しい。もう少し熱があつて欲しい。そしてもう少し慎むで叮嚀な舞臺ぶりを見せて貰ひたい。繰返して云ふ。紋三郎は悪い役者ではない、拙な役者ではない。顔も可い、柄も可い、融通も利く、藝も可成ある方らしい。だが何んとなし安つばいとこのある役者である。立入つて謂へば、腹に出来てゐるところがあつたら自ら役者ぶりにも舞臺ぶりにも位のつくものである。

紋三郎の顔には眼の凹んだところと、鼻の高いところに特長がある。此の鼻と顔の輪廓と柄からいふと、市村座の主なる若手役者のうちでは、最も敵役に適してゐるやうに思はれる。もし紋三郎に、もう少し鱭があり、藝にドツシリしてゐるところがあつたら、此の春の

「春雨傘」の鐵心齋のやうな役は當然此の人に持つて行くべきものであらうと思はれる。「後藤」の錦戸など、氣込と爲ることは不足だらけとしても、柄に於て大いに大橋屋と聲をかけな

「後藤」の錦戸は大正二年一月の市村座

ければならぬやうであつた。
さればと謂つて、紋三郎の顔や柄が敵役に出来てゐると謂ふのではない。敵役も行けるといふのである。

踊も可成行ける。若いだけに二枚目どこも樂だらう。女形も、或種の若いところも、内儀役や奥方も相應にこなせるやうである。それから三尺帯も行けば、袴姿も似合ふ。重寶な役者である、安く購へば好い役者であると謂はなければならぬ。鍛えさへよかつたら、子はまさりけり竹之丞と謂はなければならぬ。
だがしかし味の無い役者である。そして是といふ紋三郎の物を何も持つてゐない役者である。悪くすると一種の達者役者で終つて了ひはせぬか、それが氣遣はしい。

廿一、市川左升



左團次門下の一異才である。チツに變つたところのある役者である。正直にいへば椋右が好きなきをぢさんである。尙だをぢさんと謂はれるほどの年でもないやうだが、何んだか然ういふ感じのする役者である。左升が好きになつたのは餘り古いことで無い。

先代市川左團次の門。

「底倉の湯」の六郎太夫は明治四十二年三月の明治座「ボルクマン」のフォンダルは、明治四十二年十一月の自由劇場。

「どん底」の順禮は、明治四十三年十二月の自由劇場。

明治座で「底倉の湯」をやつた頃からである。この時左升は六郎太夫とか何んとかいふ斬られるお爺さんをやつた。慾は深いが憎氣の無いお爺さんで、芝居に出る那如いお爺さんとして些つと變つた味を出して見せてゐた。

それから間もなく自由劇場の「ボルクマン」でフォンダルをやつた。それから又ぐいと氣に適つて了つた。次に「どん底」の巡禮といふ奴で、また左升一流の味と特色とを出して見せた。自由劇場の役者としての左升は、約これで評價が定まつたやうであつた。彼の技倆は抜群と謂はれぬまでも、出色と謂はなければならぬやうであつた。

左升は左升式に出来た役者である。左升一流の腕と味はひで役者になつてゐる役者である。新味もある、役者ぶりに人間味といふやうなものもある。此の人間味といふやうなものが左升の役者ぶりの特色とも價値ともなつてゐる。

歌舞伎の役者としても然うである。歌舞伎劇の方の役者として、左升は巧い役者とは謂へまいが、何處やらに味のある役者とは謂へる。本役は、端敵どころと老役であらうが、何を爲ても大に揮つても見せない代りに、目に付く程のアラも見せずに、サラ／＼と小まめに片づけて行く。

サラ／＼と片づけるといふうちにも、左升のは藝が達者だとか、枯れてゐるとかいふので

はない、生真面目に、尋常に、成るべく間違のないところを手ばしこく運んで行くのである。ぞんざいでないといふ程度に、念入りに、固くならないといふ程度に、忠實に、見てゐて肩が凝らないといふ程度に、熱心に騒がず、燥らず、他の御迷惑様にならないやうに、自分のやらうと思ふ事よりも、自分のやらなければならぬだけの事をやつて行く。また其だけの腕前もあるやうだ。

舞臺に於ける左升は自分は何う見せやうと云ふ屈托はないが、自分が何う働かなければならぬかといふことを知抜いて、それに油断が無い。所詮格別見て貰ふほどの藝もないから、それを見せやうと見て貰はうともしないで、自分のやらなければならぬことに努力してゐる役者である。

左升は自分の芝居は持てない人である。また出来もしないと謂つて差支へないやうだ。しかしその舞臺ぶりは一流の味があるばかりでなしにナカ／＼使どころの廣い人のやうである。殊に左團次組の芝居には、重立つた一人として是非とも居なくてはならない人である。其の役者ぶりを謂へば、色も無い、匂とかうるほひだとか、艶つ氣は微塵も無い。柄も小柄で見榮はなし、顔もお店の番頭さん式に出来た役者である。しかし何んとなし、影の薄くない役者である。愛嬌と謂つては無いが、無愛想な方とは謂へぬ。生真面目なうちに、軽い

左升は一時、猿之助について左團次の所を脱けたが、間もなく歸つて来た。矢張り左團次組の役者であつた。

ユーモアと謂つたやうなものが浮出してゐて、いたしみのある役者である。その故でか、歌舞伎の方でいふと、端敵どころの人ではあるが、憎氣が無い。先づ新しい三枚目とでもいふのが間違の無いところであらう。柄や顔ばかりでなしに、白も然うである。左升の白には悪の分子も強いことも無い。善人といふよりも、人の好い響がある。何うしても氣の輕いをぢさんの聲である。

要するに左升は尙だ何んの型にも入つてゐない役者である。もし入つてゐるとすれば、それは左升の型である。まだ左升の芝居は持つてゐないが、左升の物と味は持つてゐる。舞臺に於ける一種の人間味と謂つたものと、軽いユーモア、それと克明ではあるが、底光のしてゐるやうな一種の才氣、——これだけでも左升の價値は餘り安くない。

左升は地味な役者である。燻つたところはあるが、感じの好い役者である。左升の藝には薄つすと人生が浮出してゐる。

廿一、市川團右衛門

名前も大ききうだが、柄も顔も大々した役者である。新舊の役者を通じて其の数は千餘に及ぶだらうと思ふが、是程に背の高い、是程に顔も體も大きな役者はあるまい。新派の雄將

市川團右衛門

四世中村富十郎の男。

高田實も大きいので有名だが、これよりも五分とか一寸とか背が
高いといふことである。



團右衛門は、泣梅太郎と謂つた、故富十郎の子で、太郎と謂つ
た人ださうだ。女形ではあつたが、泣梅太郎の富十郎も大きかつ
た。能くは覚えて居ないが、もし脊くらべをしたら、團右衛門と五分々々であつたらう。或
は少し位高くとも低いことは無かつたやうに思はれる。

獨活の大木、能なし山の柚木かなといふ句があるが、強ち然うとは謂れぬやうだ。況んや
大は小を兼ねるといふ諺もある。物の理窟から考へては、大きいのは小さいのよりも好い
に定つてゐる。人大なるが故に必ずしも貴からずでは無い。

昔は随分大きな名優があつたやうである。殊に敵役に其が多かつたやうである。

團右衛門に、藝にも白にも役者ぶりに、もう少し性根の据つたところがあつたら、柄の
大きいのが役に立つて可成使どころのある役者になれるだらうと思ふ。しかし此の人には尙
だ大きな柄を利用するだけののはたらくも智慧もないやうである。だが立役にならうとして、
由緒ある親の名に眼も呉れぬだけの勇氣と覺悟があるといふことだから、何か其れだけのこ
とを爲出來す自信もあるのだらう。

「春雨傘」の
黒内は明治四
十二年四月の
歌舞伎座。

餘程前のことであつたが、歌舞伎座の「春雨傘」に奴黒内といふやつをやつたことがあ
る。これなどは團右衛門が歌舞伎座でする役のうちでは上の部と謂はなければなるまい。「小
督」の仲國の馬の轡を把つて出る何んとかいふ仕丁とか「菊畑」の智恵内にかゝる奴なども
先づ目につく方の役であつた。柄が大きいので眼にはつくが、團右衛門は歌舞伎では尙だ是
といふ程の役はつかないやうである。

赤坂や本所あたりでは、大分振つた役をしてゐるやうだが、何うも見掛倒しといふところが
あるやうだ。或る種の老役とか、押出して見せるやうな役には、些つと戴ける代物も無いで
はないが、何うも徒にカサばかりあつて、中味の無い進物でも貰つたやうな氣がしてなら
ぬ。しかし悪く芝居をしないだけでも、道大歌舞伎で育つてゐる人だといふだけは得心させ
る。

一體に此の人の舞臺ぶりはサラリとしてゐる。癖もなければ、嫌味もない。と謂つてぶつ
きらぼうでもないところに、自ら團右衛門式の面白味がある。

何んにしても、もう少し舞臺に重みがあるやうになつて貰ひたい。そして自分の柄を働か
すだけの役者になつて貰ひたい。今のところ團右衛門は、自分の柄をもちあつかひかねてゐ
る形があるが、それは自分の柄の特長なり、價値を知らぬからだ。足の爪先から、頭まで、

市川團右衛門

肉付なり、形なり、能く調和のとれた大きな柄は、使ひ方で随分立派な代物になるだらう。

廿三、守田勘彌



十二世守田勘彌の男。昭和七年七月死去。坂東三津五郎の弟。

若手のうちでは正札のついた二枚目役者である。市村座では古い方の花形で、且つ人氣者である。勘彌好きは、何によりあの眼に魅されるだらう。好い眼である。色氣のある眼である。優しい眼である。そして愛嬌のある眼である。夏の夜や蚊を疵にして五百兩——といふ談林派の名句があるが、まあ是だ。眼千兩とは、謂はれぬまでも、確かに五百兩の價値はあるやうだ。

だが勘彌は此の眼のおかげで大分舞臺ぶりを傷けてゐたこともある。此の頃は段々無くなつて来たやうだが、勘彌には此の眼の上眼遣で棧敷の方を見てならぬ癖があつた。無論癖だから爲方がないが、舞臺の勘彌を見る度に、大概二度や、三度此の癖を見せつけられたものである。嫌な癖であつた。

店番をしてゐる小僧でも、傍見をしてゐるやうな奴は頼もしくない。況んや芝居である。芝居の舞臺である。見てゐる方では馬鹿にされてゐるやうな氣がしてならなかつた。よし然

うでないにしても、舞臺に氣が入つてゐないやうに見えて、折角の興味を殺がれる場合が少くなかつた。

勘彌の腮は大分問題になるやうであるが、此の腮は寧ろ勘彌といふ役者ぶりにふさはしいものではあるまいかと思はれる。勘彌の那の顔と柄と、そして腮との間に少しの不調和も見出されない。何方かと謂へば、此の腮が勘彌の顔の特長ともなり、趣ともなつてゐるのであるまいか。殊に落付いた役をするやうな場合にはナカ／＼この腮に利き目があるやうだ。何れにしても腮と眼は、勘彌の顔の目標とも表象ともいふべきであらう。

勘彌は大正七年に市村座を脱退し、間もなく帝劇へ入つた。

腮と眼ばかりでない。勘彌の顔は何んとなし古風な味ひがある。氣のせるか知らないが、文化文政の頃の似顔繪に見る三津五郎の顔に何處か似てゐるやうに思はれる。それだからといふのではないが、顔の出來方がどうも江戸前のやうに思はれる。江戸前は藥が利き過ぎるとあらば、江戸の芬がしてゐるといふ。顔から謂つて勘彌は、江戸役者らしい役者である。顔ばかりでない。姿も然うだと謂へる。藝も然うだと謂へる。勘彌と謂へば、直に腮同様長いとか、ひよろ長いとかいふのが極付となつてゐるが、勘彌の姿の長さは其程目障になる性質のものだらうか。成程ヒヨロリとした氣味は長いには長いにしても、其のうちにスツキリしたところがあり、しなもあり、趣もあり、勘彌といふ役者ぶりに損をさせてゐるやうな

とは微塵も無いやうだ。掛値のないところ、勘彌は役者ぶりの鮮かな役者である。水際立つたと謂はれぬまでも、みずくした感じのある役者である。淺黄色の襦袢や、紫の着つけのウツリの好い役者である。これはしかし、勘彌といふ役者の色が鮮だからと謂はなければなるまい。

三田八の時分から、勘彌を好いたらしい役者と思ふ人が少なくなかつたやうである。今も然うである。三田八の時分から、勘彌は然う拙い役者ではなかつた。今も然うである。殊に近來、少々ならず腕が上つて來たやうである。同時に今迄と違つて大分重味のある役もするやうになつた。

殉死劇とは、乃木將軍を當込んだ、落合浪雄作「勇將の妻」大正元年十一月の市村座。

「春雨傘」の庄兵衛は大正二年一月の市村座。

近いところにいふと、去年の市村座の殉死劇の鳥居彦右衛門の如きが其であらう。また此の春の「春雨傘」の釣鐘庄兵衛の如きも、例へ八百藏の其をすき寫にしてやつてゐたにしても、勘彌が是迄さまよつてゐた境地から、一步踏出して、或方面に突出さうとする傾向が見えると同時に、その舞臺ぶりに重味を加はつて來たと謂はなければならぬ。其の重味は二三年前にやつた由良之助などに見えた其とは全く趣の異つたものである。近頃勘彌に不向な役を謂へば、床下の男之助などを第一に數えなければならぬ。その役者ぶりを謂へば、頼兼は動かせぬところであらう。だが八汐もナカノ味をやつた。やらせた

「加賀鷲」の巳之助は明治四十五年三月の市村座。

「堀川」の傳兵衛、「雙仇討」の勝五郎は大正元年二月の市村座。

「異風行列」の信行は大正元年九月の市村座。

ら政岡も悪くはあるまい。勝元などは若手中の勝元役者であらうと思ふ。

本役を謂へば「加賀鷲」の巳之助だとか「堀川」の傳兵衛だとか「雙仇討」の勝五郎だとか——去年あたりやつたものうちではかういふところは動かぬところである。だが御所の五郎藏だとか、清水一角だとか、團七の茂兵衛「異風行列」の信行、——此の邊の役々も結構の部に屬すべき價値があると謂はなければならぬ。以前に見たもの、うちでは、十次郎や、小金吾などいふ役が鮮に目に残つてゐる。見たいのは忠兵衛である。

踊も勘彌の重なる身上になつてゐる。兄三津五郎に上手に於て及ぶまいが、姿に於て優る。がしかし、少々上滑りがして、うまみもなければ、實も入つてゐないやうに見える。踊ばかりでなしに、勘彌の舞臺ぶりも何うかすると上滑りがする。此の上滑りは藝から來てゐるものか、何んにしても勘彌の大なる缺點と謂はなければならぬ。

要するに勘彌は二枚目役者である。柔かなといふよりも、ほつそりした繊細な二枚目役者である。其の繊細なほつそりしたうちに、幾分の固さと強みとが加はつてゐる。それが庄兵衛だとか、彦右衛門だとか、一角だとかいふ役の場合に現はれて、勘彌の役者ぶりに幾分の重味をつけてゐる。そして此の重味が、將來勘彌といふ役者を案外な方面に成功させて、案外廣く使へる役者にするかも知れない。しかし其は寢て見ない先の夢である。今は唯鮮な

十一世片岡仁左衛門の門。死去。

役者ぶり、役者らしい役者といふに花を持たせて、向後の飛躍を俟つ。

水鏡勘彌の顔や燕子花

廿四、片岡島十郎



仁左衛門の連れて来た人で東京に居居つてゐるのは、太郎改めの龜藏を別として、此の人と我藏だけであらう。

正直を謂へば椋右眼なくして、島十郎が何程の役者であるかといふことを見てゐない。好い役が付かぬからといふばかりではござらぬ。椋衛が癖として、役は何うでも、舞臺にゐる役者とあらば、何んでも神妙に拜見に及ぶ。

なれども歌舞伎の舞臺には些々見る顔ながらも、島十郎には、これといふ印象はござらぬ。いや、満更無いではないが、甚だ以て手薄でござる。

「朝顔」の宿屋に出た何んとかいふお婢——多分お鍋とか、謂つたやうに思ふが、此の頼つぺたの紅いお婢や、「生玉心中」に出た是もお鍋式に下司な奴、——近頃では此の二役が目についた。

子の仁引は後に片岡左衛門と改め、いま映畫にゐる。

上方俳優の尾上松壽の男。いま尾上菊右衛門。

中にも朝顔の方のお鍋は、後になつて取つて付けた欠伸をしたりして嫌氣が浸したが、前のところでは、始終朝顔の後見役といふ心得で、まめしく朝顔の世話をしてゐる。嬉しかった。柄も顔も、お婢々々としてゐて、爲ることも神妙であつた。「生玉心中」の方は白が白だつたせいか、下司だつたといふ外に謂ふことは無い。

此の二役の他は、少々氣の利いた仕出しか、些つと白の謂へる端役しか見てゐないので、此の人の實力を何う此ういふのは難かしい。何時も背の低いのが目につくだけで、面白味も可笑味も感じたことが無い。本役は矢張り端敵どころのやうに思はれる。他座では左もあれ歌舞伎座の舞臺では父島十郎よりも、賢息仁引の方が餘程目につきもすれば、また役者ぶりも好いやうである。

廿五、尾上樂之助



安價なる二枚目役者である。小さくとも安つぼくても、樂之助は、樂之助の物も芝居も持つてゐる役者である。東京では尙だ馴染の古い方とは謂へぬが、淺草あたりでは大分賣込で來たやうである。そして大分好い役者にもなつてゐるらしい。

尾上樂之助

明治四十三年
一月蓬來座へ
來り、以來東
京役者となる

だが市村座に來ては尙だくみじめなものである。淺草あたりで折角好い役者になつてゐる役者ぶりを滅茶々にされて了ふ形がある。それが當前のやうでもあれば、またお氣毒なやうでもある。

東京に來たての頃には、忠兵衛や治兵衛で些つと賣つたやうであつた。強ち珍好が騒いだといふばかりでなしに、樂之助のお土産としては結構に戴けるものだつたらしい。その後評判が段々下火になつて來たやうだが、これは樂之助の正體が分つて來たの、役者が拙くなつたといふのではなしに、謂はば隣の甚太が芬しくなくなつて來たといふ譯でがなあらう。

樂之助はナカ／＼働ける役者である。腕があるといふのだらう。柄にさへある物だつたら何んでも相應に見せる。若い女形をやつても、上方式に些つとした古風なところあり、味ひもうるほひもあるやうだ。こせつとくともないではないが、大いに臭いとか、悪達者だとかいふでも無い。贅澤を謂ひつこなしにすれば、腕は購へる役者である。時代物も「布引」の實盛位なら樂だらうし、「先陣館」の盛綱なども何うにか漕付けられさうに思はれる。幾ら安く購つても小芝居の立者の資格は充分にあるやうだ。

雖然ひらきなほつて謂ふ段になると、此の人の持つてゐる物は全て稀薄である。安手といふよりも、淋しいとこがあり、貧乏くさい點がある。例へば土屋主税だとか、それに似たやうな殿様役をしたとする。柄も顔も態度も貧弱で、樂之助の舞臺ぶりの稀薄なことが哀に歴然と解る。

本役の三枚目、または若い女形をやつたとしても然うである。艶がないではないが、淋しい、うるほひも柔かさもないではないが、貧乏くさい。それは柄の故もあるだらう、また藝や年のせいもあるだらう。何れにしても樂之助には品とか位とかいふ物が皆無である。これが樂之助が役者として大きな損害でもあり、また樂之助を餘り高く購ふ氣になれぬ點である。

樂之助は悪い畑に咲いた蝦夷菊のやうな役者である。色はあるが淋しい。美しさもないではないが、稀薄で見榮えがしない。

廿六、中村成太郎



中村成太郎

鷹治郎門下の高足である。東京には居据わつてゐたことが無いから、馴染は薄いが、時々松竹興行の新富座に來ては、凡手ならざる腕前を見せて行く。

大阪では勿論鏢々たる一人であるらしい。福助、延二郎につい

中村鷹治郎の
門下。いま中村
魁車。

で、嵐吉等と雁行して、若年寄ともいふべき地位を的確に占めてゐるやうである。東京には成太郎のやうな格の役者は居ないやうである。

舞臺の働きの多い大阪役者のうちでも、成太郎は働きの多い方の役者と謂はなければなるまい。達者と謂へば達者とも謂へる。達者と謂つても成太郎の達者は、餘程質の好い方と謂はなければならぬ。成太郎は眞に多方面に働ける役者である。——此う謂つてはチト高く購ひ過ぎるかも知れぬが、自分などは、上方の羽左衛門と謂はれてゐる延二郎よりも、其の役者ぶりに於て、成太郎の方が好である。

成太郎は好い役者である。普通の意味でいふ好い役者である。これと謂つてずば抜けたところは無いが、藝もある、役者ぶりも好い、融通も利く、當氣も少ない。舞臺にも忠實のやうである。謂はば三拍子、四拍子揃つて、花も實もある役者である。舞臺に働いてゐる役者として、成太郎には彼是不足を謂ふところが無いやうだ。女の方で謂ふとお姫様も行く、内儀役も行く、新派の浪子や、環や、満枝式の女も行く、江戸式には行くまいが、藝者や女郎、太夫職もやる、立役では鴈治郎どころの役なれば、大概こなすだけの腕があるやうだ。また、役者ぶりも然ういふやうに出来てゐる。然うかと思ふと「腕久」に出る番頭嘉右衛門のやうなところもやつて見せる。

嘉右衛門は「腕久」の引立役に出る主思ひの實體な番頭といふだけのことだが、難かしいと謂へば、随分難かしい役である。何しろ大事な主人が、氣が狂ひ出して途方に暮れる。それを一人で驚きもし、騒ぎもし、氣の狂つた主人に引廻されもしなければならぬといふに、しかも主人役の鴈治郎が一人で芝居を見せるところだから、其の邪魔にならぬやうに働かなければならぬ、といふ難役である。此の難役を、手持無沙汰にならず、木偶の坊にもならず、自分自身で、相應に働き、相應に面白味を見せながら、鴈治郎の邪魔をしなかつたのは、練れた腕、鮮かな手際と感心しても差支が無いやうだ。此の嘉右衛門の腕前なら、或種の三枚目も造作なくやつてのけるかも知れない。

此の嘉右衛門役者が、矢張鴈治郎を向ふへ廻して、紀ノ國屋小春をやるに至つて、寧ろ些か煙に巻かれざるを得ない。

假に茲に成太郎を、鴈治郎どころの二枚目役者として見たとする、——無論然うではないけれど、——役者の貫祿の重い軽い、これは別として、成太郎は鴈治郎にくらべて、その役者ぶりに、ふつくらしたとこと、手觸の柔かさうなところが無い。また艶にも乏しい。同時に藝と謂はずに、その役者ぶりに到底鴈治郎ほどのうまみが無い。うまみといふうちには、人を引付ける力といふ意味も籠つてゐる。

その代り強いところがある。凛としたといふのでもなければ、固いといふのでもないが、強いところがある。

顔を見ても然うである。成太郎は顔から謂つても、人気者になるだけの資格があるやうだ。品もある。美しいといふより、麗しい。美男といふよりも好男子の方に属する顔立である。眼、鼻、口、頬、腮、尋常に揃つて出来てゐて、素顔は知らず、舞臺顔は誰が見ても感じの好い顔である。

此の感じの好い、調子よく出来た顔にも矢張り強いところがある。餘り引締まり過ぎてゐる故もあらう。鼻つきや頬に幾分稜々しいところがある故もあらう。何んにしても綺麗は綺麗だが、成太郎の顔には強いところがある。舞臺ぶりにしても然うである。上方式に調子好くサラサラしたうちに、一點強いとこのあるのは成太郎の特色である。

強いと謂つても、柔みが無いと謂つても上方役者である。況や、鴈治郎門下の高足として鴈治郎の藝と謂ふよりも、其の舞臺を模してゐる人である。更に小春が出来、「清玄」の折琴姫や「金閣寺」の雪姫が出来、近いところで鎌倉武鑑、またの名「神風」の朝霧が出来、河合や喜多村のやるやうなハイカラな女が出来、そして「紙治」のおさんを當り藝にして、「鮎屋」のお里や「菅原」の千代や戸浪も出来やうといふ人である。強いと謂つても、柔か

なうちに、つ、まれた強さである。柔でないと謂つても藝に柔みがないといふのでは無い。成太郎は役者らしい役者である。しかし男らしい男前の役者である。

嘗て此の人の「布引」の實盛を見たことがあつた。全體に羽左衛門ほどスッキリしてゐないにしても、押出しも見榮があり、爲る事も何がなし鮮かで、氣持の好い實盛だと思つた。成太郎は此ういふ型物も行ける。そして、決して拙くない。

斯ういふ物になると、成太郎が鴈治郎の舞臺ぶりを模してゐることが、際立つて目につくやうである。音は違つても、白の調子、體のこなし、小手先の働き——その他、呼吸とか氣込みに、鴈治郎の其が少からず閃いて、何うかすると鴈治郎の影法師になつて見えることもある。

女形としての成太郎は、芝雀のこつてりした梅川式の女、福助の可憐な娘または若嫁といふに對して、内儀役または女房役といふところが間違のないところらしい。「紙治」のおさんも可からうが「妻八」のおつまや「引窓」のお早なども我が桂屋の薬籠中の物でなければならぬ。

繰返していふ。成太郎は眞に融通の利く巧者な役者である。また成太郎のものも持つてゐる。だがしかし、ずば抜けたところもなければ、割合に舞臺で光り得ない役者である。人を

引付ける力と謂つたやうなものも、延二郎、福助にさへ及ばぬ。そして悪くすると一種の重寶役者で終つて了ふ危険性が無いでもない。天分か、修業の足らぬせいとか、大いに警しめなければならぬ。才氣と器用と役者ぶりだけでは、尋常の役者にはなれても、大きな役者にはなれない。

成太郎の舞臺ぶりには行くところまで行きついてゐるといふ風が見える。形の上には整ひ過ぎる位整つてゐる。此の上の上達發展は、藝の練磨ばかりでなしに、腹を鍛えなければならぬまい。鍛えてしつかりした性根を据えなければならぬ。今の分では成太郎は、普通にふ好い役者で、そして達者な役者といふだけである。

廿七、市川權三郎



何ういふ故か、芝居の風聞子は、權三郎のことを名優と謂ひ、山崎屋の親方と謂ふ、其故奈何にと訊いたら、或人の曰く、權三郎の舞臺ぶりが、甚だ名優らしく親方らしく納まつてゐるからだと。

成程然う謂へば、權三郎の舞臺ぶりには大納りに納り返つてゐるところが見える。そして

歌舞伎座の茶
屋武田屋の
子。いま河原
崎權三郎。

歌舞伎座でやる眞の端役も、演伎座や宮戸座でやる大役も同じやうな心もち、同じやうな氣込、同じやうな納り方でやつてゐるといふ風がある。こゝらが名優と謂はれるところかも知れない。

歌舞伎座でしてゐるやうな端役は然うでないが、名優權三郎を發揮する大役の場合には、權三郎は全て羽左衛門張りで行つてゐる。張りといふよりは、全て模てゐると謂つた方が至當である。

役とても然うである。め組の辰五郎とか、直侍とか、辨天小僧とか、切られ與三だとか、また實盛だとか、盛綱だとか——全て然ういふものばかりやつてゐる。例へば松王だとか、貞任だとか、曾我の五郎だとか、治兵衛だとか、忠兵衛だとかいふやうな役をしても、矢張り羽左衛門の呼吸と調子で行つてゐる。

極端に謂へば、權三郎は羽左衛門の眞似をする爲に芝居をしてゐるやうな人である。同時に羽左衛門が居るから、芝居の出来る人だとも謂へる。

權三郎は中年から役者になつた人だといふが、その故か舞臺が何んとなく素人臭い。歌舞伎座の端役でも少々お目まだるくないでもないのだから、況んや大役の場合に於てをやである。尤も權三郎になつたら、得意の大役よりも歌舞伎座の端役の方が難かしいかも知れない。

藝から来る形といふ奴が出来たら、役者ぶりは然う悪い方とは謂へぬ。淺草や赤坂あたりで見ると、糞落付に、落付はらった度胸だけでも、誰にでも出来ると謂へないところがある。権三郎は度胸で持つてゐる役者である。度胸を生命としてゐる役者である。但し度胸を通り越すと、臆面なしといふ奴になるから、これは氣を付けなければならぬ。

権三郎は度胸までも羽左衛門に似てゐるやうな役者である。種々謂つても、権三郎は小芝居では可成賣ツ子でもあり、大役もやり通して行くのだから、力か、人氣か、左にまれ見物を呼ぶだけの腕はあるものと見做さなければなるまい。

それにしても権三郎は、尙だ／＼何う此ういふほどの役者でないやうだ。只目につくのは奈何なる舞臺でも餘り好い心持になり過ぎた舞臺ぶりを見せつけることである。それからもう一つ、奈何なる役をする時でも、變に首を前に突出し氣味にしてゐるのも氣になつてならぬ癖である。

廿八、市川九藏

七世市川團藏の男。

名優團藏の嫡男である。團藏が亡くなつてから、殊に影が薄くなつたやうである。歌舞伎座に出ることは出ても、権三郎なみ以上の待遇はされてないやうだ。鳶が鷹を生むことがあ

るとすれば、鷹が鳶を生むこともある。



九藏は舞器用のやうに見えて案外器用なところのある役者である。拙なやうに見えて、思つたより巧いとこのある役者である。ギス／＼してゐるやうに見えて、柔かなところも持つてゐる役者である。だが歌舞伎座に来ては、氣の毒ながら、形なしと謂はなければならぬ。團藏の長兵衛に、権八といふお目見得の抑々から榮えない人にされて了つた。「馬盟」の光秀では桔梗といふ好い役もついたが、これも見ん事、事を破してゐるやうであつた。その他歌舞伎座では何をやつても、失敗でないまでも榮えないことばかりである。

九藏は榮えない役者である。藝ばかりでなくその役者ぶりも榮えない。年が年だから、白く塗るやうな役ばかりしてゐるが、この白く塗つた顔が第一餘り榮えない。

九藏の顔は出来方から謂へば、決して白く塗れる顔といふのではない。そして淋しい。愛嬌がない。艶もなければ、味もない。何んとなしに人好がせぬやうに出来てゐるらしい。それは、頬も腮も一體に尖つて出来てゐるからであらう。眼なぞ見ると些つと、優しい光もあるのだが、此の光に消壓されて了つて、何の役にも立たないことになつてゐる。柄にしても普通に出来てゐる。しかし普通といふ他何も謂ふことが無いやうだ。強ひて謂へば、奈何に

父團藏とは明治四十四年十月死別。

も品も、しなも無さすぎる。

次に白——これがまた頗る難物である。格別悪調子といふのではないが、好い感じを與へぬことだけは確かである。音其物に粘つこいやうなところが有りながら、それでゐてバサバサしてゐる。甚だ響もよくない。廻し方も氣の無いこと夥しい。九藏は白と謂ふものを貫つた書拔を舞臺聲に些ツとメリハリをつけて讀むでれば可いものと思つてゐるらしい。役者は工夫といふことが大切である。

一體に九藏の舞臺ぶりは氣が無いやうである。熱が無いのか、才が無いのか、お役目に舞臺に出て、爲なければならぬだけのことを爲れば、後は天下泰平といふ風が見える。別の言葉で謂ふと、舞臺を仕事場と同じやうに思つてゐるといふ風が見える。これは何んとか改良しなければ、好い役者にはなれないだらう。

昔ならば、三河屋の八世嫡孫として、豈夫に小芝居廻りはしなかつたらう。また爲せもしなかつたらう。しかし時世が時世である。今更其様なことを謂つても始まらない。小芝居では九藏は立者の一人になつてゐるやうだ。柔なところもやる、固いところもやる、また意氣なところもやれば、地味なところも女形もやる。しかし何をやつても、此うといふ程見榮えのあることもしなければ、團藏畑へは尙だ足の先も踏み込むで居ないやうである。踏込まない

のか、踏込めないのか、何んにしても、疾く團藏の面影だけでも見られるやうな役者になつて貰ひたい。文覺や「彦山」のおそのをやるのは可いとして、鈴木主水や中山安兵衛で納つてゐては行末甚だ覺束ないやうである。

廿九、中村梅玉



東西の役者を通じて長老である。年は七十三だとか、四だとかいふ老翁である。

此の老翁が、判官をつとめ「又五郎狐」の正行になり「菊畑」の智恵内や「在原系圖」の蘭平を樂に勤めるといふのだから、明治、大正聖代の瑞祥とでも謂はなければなるまい。芽出度い翁である。

一體素人でも此うした高齡な老人になると、ヨボ／＼したところがあつて、餘り見ツとも好くないものである。況や役者である。七十にもなると大概の者では老ぼれが目についてならぬ譯である。

ところが梅玉は殆んど老ぼれたところが無いと謂つて差支へが無いやうだ。昔大太夫半四郎といふ名優は七十幾つとかで八重垣姫に扮したといふ話を聞いてゐる。近く團藏は、これ

初め三樹他人
のち中村福助
また梅玉。

死去。

も七十幾つかで、仁木となり、光秀となつて凄い眼を光らせて見せた。が半四郎は知らず、團藏は眼を光らせたとは謂へ、明かに老ぼれが見えてゐた。此團藏に比べると、梅玉は尙だ尙だシツカリしたものだと言はなければならぬ。

藝風のせるばかりでなしに、梅玉には顔にも柄にも尙だ、ふつくらしたところがある。白く塗る役でもすると、それは若々しいところがある。藝の故もあらう。だが其よりも柄と顔のせいでと謂はなければならぬ。

梅玉は世の所謂福徳圓滿なる顔をしてゐる翁である。見るから福々しい。見るから長者らしい。此の福徳圓滿なる相をしてゐる梅玉は、大々的熱心なる法華信者だと聞いてゐる。法華信者だから、祖師日蓮に随喜渴仰するのは當前である。それで先の團十郎が日蓮を勤めた時に、——辻説法の時だつたか、何うかそれはハツキリと覚えぬけれども、——それを見やう爲に大阪からワザ／＼微行的に上京した程の熱心家である。

されば自分でも佐渡の日蓮だとか、勘作住家の日蓮だとか、——種々な日蓮を得意藝としてゐる。そして東京に来る時は必ず此の日蓮の何れかを土産狂言にして出すことが定例のやうになつてゐる。

雖然、此の翁の信心について何う此う謂ふのでなしに、梅玉は藝風なり、柄や顔——所詮

役者ぶりから見て、梅玉は決して日蓮役者でないと断言する。日蓮は豪邁なる英雄僧である。佐渡に流されても、身延に老ても、意氣に軒昂たるところがあり、態度に颯爽たるところがなければならぬ。折伏と、勇猛心は日蓮の生命である。——

などと喧しく日蓮論をやるでも無い。履違か、役者ぶりのせるか知らないが、梅玉の日蓮は、餘り圓滿無事に過ぎ、餘り温厚平凡に過ぎて、日蓮といふよりも、法然に近い人になつて了ふ。それは梅玉が年を老せて意氣が衰へたからと云ふでは無い。梅玉は高福と謂つた福助時代から、圓滿な人として、舞臺ぶりの穩かな役者として、人氣を取り、地位を進めて来た人である。

梅玉は有徳の役者である。君子人と謂はれぬまでも、君子らしい美徳のある人である。嘗て團十郎と一座して、自分の儲かる任どころを抜いて、團十郎の舞臺の引立つやうにしたといふ話がある。團十郎ばかりでなしに、梅玉は誰に向つても然ういふ親切と、謙讓とがあるらしい。

其の心もちなり、心掛けが舞臺ぶりにも現はれてゐる。例へば「紙治」茶屋場の粉屋孫右衛門になつたとする。其の好い悪いよりは、先づ、律義で親切で、弟思ひの行届いた兄さんぶりに感服させられて了ふ。此の兄ならば、治兵衛役者が誰であつても、スツカリ寄りか

かつて思ふまゝに藝が出来やうといふものである。

これは藝の力ではない。梅玉の徳である。梅玉の親切と謙讓との徳である。

此の有徳な老優の藝や役者ぶりや、舞臺ぶりを、茲に左や右ういふのは無用なるわざくれのやうに思はれる。がしかし、奈何に老大家だと謂ひ、天下に定評があると謂つて、一とわたり何んとか謂はなければ、役目の手前相濟まぬやうにも思はれる。

先づ概括的に謂へば、梅玉は自分で芝居することも巧い人には違ひないが、他に芝居させることも上手な人である。然う謂へば松助などにも然ういふことがあるが、これは謙讓といふでもなければ親切といふのでも無いやうだ。謂つて見れば、自分の役目で冴えた腕で對手を引立てるといふ方らしい。梅玉となると、役目といふ意味は少しも無しに、自分の當場まで捨てる、對手に花を持たせるといふ度量がある。此の餘裕のあるところ、親切なところが梅玉の舞臺の際立つた特色と謂はなければなるまい。

役どころを謂へば、立役も老役も、女形も行く。女形といふうちにも、女房役、内儀役が本役であらう。此の頃は鴈治郎對手に屢く阿母役に廻つてゐるやうだが「太十」の操とかいふやうなところが藝にも柄にもある極付のものであらう。

立役は、時代も世話も行くが、餘り固いものは不得手のやうだ。また調子の高いものとか

調子を張らなければならぬやうなものも可けないやうだ。一體に氣に乏しい人であるから東京式の氣合とか調子とかで見せるものは不向である。去年新富座でやつた「岡崎」の幸兵衛の如きにしても、氣合に不足があつて、武藝の達人とは受取り難かつた。那がもし大庄屋某であつたら、至極結構なものであつたらう。

それから梅玉には「悪」の分子が微塵もない。その人格が藝まで出てゐるといふのか、奸の分子も、佞の分子も、邪の分子もない。春藤玄蕃のやうな上つらだけの悪人になつても、顔が赤いといふだけで、白もこなしも、根つから氣の好いをちさんになつて了ふ。梅玉には何様な種類の悪人と謂はず、悪人は頭で柄に無い。

梅玉は何處までも舞臺ぶりの穩當な人である。苦味も辛味も強味もない代りに、癖も、嫌味もない。そして手ぬるいと思はれるやうなところもあるだけに、ふつくらしたうちに、輕いが、何んとも謂はれぬ柔なうま味を持つてゐる役者である。此のうま味は幾ら見ても飽が來ない。刺戟性で無いからであらう。

年が年である。梅玉にはもう艶もなければ色彩も無い。しかし影に大きく濃厚なところがあつて、また何んとも思はずに見てゐるうちに、何時とはなしに柔かに、丸め込むやうに人を引付ける力を持つてゐる。

一子福助、昭和十年梅玉をつぐ。

その質を謂へば、大きな役者とか、傑れた役者とかいふのでは無い。若い頃から常識的に圓滿に發達して來て、それが老熟して、一味揃すべき古雅な味を持つた役者である。藝を謂へば平淡な人である。役者ぶりを謂へば穩當な人である。人を謂へば有徳の人である。繰返して謂ふ。福徳圓滿なる老翁福助の昔名のふさはしい人である。

卅、澤村源之助

父は三世澤村源之助。幼名澤村清十郎。



て了つて、今では殆んど影も見えないやうになつて了つた。

櫛巻や、横櫛の女は江戸末期の産物で、此の型の女を形容して、てツかとか傳法とかいふ。源之助は然ういふ女に扮するのが得意であり、また柄にもはまつてゐた。

此ういふ質の女は、浮氣ツぽいところが無ければならない。心もちがすれてゐなければならぬ。また太ッ腹であり、押し強いところが無ければならない。男なんぞは何ンとも思はず

に、しかも男を自由自在にあやす術も、蕩す魅力も持つてゐなければならぬ。智慧があつて氣が利いてゐて、小股がきれて、スラリとして、邪慳なところがあつて、それでゐて案外情にもろいところがあつて、また次第によつては出刃庖丁と櫛巻と、立膝と、長煙管と手拭と襟つき要するに複雑な女である。心もちの塵囂した女である。

源之助の顔なり柄なり、其の藝風は、自ら此の種の女に適するやうに出來てゐると謂なればならない。源之助と謂へば直ぐに出刃庖丁と櫛巻と、立膝と、長煙管と手拭と襟つきの半纏と、そして白い腰巻と、青い眉毛の痕とが聯想される。

女形といふうちにも、源之助の領分は廣くない。純な娘役や姫、堅氣な内儀役、また烈婦式の女、——全て可けない。源之助は、傳法か、てツかか、さもなければ邪慳な繼母といふやうな女でなければ向かない。取分け毒婦と、自分でお轉婆者と名乗るやうな女が專賣物になつてゐる。また「春雨傘」の丁山のやうな敵役じみた花魁にも源之助でなければならぬやうなものがあるやうだ。

源之助が泣くと、眞んと泣く役でも空々しいやうに見える。何うしても哀ツぽい舞臺ぶりを見せることの出來ない人である。源之助は氣丈で色氣のある女でなければ駄目である。しかも其が少し年増でなければならぬやうだ。

役でいふと鬼神のお松である。「女團七」のお梶である。「切られお富」のお富である。「女定九郎」の蝮のお市である。その他此の種の女は幾らもあるやうだが、何れも痰火が切れて腕に彫物があるやうなものでなければならぬ。餘程堅氣になつてからが「稻川」の女房とか「花川戸の助六」の女房とかいふところである。尤も「長町女腹切」の伯母といふやうなぐつと堅いところもあるが、これなどは氣丈なところが役立つ代りに、仇ッばいのが邪魔になると謂はなければならぬ。

近年になつて大分菊五郎式立役に手が出るやうである。無論柄や顔から謂へば、辨天小僧をやらうが、髪結新三をやらうが、切られ與三をやらうが、直侍をやらうが、些ツとも不思議はない。權太忠信は謂はずもあれ、ずツと飛離れて、團十郎畑の直實、男之助、和藤内、工藤、五郎——何をやつたところで差支が無い。

柄と顔とから謂へば、確に然うである。此ういふ點からいふと、先の秀調や、死んだ松之助に比べると餘程重寶に出来た人である。現に何時か由良之助を見たことがあつたが、顔付に於て、押出しに於て、當代些ツと此ういふ華麗で見えて呉れの可い由良之助役者はあるまいと思はれた。姿は團十郎前派の趣のあつたのも嬉しかつた。また此の春「血達磨」の大詰に出る堀帯刀といふ家老を見たが、その役者ぶりの立派なことに於て鶏群の一鶴といふやう

に光ツてゐた。

源之助はその役者ぶりに於て、東京役者のうちで、最も役者らしい役者の一人である。そして其の舞臺ぶりには、昔の役者を見るやうな一種の氣分を出してゐる。それは江戸末期に見えた廢頹した刺戟的のものだとも謂へる。

左にまれ源之助は、江戸時代の泥溝の臭氣が體に泌みこむでゐる役者のやうに思はれる。殊に「十六夜清心」とか「女團七」とか「女定九郎」とか、また「鬼神のお松」といふやうな芝居を見せる時に然ういふ感じがする。

幾ら押出しが立派でも、顔付が似顔繪のやうでも、源之助には一切立役をやつて貰ひたくない。由良之助はこの役は謂ふまでもないこと、勘平も判官も、また一切の菊五郎畑の物もやらせたくないものだ。然うでなくとも老て艶がぬけ、小芝居廻りの萬屋で藝が荒み、所謂源之助式の生彩が無くなりかけてゐるところだ。何んとかして、終りを全うさせる工夫がないものだらうか。此の後見ようとして見られない人である。

源之助は源之助でなければならぬ物を持つてゐる役者である。今も持つてゐる。よし色は褪めても、よし今の世には觀る人が少ないにしても、それは或る時代には持囃された一種特別の物である。一度は觸れても見、味はツても見、鑑賞して見ても可い物である。浮氣ツ

ぼい、しかし冷ッたいやうな顔、艶しいが熱の無い白、氣は利いてゐるが空々しいやうな舞臺ぶり——源之助は生れながら毒婦役者に出来た役者のやうである。一と頃は、此の毒婦役者のでツかな舞臺ぶりに魅せられた女も少くなかつたといふが、今は色も香も衰えた。何んだか惜しいやうな情ないやうな氣もせぬでは無い。

卅一、澤村傳次郎



澤村訥子の門。のち養子となつて今訥子を名乗り大劇場に出勤。

宗之助門下の高足だといふことである。淺草本所あたりでは好い役者だと謂はれてゐる。人氣もあるのだらう、好い役もする。顔もきり、と引締つて、綺麗といふよりも女好きのしさうな好い男といふ方らしい。老役さへ除いたら、芝居一と通りの役はなんでもござれでやつてゐるらしい。若衆役や、殿、義經、義家といふやうな大將役になると、些つと幅のある傳次郎聲で、ナカ／＼納つたところも見せれば、目にもつく。傳次郎聲と謂へば、此の人の白には、一種の特色がある。好い響とは謂へないが、耳につく響である。些ツと聞くと重いと重いと聞えるが、耳に馴れてくると嫌氣がさして、結局傳次郎聲といふことになる。音量のあるにまかせて、何んの工夫もなしに一

本調子にツンペラにやつてのけるからであらう。

春は低い方だが、役者ぶりは悪くはなし、加之白がドスの利く方だから、對手が相應なところでありさへすれば、星影土右衛門とか、京極内匠と謂つたやうな敵役も行く。女形も些ツとした女房役とか、御臺役位ならば樂なものらしい。

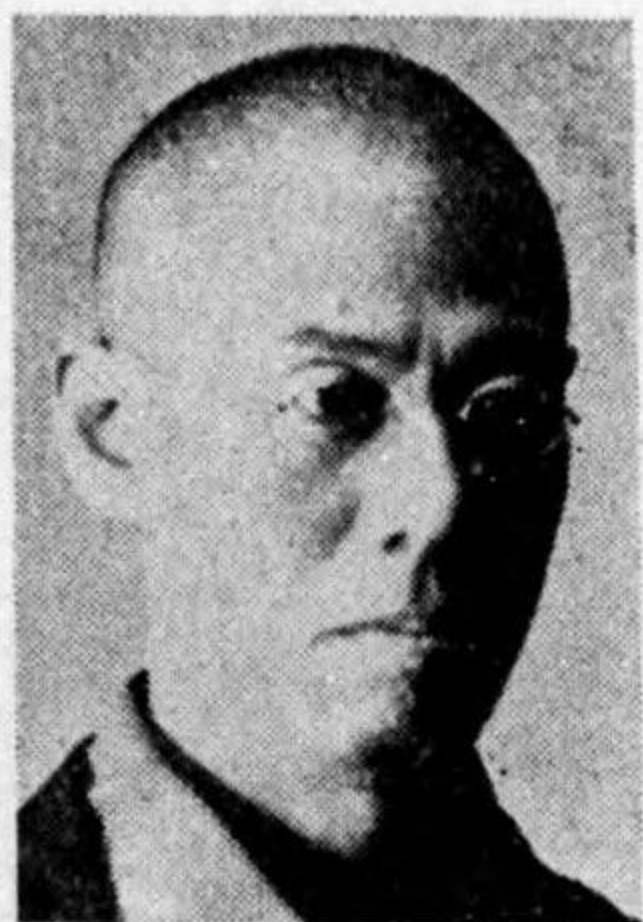
しかし本役は儲るところのある、若侍とか、子分の何ンとかとか、源次とか、何ンとか長太とかいふ勢の好いところを見せる役であらう。

何ういふ因縁でか自分は此の人の「魚屋宗五郎」の若い者三吉といふ役を二度まで見た。一度は幸藏の宗五郎の時、一度は訥子のその時である。此の三吉は、扮りから、氣合、こなしも調子もスツカリ寫實で、確かに本役だと思つた。傳次郎は見たうちでは是程の出來の物はない。

安手ながらも、舞臺に落付いたところもあり力もあり、出すところへ出して修業をさせた、使へる役者になるだらうが、もう好い役者になりきつた積りであるとの見えるのは困つたものである。取柄を謂へば、何役にも相應に氣を入れて、また相應に器用にこなして行くことであらう。加之役者ぶりととも悪くはない。

世二、澤村訥子

初め中村千之助、のち高屋高助の養子となつて訥子をつぐ。
死去。



劇評家の所謂訥子劇の親方で、何役にでも訥子一流を發揮しなければ納らない人である。そして何處へ行つても、訥子は訥子の芝居をして押通してゐる人である。それで客を呼ぼうともし、また呼んでもゐる人である。

近年訥子の人氣も稍衰微の體となつて來たが、それでも尙だく訥子の芝居でなければならぬ見物も少くない。何しろ芝居は拙でも、見物さへ見に来れば可いといふ流儀でやり通してゐるのだから、その心掛に免じて相應に訥子崇拜の見物もあらうといふものである。一體訥子は小さくとも自分の城を持つて、采配を振らなければ承知の出來ない性分の人のやうである。それでといふ譯ではあるまいが、弟子も大勢持つてゐて、他人いらず、一家一門で手芝居の打てるのは、音羽屋一家と、訥子一門だけだとも謂はれた。それは先の菊五郎時代のことだから、今は何うだか知らない。

何んにしても個人としての訥子は、此ういふやうに策士とか、やりてとかいふやうな素質を備へてゐるらしい。芝居は訥子劇でも、人間にはナカク／＼えらいところがあるらしい。實際

はどうか知らないが、遠くで見ると、然うのやうに思はれる。

顔付を見ても其様なところがあるやうに思はれる。一口に謂へば先づ役者らしくない顔といふのであらう。若い時分には可成女に騒がれたといふことだが、今では愛嬌も、そつけもない。無愛想な、怖い顔のをぢさんになつて了つてゐる。取分け眼の光に蠻氣の威力とでもいふやうな閃がある。思ふに訥子のがむしやら劇は、此の光の力ではあるまいか。

その舞臺ぶりを謂へば、何時奈何なる舞臺でも元氣一杯に活動する。謂はば精力主義、奮闘主義とでもいふのであらう。極端に謂へば何んでも盛に暴れ廻らなければ納まらないのである。尤も根が武藝事の達人を以て任じてゐる人である。訥子の芝居には必ず大立廻りがないければならないことになつてゐる。此の立廻り好きのところは甚だ先代左團次に似てゐるやうだが、訥子の其は先代左團次よりも餘程猛烈なところがあるやうだ。

立廻りばかりで無く、訥子の舞臺ぶりには少からず先代左團次に似通つたところがあるやうだ。第一に武張つたところに共通點がある。次に行方は違つても、氣で芝居をしてゐるとも似てゐると謂へば然うも謂はれる。それから訥子が好んで丸橋忠彌とか、馬場三郎兵衛とか、先代左團次が得意藝としてゐる物をやる故もあるだらう。また舞臺を車輪に勢力主義を發揮するところも似てゐると謂へば似てゐるとも謂へる。左もあれ訥子が、團、菊、

左、この三巨頭のうちで、誰に最も似通つてゐるかと言へば、それは明かに左團次に言ふことが出来る。更に人間らしい、えらさうなところのあるのも似てゐると謂はなければならぬ。しかし訥子には、舞臺の上に、先代左團次のやうにキビクした調子の好いところも無ければ、顔付に苦味走つた江戸前なところも無い。そして其の役者ぶりを言へば、假に先代左團次を札差の旦那衆としたならば、訥子は諸國修業の劍客とでもいふやうな柄である。訥子は先代左團次に武張つた物の他に劍客物を得意藝にしてゐる。何れも鈍子の何藏とか、高萩の何松とかいふ博徒の親分衆を主人公にした立廻りの多い芝居である。謂ふまでもなく、「十段目」の光秀だとか、「配膳」の輝虎だとか、「壬生村」「山門」の五右衛門だとか、「扇屋」「陣屋」の熊谷だとか、「刈萱」の重氏だとか、——その他、時代物世話物、種々得意の役とか當り藝があるやうである、それが何れも訥子一流の型、または見識とか主義に依つて一流の芝居をして見せられるのである。

何をやつても、訥子には訥子の行き方がある。大體は芝居の定法通り先人の型を辿つてやるにしても、局所々々へは、大膽に且つ無遠慮に、自分の工夫と仕勝手を加へて、奈何なる芝居をも一流訥子劇化して止まない。無法と謂へば無法、えらいと謂へばえらいと謂はなければならぬ。

三三、林長三郎

中村鷹治郎の男。



鷹治郎の總領ツ子で、坊んちから、若旦那になつたばかりの人である。

要するに訥子は訥子の芝居をして、それで訥子の見物と呼んでゐる役者である。訥子好きは、訥子の芝居でなければ芝居を見るやうな氣がせぬといふさうだ。して見ると訥子も、訥子一流、人を引付ける力のある役者と謂はなければならぬ。

長松が親の名で来る御慶かな——といふ發句がある。長三郎が父と一緒に東上する度に、自分は何ンとなく、此の句が胸に浮ぶ。何ういふわけだが自分にも分らぬ。

何ンにしても東京には居ない人だから、その舞臺ぶりを見る機會が少い。また東京に來ても是といふほどの役もつかず、雁童ほどの活動もしないのだから、それで何う此ういふのもチトお氣の毒見たやうでもある。

正直に言へば、長三郎の東京に於ける舞臺の印象は、扇雀ほど鮮でない。無論役が役だからといふせるもあらうが、その舞臺ぶりにも役者ぶりにも、何うもバツとしたところが無

林 長三郎

い。「寺子屋の涎くり」など、當てやうと思へば可成當てることの出来る役なのだが、無味乾燥、甚だ平凡な出来榮に終つて了つた。

それで大阪では左もあれ、東京では長三郎のことを無器用役者と見做すやうになつて了つたらしい。だが今の年で、無器用といふことは、さして憂ふべきことで無い。今のうちは悪くこせついたり器用ぶつたり、巧者ぶつたりするよりは、長三郎式にボーとしてゐる方が有望かも知れない。

長三郎は何處かボーとしたところのある役者である。背が伸び過ぎてゐる故でもあらうが、役者ぶり全體に間の延びてゐるといふうちには幾分ノンビリといふ意味も含まれてゐる。

自分は長三郎の舞臺ぶりを見ると、何にがなし、羽左衛門の竹松時代を思ひ出す。背のヒヨロリとしたところも似てゐる。舞臺ぶりの間の延びたボーとしたところのあるのも似てゐる。頬のこけたところも似てゐる。顔にも姿にも、また白などもだらけ氣味で少しも固まつたところのないのも似てゐる。更に突ツ込むで謂へば、悪くすると大根を喰ひさうなところまで似てゐる。羽左衛門は竹松時代には、ナカ〜大根呼はりをされたものだが、長三郎も東京にゐたら然うでは無いかと思はれる。

間は延びてゐても、長三郎は舞臺ぶりにも、役者ぶりにも嫌味がない。氏より育ちといふ。

大和橋の捕手
は明治四十二
年九月の歌舞
伎座。

當代一二と謂はれる名家の子に生れてゐるだけに、姿に顔に自らなる品といふ奴が備つて、麗はしいところもある。鷹揚らしいところも見える。だがしかし、多分鷹治郎が近年歌舞伎座に來た二度目の時であつたと思ふ。其の時長三郎も一緒に來て、片市が改名披露の「大和橋」の捕手になつて出たことがある。此の捕手は、八百藏、段四郎、宗十郎といふ歴々ばかりであつたせいにか、長三郎の役者ぶりの若々しさと淋しいところのあるのが目についてならなかつた。それが先入主となつた譯か、以來何ういふ舞臺に長三郎を見ても役者ぶりの淋しいのが目についてならぬ。見窄らしいといふのではない。見榮えがせぬのである。引立たぬところがあるのである。

大體から謂つて、長三郎は決して役者ぶりの悪い役者ではないが、役者ぶりに此の淋しいところがあるのと、舞臺ぶりに間の延びたところがあるので、見てゐて何んとなし齒痒いとこのある、引立たぬ役者である。此後は知らず、今分では確かに然うだと謂へる。殊に扇雀が鮮かな、頼もしげな舞臺を見せるので、長三郎の引立たぬのが一入目立つて、世間でいふ總領の何んとやらいふ感じをさせぬでも無い。長三郎の發奮を望むと同時に、慈父鷹治郎の嚴正周到なる教導扶育が望ましい。

卅四、中村米吉



大播磨屋の次男坊で、吉右衛門の實弟に當る可憐な子役米吉も何時の間にか若々しい若衆役者になつて了つた。若衆役者になつても米吉には矢張可憐なところがある。可憐なところのあるのが、米吉の役者としての生命であるかも知れない。

何方かと謂へば顔も然う大して美しいの麗しいところがあるのといふので無い。眼がバツチリしてゐるといふではなし、口元が締まつてゐるといふではなし、何處に見榮があるといふところは無い。雖然何點かに親しみのある可愛い顔をしてゐる。一つは下膨れのせいでもあ

るかも知れない。まだ年が若いといふ故もあるだらう。此の下膨れの顔が利いてか、藝の質か、それは解らないが、米吉の娘役又は、小娘の役は何時も成功する。してその小娘役や娘役も、餘り華美なのや、色氣のあるのや、謂つて見ると綺麗事なのは可けないやうである。これも矢張可憐らしいのとか、哀れつばいやうなのが柄に向くやうである。

役でいふと「加賀鳶」のおあさの如きは哀ツばい方を代表する方であらう。「牡丹燈籠」の

三世中村歌六の男。今の中村時藏。

「牡丹燈籠」のお露は、明治四十五年七月の新富座。

お露は淋しい方を代表すると謂はなければならない。おあさも、お露も好い出来であつた。殊にお露のチャトリとして、艶に淋しい幽霊ぶりは何時までも眼に残るやうな出来栄と謂つて差支はあるまい。

その他吉右衛門芝居では「酒井の太鼓」の梅が枝とか「馬盟」の桔梗とかいふ役も、米吉の役で、また好い舞臺ぶりを見せるとしななければならない。

若衆役の方では、市村座の力彌役者である「眉間割」の蘭丸なども、吉右衛門の其のやうにキビ／＼した調子は無いまでも、先づ柄にある役と謂はなければならない。もう四五年も前の事だが、吉右衛門が歌舞伎座で此の蘭丸をやつた時に、米吉は力丸役で兄の後について出たが、自分は其の時分から米吉の舞臺ぶりが目についた。力丸は別にしどころも無ければ白も無いが、兄と並んで色彩のある舞臺ぶりは今に目に残つてゐる。「春雨傘」の靱負となる

と、何んと謂つても尙だ子供々々したところがある。男寅と米吉——市村座組若衆役者、または小娘役の御神酒徳利ともいふべきであらう。役どころは同じであるが、舞臺ぶりも役者ぶりも違ふ。

此の二人の役者の好い悪いは、人々の好不好で定められるとして、先づ役者ぶりを謂へば男寅は鮮かであり、米吉は可憐らしい。花で謂へば男寅には夏の花の感じが

秋の花らしいところがある。お露のやうな淋しみのある役になると男寅は到底及ぶべくもないが、蘭丸のやうな役になると、米吉は到底男寅のスキリした舞臺ぶりには及ばぬとしなければならぬ。更に別な言葉でいふと、米吉は男寅よりも、おとなしやかなところがあり、控目なところがあり、内氣なところがあるやうだ。それだけ米吉は男寅よりも女性的であるとも謂へる。

此の後のことは解らないが、今のところ米吉は、若衆役よりも、小娘または娘役の方が柄にもあり、また成功もするやうである。元來歌六の家は女形だといふ。多分米吉の祖父さんに當る歌六であらうと思ふが、この歌六は梅玉の門下から出て、一代の名優となつた女形である。して見れば米吉には遺傳的に女形の血が流れてゐないとも謂へぬ。

可憐なる米吉——何時までも其のチツトリとした淋しみのある特色を失はぬやうにしてゐて貰ひたい。

卅五、市川右團次

齋入老の嫡男、二世の右團次で、關西第一の踊手と謂はれてゐる人である。福助、我童、大阪の名門の子は顔の綺麗な、そして役者ぶりのチツトリとした人ばかりと思つてゐた

市川齋入の男
初め市川右之助。

明治四十五年
一月新富座へ
來て「梅鉢」
の萬右衛門を
やつた。

明治四十四年
十一月、帝劇
へ來て龜井六
郎をやつた。

ら、此の人のやうな、顔も綺麗でなければ、役者ぶりもチツトリとしない人もある。

しかし大阪では人氣役者の一人で、地位も餘程上に居るやうだ。右之助時代にも東京に來てゐたことがあるが、近來帝劇にも來れば、梅玉を上置に、福助、延二郎、璃珪などといふ一座で新富座にも來た。帝劇では父齋入の「後藤」に龜井と、梅幸の「金毛狐」に三浦助を演つたが、何れも餘り芳しからぬ出來榮のやうであつた。取分け龜井の如きは、白にもこな

しにもギクシヤクするところがあり、一體に調子がスキリせぬので、非難があつたらしい。



新富座では、確かに「梅鉢」とか謂つた後の加賀騒動に中村萬右衛門、梅玉の「佐渡の日蓮」に何とか謂つた鎌倉大名式の武

士、切に自分の出し物として、又五郎狐の所作事を見せた。萬右衛門はお家騒動の張本人として、餘りに若輩で且つ騒動を惹起す程の人體には受取れなかつたが、龍神の能がかりの舞は、道に心得のある人と見受けられた。何んとかいふ鎌倉武士は、上方式のギクシヤクだが目について、右團次を嫌にならざるを得なかつた。又五郎狐、これは東京では餘り見ないものではあり、齋入譲りの得意藝とあつて、身のあつかひも軽く、三ツ面の所作も輕妙、狐といふ心もちも充分見えて、右團次の面目が始めて發揮されたと謂はなければならなかつ

た。
又五郎狐は確に右團次がお土産狂言とするだけの價値のある出し物であつたと謂はなければならぬ。

「又五郎狐」などの腕前で見ると、右團次は、能く藝を仕込まれた人と謂はなければならぬ人のやうだ。そして「狐忠信」だとか、「大藏卿」とかいふものを得意藝としてゐる人ではあるまいか。

延二郎、成太郎、福助、または死んだ延三郎——大阪の若手の腕利と謂はれる人には、何れも其の舞臺ぶりに共通した色とか匂が見えるやうだ。それは何れも舞臺の氣込とか、呼吸に、鷹治郎張といふところが微見えてゐることである。鷹治郎張といふよりは、或は大阪役者おしなべての調子とか色とかいふものかも知れないが、それが鷹治郎といふ巨頭に依つて、程好く鮮に代表されてゐるから、何れも鷹治郎の感化影響を受けてゐるのでは無いかと思はれる。

假に大阪役者の若手の腕利が、何れも多少の感化影響を受けてゐるとする。其の内にあつて右團次だけは、殆んど其の影響を受けてゐないか或は受けてゐても極めて微弱な程度であると謂はなければならぬ人のやうである。

右團次は大阪の若手役者のうちでは些ツと毛色の違つた行方をしてゐるやうである。行方といふよりは、柄なり藝が自ら違つてゐるのかも知れない。と謂つて無論東京式といふのでもなければ、舞臺ぶりとか役者ぶりに新しいところか毛色の變つたところがあるといふのでは無い。只何點か一調子のとこのある大阪若手の腕揃ひのうちでは些ツと趣を異にしてゐるといふだけである。

右團次も矢張り大阪役者である。大阪役者一流の芬も色も調子も癖も、また長所も短所も持つてゐる人である。仕込まれた藝だけで芝居をして、融通も利き、働けもする役者に出來てゐる。だがしかし、大阪の若手は、何れも二枚目といふうちにも、大阪式世話物役者に出來てゐるといふのに右團次は何れかと謂へば大阪式時代物役者といふ傾があるやうだ。藝にか、役者ぶりにか、右團次には、それだけ固いところが有り、ぎごちないやうなところが有り、また無器用なところもあると謂へる。

右團次は大阪若手役者のうちでは、最も固いとこのある役者である。それが右團次の特色と謂へば特色、強味と謂へば強味でもあらうが、また其で損をしてゐると謂はなければならぬ。右團次に喰ひつきの悪いやうなところのあるのは、確かに此の固いとこが崇つてゐるのだと謂はなければならぬ。但し固いと謂つても踊のある人である。極端にといふのでは無い。

その木地にコツ／＼したところがあるといふのである。

固いと謂つても柔味に乏しいと謂つても、またギクシヤクするところがあると謂つても右團次には右團次の芝居があり藝があり、そして特長がある。顔も柄も綺麗でもなければ、ふつくりとしてもゐないが、押出しの立派なところがある、大きいやうなところがある。調子は好くないが、手堅いところがないとは謂へぬ、華麗ではないが、幅があり、落付いたところ無いとは謂へぬ。うまみは無いにしても、淋しい役者とは謂へぬ。

繰返していふ、右團次には右團次の藝があり、芝居がある。もしギクシヤクするところが除れ、役者に儲がつき、藝にうまみが出たら、時代物役者として地歩を占め光彩を放ち得ると思ふ。役者ぶりに固いところがあるだけに、大きな役者になる素質があるやうだ。

卅六、中村福助



大阪人気役者の筆頭だといふことである。東京でも近年になつて、人氣隆々たるものである。役者ぶりを見ても、舞臺ぶりを見ても、人氣のつきさうな役者である。花々しい花形役者である。東京の芝居好は誰でも此の人だけは東京に置きたいといふ。美し

中村梅玉の子
初め中村政次
郎。いま梅玉
をつぐ。

い花は折手が多い。綺麗な女は引手数多である。

東京にも大阪にも綺麗な人は少くない、美しい役者は少くない。雖然見飽のする人もあれば、嫌味な人もあり、また好嫌をされる人もある。が福助だけは、萬人向である。百人が百人、讚めやうに甲乙はあつても、好いといふ言葉は一致する。

福助は美しいばかりでなし、チツトリしてゐるばかりでなし、優しいばかりでなしに、何點かに人を引付ける要素を有つてゐるらしい。しかし其の要素といふ奴は、拵物ではない。

福助が人に好かれやうと思つて、藝や工夫で作つたものには無い。自然に備はつたのである。持つて生れた奴である。堅い言葉でいふと人徳とでもいふべきものである。福助も父梅玉のやうに何點かに徳もある役者と謂はなければなるまい。

福助の顔は、格別愛嬌に富むだといふのでもなければ、うまみがあるといふ顔でもない。また水の滴るやうな美しさがあるといふでもなければ、花のやうに艶麗な顔といふでもない。

これを今の歌右衛門の福助時代の顔にくらべると、單に美しいといふだけでも餘程見劣りがするやうに思はれる。況や艶である、氣品である。假に美しさを五分々にしても、歌右衛門の方は、ふくよかで、且つ艶があり、水の滴るやうなところがあつた。しかし歌右衛門には其の時分から冷な感じのするところがあつた。それがまた那の氣品ともなつたのであら

うが、左にまれ、暖かいとことか可憐らしいとこがなかつた。

福助の顔は美しい割に沈むだ顔である。淋しいとこのある顔である。同時に可憐らしいとこがあり、うい／＼しいとこがある。これが何うも人好のする要素となつてゐるやうに思はれる。

役者の質から謂つても、然うである。女形としての福助は、ヒステリックな烈しいとこのあるやうな女は頭で柄にないとしなければならぬ。また老けたのと若いのを問はず、烈婦式の女——別の言葉でいふと、性根のあるやうな女も不向である。さればと謂つて濃艶なお姫様や、華麗な花魁、きり、とした藝者、艶いた妾、または浮氣っぽい女とか、腹の黒い女も何うかと思ふ。或は全く不向なものもあらうし、然うでなくとも餘り芳ばしからぬものと謂はなければなるまい。此う壘み込んで来ると、福助の役の領分は甚だ狭くなるやうだが何うも爲方が無い。また役の領分が狭いと謂つて、福助といふ役者の價値に何んの影響があらうとも思はれぬ。領分が廣くとも土地が痩せてゐては何んにもならぬ譯である。

假に役に就いて謂へば、福助はお染役者ではなくて、お光役者である。お初や岩藤役者ではなくて、尾上役者である。八重垣姫などは得意藝の一つになつてゐるが、藝は別として、役者ぶりの氣分からいふなら、濡衣役者と謂はなければならぬやうである。して此の論結

は「紙治」の小春よりも、おさんの方で光つて見える役者といふことになるのである。また此のおさん役者らしいところが、聽て福助の人氣の集るところだと謂つて差支へないだらう。

福助は何處までも可憐らしいとこのある役者である。心もちも純なら、柄に出てゐる氣分も純な役者である。役者ぶりに出てゐる情合とかなさけとかいふものを見ても、福助の藝の中でもなければ濃かといふのでもない。柔な眞綿にでも觸れるやうな柔さと、程好い懐爐でも抱いたやうな暖かさである。穩である。すなほである。これがまた「どんどろ」のお弓や「寺子屋」の千代になつて、奈何にも母らしい母の氣持を出し得る所故ではあるまいか。福助は母としては柔和な、女房としては貞淑な、娘としては可憐らしくも、い／＼しい。

流の女としては内氣におとなしやかな氣分を持つた役者である。若衆役としての福助は、女形よりも餘程程氣があるやうだ。女形よりも好いといふのでは無い。姿に調子に水際立つたところがあるといふのである。もし若衆役だけ見たならば、此の女形を若衆役者と思込むで了ふかも知れない。

東京に来て見せた数は尙だ極めて少ない。「岡崎」の志津馬と、「車引」の櫻丸と、「八百屋お七」の吉三位のものであるけれども、三役ともに、見た眼にも美しく、こなしも柔に、福助が若衆役たる天分を流露して、殆んど遺憾のない出来であつたと謂なければならぬ。福

「菅公」は大正二年二月の新富座。

助は好い女形であると同時に、好い若衆役者である。立役とても或種のもは、相應に行くやうである。丁度歌右衛門が立役をやると、氣品の外に何點か凛とした調子があるやうに、福助にも綺麗な外に、案外しつかりした、強いといふよりは、きついやうなところが出て来るやうである。鷹治郎が新富座で、椀久と源藏を見せた時に、新作の「菅公」といふ物を見せた。ところが鷹治郎は、胃腸に故障があつたとかで一日か二日「菅公」だけを休むで福助に代らせた。此の代り役の「菅公」は扮装に於て、押出しに於てはた態度に於て、殆んど鷹治郎の其と紛ふばかりであつた。よし菅公といふ役はさして見どころの無い役だとしても、また藤原善友といふ役で、能く鷹治郎の舞臺ぶりを見てるたとしても、其の調子から何にまで、よくも那如も鷹治郎の菅公らしい菅公になれたものだと思つた。鷹治郎のにくらべると、調子に少し細いやうなところがあつたのと、形が少し小さく見えたといふだけで、品位も氣達も申分の無い代り役であつたと謂はなければならぬ。これを以て見ても福助は、鎧や衣冠束帯をつけるやうな新作物の立役や、在物の方でも「忠臣藏」の判官や勘平どころの役々をこなすのは何んの苦もないことであらう。此ういふところは、福助も矢張大阪役者式に融通の利くやうに出来てゐるやうである。要するに福助は、舞臺ぶりがおと福助に就て謂ふことは、概略これで盡きたやうである。

なしやかといふばかりで無い、役者ぶりが好いといふばかりで無い、女形になればうるほひがあり、若衆役になれば艶があり、其處に眞珠のやうな光のある床しさとなつかしみのある役者である。福助の色彩は強くない。匂も高くない。そして強て人を引付けるといふよりは、自ら人に好かれるといふ性質を有つた役者である。しをらしき福助ぶりや紅芙蓉

廿七、中村翫太郎



何んなし好な役者である。何もせず黙つて舞臺に出てゐても面白味のある役者である。花四天や大勢出る仲間などで、やくざもくざと一緒になつて出ても、目につく役者である。顔が古いといふばかりでない。顔が翫太郎づらといふばかりで無い。何を

やつても體がチャンとコツにはまつて、立派に舞臺の人になつてゐるからである。此の人や蟹十郎のやうな役者は追々と見られなくなつて行く。それだけでも歌舞伎劇の衰微といふことが感じられると同時に、此ういふ役者がなつかしいやうな氣がする。歌舞伎劇

中村翫太郎

現中村歌右衛門の門。寫眞は里曉に扮した中村翫太郎。死去。

現在ある翫太郎は次世である。

喜知六とは阪東喜知六、俗に「ちり蓮華」といはれた、新富座の頭取だった。

では此ういふ質の役者の活動によつて、何程芝居が面白く見られてたか知れないのだ。翫太郎を見ると、何時も喜知六を思出す。喜知六が死んでから、もう餘程になるが、その時分には尙だ喜知六も翫太郎もナカク働いてゐたものだ。自分等の役どころのものは別として、二人で「夕霧伊左衛門」など、いふ振つたものがあつたやうに覺えてゐる。喜知六が由良之助の駄付けで、水ツ湊を手の甲で拭いて見せたのも確か其の時であつたと思ふ。翫太郎のことを何う此ういふ段になると、何うも謂ふことが、勢ひ懐古的にならざるを得ない。近頃ではもう翫太郎は、歌舞伎座では、居ても居なくても可いやうな役者にされてゐる。翫太郎の役者が悪いのではない。時世の故である。時世が翫太郎を働かせるやうな芝居をしなくなつたのだ。自分の見たうちでは、近年些々と振つて見せたのは「切られ興三」の時の番頭藤八などであらう。その他は大概些々顔を出すといふだけだと謂つても可いだらう。そのうちで眼に残つてゐるのは「出雲のお國」の時に蟹十郎、團八と三人で踊つた役者ぐらゐるものである。

小芝居にも近頃餘り顔を見せぬやうである。だが因果物師の小兵衛や「大藏卿」の勘解由なぞを見ると、好い悪いはさて置き、翫太郎獨特の味がするだけでも面白く見て居られる。翫太郎は道化以外にも、端敵にも一種の老役にも腕に覺のある人である。其の顔なり、其

の舞臺ぶり、只舞臺に出てゐるだけで面白味のある人だから、別に働ける役をしなくとも可いやうなものであるが、それでも偶時には翫太郎の役らしい役も見たいと思ふ。此の種の役者として最後に残つた一人として、此の老優を珍重する。翫太郎は役者其物にひねつた面白味のある役者である。

卅八、松本虎藏



帝劇では端敵どころにも使はれてゐないやうである。鼻升時代には、田舎廻りの座頭役者になつてゐたらしい。東京でも深川あたりで大きな役者になつてゐたことがあつたやうに思ふ。

幸四郎が高麗藏の頃、歌舞伎座から、明治座に移つた時に引上げられて、少時明治座の役者になつてゐた。明治座の役者としては「寺子屋」の女蕃など大役の方であつたらう。本役は先づ「女團七」のお梶に縛られる番頭傳八といふところであらう。

大歌舞伎の役者としては、少し役らしい役がつくと、芝居をして見せたがる癖のあるのが嫌である。女蕃なども此ういふ意味に於て、高麗屋甚だ味噌をつけた形があつた。此ういふ

初め市川鼻升のち幸四郎門に入つて虎藏をつぐ。死去興行師堀倉吉氏の父。

「寺子屋」の
玄蕃は明治四
十三年六月の
明治座。

五世尾上菊五
郎の門、昭和
八年死去。

長いこと小芝
居にゐたが、
明治四十四年
四月から帝劇
の座附になつ
た。

鈍臭さへ抜けたならば、達者役者としてナカ／＼使へる役者であらう。
役者ぶりは些ツと、ヅングリしてゐるやうだが、しつかりした點の見えるのは、好くとも悪くとも鍛えて来た役者と謂はなければならぬ。帝劇の格の好い仕出し役者では本人も、さぞ納まらないことであらう。

卅九、尾上幸藏



當年の大橋屋の親方である。顔付も柄も確かに親方と謂はれる資格があるやうに出来てゐる。

一と頃は先代菊五郎の影法師のやうに謂はれてゐたこともあつた。然う謂へば何處か菊五郎に似たところが無いでもない。十年前には、もつと似たところがあつたやうに思ふ。役者ぶりから謂へば首の短いところなどは甚だ似てゐると謂はなければなるまい。

誰の影法師と謂はれる人に、然う大して巧い役者はゐない。代りにはまた拙い役者で然う謂はれる例も無いやうだ。

幸藏とても其の通りである。幸藏は拙い役者といふことは出来ないが、無論下手役者とい

ふことも出来ないやうだ。

帝劇では、松助が歌舞伎座にゐた頃の役どころに廻つてゐるやうだ。成程幸藏は、松助ほど頭抜けたところもなければ、また那程の味もないが、或る程度まで松助の穴を行ける人である。

味が無いと謂つて、幸藏には幸藏の持味がある。それが些々閃き出して、幸藏は所謂ナカ味をやる人になつてゐる。同時に何うかすると素敵に好い役者になつて見えることもある。

幸藏は確かに松助どころの役も出来る。それが只出来るだけといふにしても行くことは行く。しかし若盛は知らず、此の二十年間ばかりは、小芝居の菊五郎で通して来た人である。世話物と謂はず、菊五郎張の物を賣物にしてゐた役者である。松助とは役者の質が違ふ。

菊五郎張の物を賣物にしてゐたと謂つても、其の繩張は極めて狭い。近頃では殊にムクムク肥つて来たやうだが、第一幸藏の體には以前から餘り色氣が無かつた。多少の意氣なところはあつたにしても、それとても菊五郎のやうに、紙治や虎藏や權八、または八重垣姫のやうな役も出来なければ、尻橋、茨木、土蜘蛛、全て然ういふ役にも手を出さなかつた。無論お岩やお菊や骨寄せの岩藤もやらなかつたやうに思はれる。また出来さうにも思はれぬ。

更に幸藏には、三番叟も踏めやうとは思はれず、喜撰も踊れやうとも思はれぬ。「千本櫻」でも忠信は難かしい。

當然だと謂へば其迄である。しかし菊五郎に似てゐるとか、菊五郎張だとかいふのに對して、此ういふことも謂はなければならぬ。そして幸藏に此の種の役の出来ないのは、無論藝の缺陷にもあるが、一つには體に色氣が無い故だと謂はなければならぬ。

幸藏は菊五郎張りの役者として、ざつとその體にある役々を謂へば、固いところで、仁木とか光秀とか、鳥目の上使だとか、赤垣だとか、「玉三」の金藤次だとか、清水一角だとか、少し碎けたところで權太、また碎けて魚屋宗五郎だとか、此ういふところなら、先づ間違はないらしい。後は辨天小僧や、お祭佐七は謂はずもあれ、鹽原多助も、直侍も、切られ與三も御難のやうである。

此うして見ると、幸藏は思つたよりも、役の少ない人のやうであるが、しかし以上並べたやうな菊五郎式大物を除けて安手な役となつたら、よし同門菊三郎ほど重寶役者でないにしても、可成廣く使へる役者と謂はなければならぬ。帝劇の準補導役といふやうな地位にあるのも、強ち梅幸の引立とばかりでない。

その柄を謂へば、ドツシリとしてゐて立派なものである。お品は少々足らぬにしても、幅

もあり、重味もあり、幸四郎を除いたら、帝劇にも歌舞伎座にも是程押出しの大きな役者は居ない。柄も然うだが、その生立から謂つても、幸藏はもつと好いところに行かなければならぬ役者であつたのだ。修業が足らなかつたのか、行く道を過つたのか、それとも質が悪かつたのか、左に右幸藏はなる者にならずに了つた役者である。言葉を換えていふと、幸藏は出来損つた大きな役者だとも謂へる。

四十、中村鴈治郎

中村鴈雀の男
いま鴈治郎に
作る。

昭和十年二月
死去。



此の四五年鴈治郎の評價は定まつて了つたやうな氣がする。彼は是謂ふのも無駄かも知れない。

大阪は正に鴈治郎の天下である。東京でも鴈治郎熱はナカ／＼熾になつて來た。年に一度づゝ、來る新富座の芝居は一年毎に大入になつて行く。連日の満員客止めを見たら、幾ら癪に障つても、どえらいもんぢやと驚嘆せざるを得ない。

東京大阪ばかりでない。京都でも名古屋でも、鴈治郎の人氣は大したものらしい。同じ芝居をぶつつけに、四所で見せ得るのは今のところ鴈治郎だけであらう。これを見ても、鴈

治郎の人氣は大したものだと謂はなければなるまい。人氣から謂へば、鴈治郎は或は役者中の總卷頭と謂はなければならぬかも知れぬ。

人氣ばかりでない。何んと謂つても、鴈治郎は面白芝居を見せるやうである。其の役者ぶりのやうに、華麗な賑な芝居を見せる。客を呼ぶ譯である。

鴈治郎は役者ぶりも、舞臺ぶりも、何んとなし賑かな役者である。味を謂へば、辛味も滋味もない。甘味一點張の役者である。藝も藝だが、藝よりも持つて生れた天稟といふ奴の力で、人も引付け、好い役者にもなつてゐる役者である。

部分々に就て謂ふならば、顔にも藝にも、滴る、やうな艶氣を有つた役者である。殊に眼は、忠兵衛になつても、治兵衛になつても、はた伊左衛門となり、椀久となつても、其の人を表現し、活躍させる機械ともなり、動力ともなつてゐる。鴈治郎の眼は、此う云ふ役をするに、不思議な力と働きを有つて居る。所謂魅力があると謂ふのもあらう。鴈治郎は半ば此の眼の力によつて、人を酔はせて了ふ。

口は大きい方ではあるが、色ツばいとこがある。色ツばいと謂はれぬならば、色ツばい鴈治郎の顔に能く調和した口とでも謂はうか、左に右、治兵衛や忠兵衛のやうな役をする、鴈治郎の長味のある紅い唇は、鮮麗とでも謂ふやうな色を浮かしてハッキリと目につく。

もし鴈治郎の舞臺ぶりを幻想することがあるとすれば、直に此の紅い唇と、那の能く働く眼とが、目前にチラ／＼する。そして此の唇から洩れる鴈治郎の白にも、鴈治郎の響らしい一種の響があると謂はなければならぬ。

鴈治郎の白には、幅はあるが、力があるとは謂へぬ。また調子に強いところは微塵も無い。しかしほやけたやうな響のうちに或る味がくるめられてゐると謂はなければなるまい。そして其が矢張治兵衛や忠兵衛らしい聲だと謂はなければなるまい。ほやけたうちに若々しさがあり色氣がある。奈何に技巧を弄しても、盛綱の白になると、ともすると間の延びることがある。腹の底に力が充實してゐない。殊に調子を張つたところになると一段と其が氣にならざるを得ない。「岡崎」や「奉書試合」の又右衛門などにしても然うである。もし其の押出しや氣込、または爲ることに申分は無いにしても、白に又右衛門らしい凜とした調子が無い。嚴格に謂へば、源藏とても其の傾が無いとは謂へぬ。また「菅公」などにしても、白の調子といふよりも、音の響に、菅公といふ品位に缺けたところが耳につく。

一口に謂へば、鴈治郎の聲は浮世の人の聲である。響も、味も浮世的に出来てゐる。それが悪いといふので無い、只聲の質が然うだといふのである。

此の聲の調子は、聴て鴈治郎の舞臺ぶりであるとも謂へる。虚實は知らないが、鴈治郎は

鷹治郎自身、盛綱とか又右衛門とか、または「太晏寺堤」の治郎右衛門の如き堅いとか武張ったとかいふやうな役が得意だと聞いてゐる。成程好嫌を謂はず、贅澤を謂はなかつたら、此の種の役のうちには鷹治郎の得意藝と謂つて差支へないものもあるだらう。

雖然奈何なる藝術と謂はず、自分自身得意と思ふもの必ずしも他から得意を以て宥されること定つて居ない。藝術の神は皮肉である。何れかと謂へば、寧ろその期待とは反對の結果を齎すことが多い。鷹治郎も鷹治郎自身、得意藝と信じてゐるもの、うちには、藝術の神から皮肉に扱はれてゐる物もないとは謂へぬ。何程努力しても、また幾分努力の收穫もあつたとしても、自分の天分は何うすることも出来ない。

此う謂つても、鷹治郎の盛綱や、又右衛門の役が拙いといふのでもなければ、鷹治郎の柄に適合ぬといふのでもない。盛綱にしても又右衛門にしても、鷹治郎には鷹治郎だけの味があり、まさがある。殊に盛綱の如きは押出しの立派さに於て仕草の巧みに於て、方今鷹治郎に續き得る役者はあるまいと思ふ。しかし何か不足があつて、盛綱は、忠兵衛、治兵衛を見るやうに胸をワク／＼させ得ない。所詮巧いは巧いにしても、只の巧いに終つて了ふのである。又右衛門にしても然うである。鷹治郎の又右衛門を見るよりも、「引窓」の十次兵衛を見た時の方が、遙かに興味もあれば感激もある。これはしかしながら鷹治郎が、又右衛門よ

りも十次兵衛の方を仕馴れてゐるからといふよりも、十次兵衛の役柄が、又右衛門よりも、餘程浮世の人に出來てゐるからと謂つた方が適當であらうと思はれる。

聲や柄ばかりでない。鷹治郎の技巧にもまた此の浮世の色の色が漂つてゐる。只顔だけは、扮装によつて種々に變化する質を持つてゐる。盛綱や春藤治郎右衛門は謂はずもあれ、直實になつても由良之助になつても、はた松王になつても師直になつても——その他、何様な固い役にも武張つた役にも、また國崩し式の悪人にも向くやうに出來てゐると謂はなければならぬ。

顔から謂へば鷹治郎は、大きな役者といふ、あらゆる要件を備へてゐると謂つて差支へが無いだらう。美しさや艶は勿論、立派でもあれば、ふツくらしたところも落着も、また品位といふやうなものも無いではない。役者の顔として、當代是程完全に出來た顔は少ないやうだ。團十郎の莊重、先代菊五郎の意氣は無くとも先代芝翫の華麗な系統を引いたうまみのある顔は、鷹治郎といふ役者の有つてゐるものの中で最も價値のあるものだと謂へる。少しく極端に謂へば、鷹治郎は顔で光つてゐる役者だとも謂へる。そして此の顔はナカ／＼融通の利く顔だと謂はなければならぬ。

顔は融通の利く顔ではあるが、しかし鷹治郎は融通の利く役者では無い。此の融通の利か

ぬところは、東西の成駒屋に酷似したところがある。歌右衛門は、顔と謂はず聲と謂はず其の氣品と、體が利かぬのと、大分役の領分を狭くされてゐる氣味があるが、鴈治郎は、顔や體といふよりも、その聲と、それから技巧とか演出法とかいふもので、少なからず役の領分を狭くされてゐるやうである。領分が狭いと謂つても、鴈治郎は歌右衛門と違つて廣くしやうとしても廣く出来ないといふ役者では無い。働けば可成廣く働ける役者であるが、只其の結果が芳しくないといふだけである。

大阪は知らず、東京では鴈治郎は、忠兵衛、治兵衛、伊左衛門——此の種の二枚目役者と極印が打たれて了つたらしい。勿論盛綱や治郎右衛門で幅を見せ、虎藏や十次郎で美しさを見せ、宗五郎や源藏で目方を見せ、土屋主税や大石良雄で落付と品位を見せる腕はあるに違ないが、要するに其は只腕である。よし見榮があり、面白味があるとしても、遂に鴈治郎の優れた腕とか役者ぶりを見せられるといふに過ぎない。同時に二枚目役者としての鴈治郎を見た揚句には、鴈治郎といふ役者が少々ならず平凡化させられて了ふ氣味がある。

よし其としても鴈治郎は、優れた腕以上に超越した味を持つた役者である。單に二枚目役者としてばかりでなしに、盛綱以下の役々をやつても夫々に味はあるが、此の味は濃厚であつても、複雑でないだけに、役に依つて大に減殺される。

鴈治郎は多くの模倣者を持つてゐる役者である。大阪の名だたる若手役者は、二三の人を除いたら、大方多少に拘はらず鴈治郎かぶれがしてゐる。新派の名だたる人のうちにすら鴈治郎張の治兵衛や忠兵衛を見せる役者がある。一部には、それは鴈治郎の舞臺ぶりが平面的で模倣しやすい性質を持つてゐるからだといふ説もあるが、成程これは確に一面の眞理である。鴈治郎は其の役者ぶりに他の模倣を宥さない味もあり、色も匂もあるが、其の舞臺ぶりは「常識的」といふ範圍を脱してゐないやうである。従つて其の工夫とか行方に何うかすると細工の見透くやうなことも無い。して此の「常識的」の範圍を出ないところが鴈治郎の萬人向たる所以であるかも知れない。

鴈治郎は見る度に、段々と見飽がして來るといふ人がある。然う謂へば然ういふ感じがせぬでも無い。これはしかし鴈治郎と云ふ人の最初の印象が餘りに刺激的であるのと舞臺ぶりが複雑さうに見えてゐて、案外千變一律だからだといふにあるやうだ。

鴈治郎の藝の質、役者の價値に就ては、尙だゞ書きたいことがある。雖然豫定の紙數の制限があるから遺憾ながら此の位にして置かなければならぬ。要するに鴈治郎は、舞臺ぶりも役者ぶりも圓く萬人向に出來た役者らしい。そして鴈治郎かぶれのした役者が多いといふだけでも、また好いところもある役者だとしなければならぬ。種々謂つても、鴈治郎は矢

張當代に於ける大きな役者で、そして好い役者である。

四十一、中村林左衛門



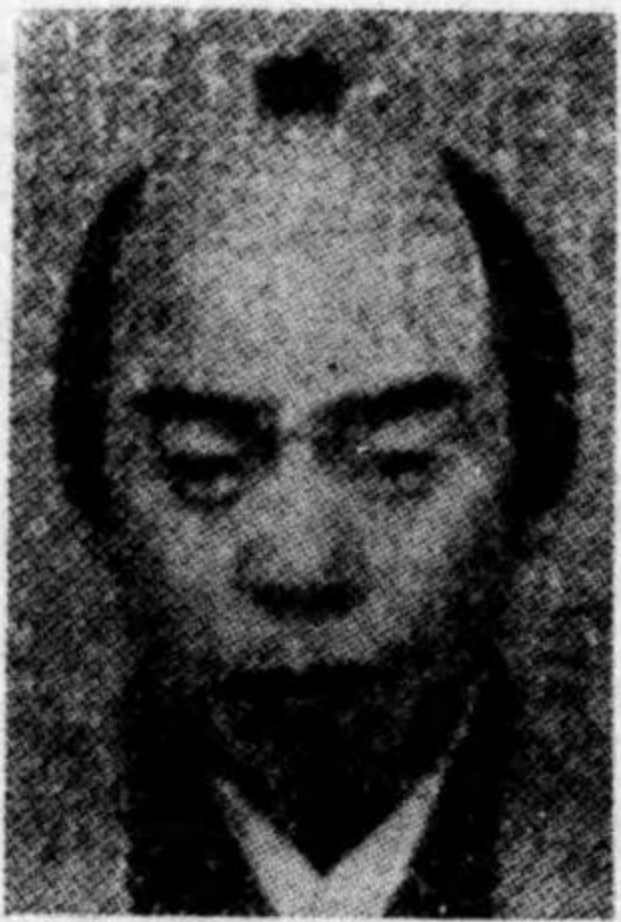
中村鷹治郎の門。蘇我入鹿に扮した林左衛門

東京の薪左衛門や翫右衛門のやうに名前の大ききうな役者である。役どころは「紙治」の善六とか「八百屋」の武兵衛だとかいふ端敵どころらしいが、よし代り役式のものであつたにしろ「腕久」の徳壽齋といふやうな隠居役にも間に合ふ役者らしい。

役者ぶりに、これと目につくやうなところもなければ、格別何う此ういふところも無いやうだ。東京の誰に似てゐると謂はれても、藝の似た役者も居ない。脊の長いところは、菊四郎にでも似てゐると謂へば謂ふのだが、役者ぶりがスツカリ違ふ。

武兵衛などでは、上方式の悪に近い達者なところを見せてゐるが、徳壽齋になると箸にも棒にもかゝらなくなつて了ふ。眞んと腕があつたら、徳壽齋といふ役は些ツと味をやつて見せられもするのだが、林左衛門のは只神妙に並んでゐるといふだけのことだつた。只舞臺馴れてゐるといふだけでは、好いも悪いも謂へたもので無い。

四十二、尾上梅助



五世尾上菊五郎の門。のち帝劇に入つて幕内部を受持つた。

此の人はもう梅助とは謂へないかも知れない。眞んとは帝國劇場の師範役、鈴木大助氏と謂はなければならぬのだらうが、此處では矢張梅助と謂つて置くことにする。

梅助は帝劇に入つてから舞臺に出ない役者になつて了つた。此ういふ質の役者の少ない當節柄何んだか惜しいやうな氣がせぬでもない。梅助とても女優の御指南番にならうと思つて、辛い役者修業をして來たのではあるまい。何も指南役が悪いといふのでは無い。指南役が出来る程の腕があるのだから、舞臺に出て貰ひ度と思ふのである。よし役どころが何様なであるにもせよ、役者は舞臺で働いてこそ生命があるといふものである。況んや梅助でなくては見られぬ味も面白味もある役者である。

梅助は、それが何ういふ芝居であつても、梅助が居なくては芝居が出来ないといふ質の役者では無い。謂ふところの立役者でも無ければ、重要な役をするのでもないのだから、梅助としては、舞臺に出て骨を折つてゐるよりも、指南役として蔭で働いてゐる方が氣が利いてゐるかも知れない。

死去。

死去。

今の梅助は次世。

雖然幾ら半素人の女優達が立派に芝居をしてゐる帝劇の芝居でも、時には梅助鈴木氏を煩はしたらと思ふやうなことが無いでもない。と謂つて、其が是非梅助でなければならぬといふのもない。梅昇でも、宗五郎でも、乃至團之助でも紅十郎でも、誰だつて差支の無いやうなものだが、しかしそれが梅助であつたならば、何ンでもないところに何ンでも面白味がつき、従つて重い役をしてゐる役者までが引立ツて見える場合も少くないだらうと思はれる。知れきつたことをいふやうだが、念の爲に實例を引いていふ。例へば「直侍」の入谷の蕎麥屋の夫婦といふ奴は「直侍」といふ芝居全體からは謂はずもあれ、那の一場から見ても何ンでもない役である。只出てさへ居たら、誰が爲てゐても可いやうな役である。だが蕎麥屋一場の面白さは、蕎麥屋夫婦の働きに依つて、餘程増減されると謂はなければならぬ。直侍を助け、丈賀を助けて雪の入谷田圃の貧しい蕎麥屋の景を生動させるには、夫婦になる役者がしつかりした腕で舞臺の一角をしめてゐなければならぬやうだ。

梅助は此ういふ役をするに好適な役者である。何時か歌舞伎座で「直侍」をやつた時に新十郎が此の蕎麥屋の御亭になつて、梅助が女房をやつた。そして此の二人の亭主ぶり、舞臺ぶりは、役の難易は別として、何時までも、眼に残るといふ點に於て、松助の丈賀と雁行する價值があつたと思ふ。此の蕎麥屋の亭主の役も然うであるが、女房も必ずしも梅助でなくてはならないといふ役では無い。またこの女房の爲に梅助の體を購はなければならぬといふ役でもない。しかし梅助に依つて何ンでもない役に面白味がつき、血が通ふやうになるのは事實である。

此ういふ例をひけば際限がない。要するに梅助は、舞臺の上でも隠れた働きをしてゐた役者であつた。本役は矢張端敵どころであらうが、それには餘程人を笑はせる性質が加はつてゐた。もし新十郎を堅い生真面目な端敵役者としたならば、梅助は碎けた半道化式の端敵役者としなければならぬ。そして新十郎が團門の舞臺の事に明るいとして知られてゐるやうに梅助も音羽屋一家の舞臺の事に明るい人として知られてゐる。

繰返していふ。梅助は決して好い役者といふでもなければ、見なくてならぬといふ役者でもない。また役者ぶりとしても謂ふところのズングリムツクリしたので、自ら三枚目役者に出来てゐる。藝とても其の通りである。要するに梅助は全てが安つぱく出来た役者である。だが其の安つぱいうちに一種の味があり、面白味があり、底光がしてゐて、安つぱいといふ其のことが生命となつてゐる役者である。

歌舞伎劇では此の種の役者に依つて何程舞臺が賑はされるか知れない。雖然此の種の役者は追々減つて行く。それだけ歌舞伎劇の空氣が追々稀薄になつて行くのかと思ふと、歌舞伎

劇の爲に、何んだか心細いやうに思はれぬでもない。最後に梅助鈴木氏の健在を祈ると同時に舞臺の人に復歸あれと切望する。

四十三、市川齋入

名人市川小團
次の男。初め
市川福太郎、
のち右團次。
大正五年七月
死去。



梅玉と駢んで關西劇壇の古老である。名優小團次の嫡子に生れながら、何かの事情で幼少の頃から大阪に育つて大阪で地位を得た人らしい。

役者の好い悪いより何よりは先づ、齋入には多藝といふことが一つの看板とも賣物ともなつてゐる。齋入になつてから、大分老込みの氣味ではあるけれども、それでも若い者を凌いで元氣で種々なことをやる。宙乗りまでもやつて見せる。一體齋入は若い頃から藝當をお目にかける人として知られてゐた。宙乗りだとか、早替りだとか、鯉づかみと謂つたやうなものだとか、——謂ふところのケレン物が得意だつたらしい。同時に大阪式の三尺帶物と、所作事が得意藝としてある。型物の方では「嫩軍記」の忠度だとか、「千本櫻」の忠信だとか、後藤の生醉だとかいふ者が當り藝とも得意藝ともなつてゐる。その他に父譲りといふ譯か何うか知らないが「佐倉宗吾」だとか「嫁おどし谷」だとかいふやうな狂言も、この人の物として有名なものになつてゐる。老役では近年東京に来て「野崎」の久作といふやうな物も見せて行つた。また餘程以前の事であつたから、何んの景清であつたか記憶は臆げになつてゐるが、何んでも「鍛引」のついた景清を見たことがあつた。それから矢張其の時分のことで「京人形」や「又五郎狐」なども見たことがある。それから法界坊を見たことがあるやうに覺えてゐる。——これだけ並べただけでも、齋入は可成多藝の人と謂はなければならぬ。

何しろ所作が行き、型者が行き、世話物が行く、加之仕掛物といふ景物が加はつて、老役も行けば、白く塗るところも、固いところも、或る種の女も自在に行く。そして悪の分子とか、凄みとか、淋しみとかいふやうな分子も幾分あるやうである。

此の融通の利いたところは、齋入は、先代菊五郎と共通點があつたやうである。融通の利いたところばかりでなく、其の藝の質とか役のこなしとかいふものにも、齋入は先代菊五郎に似通つたところがあつたやうである。化物とか、幽霊とかいふものを得意にしてゐたのもその一つである。三尺帶を得意としたのも其の一つである。新しい物を取り込んで舞臺にかけたのも其の一つである。伊達の對決の勝元などやると、團十郎のやうな白と氣込だけで彈正を恐入らせることが出来ないで何んとか體を動かして、相手に頭を下げさせるといふやう

な行方も似てると謂へば然うも謂へる。また見物受を氣にするところや、六十になつて、敦盛や、八重垣姫をやつて見せる舞臺に對する色氣とでもいふやうなものの壯なものも似てると謂はなければならぬ。

しかし齋入は、先代菊五郎に似てゐる役者といふことは出来ない、藝の質や行方に似たところはあつても、役者ぶりも違へば、現れてくる形も全然違ふからである。假に三尺帶をやつたとしても、其の好い悪いは別問題として、齋入の其と、菊五郎の其とは、上方辯と東京辯が違ふほど、調子も形も違ふ。

それは別として、何れにしても齋入は多藝な役者である。その顔を謂へば、決して好い顔とも立派な顔とも謂へないが、今のやうに悪く頬がこけて、凸凹しない以前は、何んになつても、相應に見られる顔であつた。「千本櫻」で謂つて見ると、權太にも忠信にも、靜にも知盛にもなれる顔である。次第に依つたらお里にもなれるかも知れない。其の顔も、その藝のやうに融通が利いたといふのである。

雖然齋入は、多藝とか、老熟とか、小手が利くといふ外に、格別此うと取立てて推讃を値するだけの役者ではないやうである。

老いたからといふのでは無い。壯に活動した昔から、齋入は、舞臺ぶりにも役者ぶりにも何處か稀薄なところがあつた。丁度才子肌の男に性根の据つた者が居ないやうに、齋入の舞臺ぶりにも、腹の底に「力」が足りないやうなところがあつた。それで少し重い役をするとき折角の藝まで、臺なしにして了ふことが少なくなかつた。

例へば近年帝劇へ来て見せた「後藤」である。後藤は蓋し齋入老得意物の一つであらう。しかしこの「後藤」は、萎び切つた齋入老には荷が勝ちすぎて、餘り芳しい結果が得られなかつたやうである。これはしかも齋入が萎び切つたからといふばかりでない。假に齋入が盛であつても、「後藤」を見せるといふのは考へ物である。齋入は嘗て春木座時代の本郷座に來た時も、此の「後藤」を見せたが矢張結構なものでは無かつたと思ふ。

齋入は「後藤」を見せるだけの藝はあつても後藤にはなれない。後藤といふ柄と性根のない役者と謂はなければならぬ。それで目貫師の後藤にはなれても、軍師とか豪傑の後藤にはなれない。酒を勧められる間も、生酔になつてからも、また三番叟の件りも、竹田奴をあしらふ件も所謂巧者として、芝居をして見せるといふだけのことで、後藤といふ人物になり得ない。況んや空鐵砲の段になると、人物が一段と小さくなつて、それこそ目貫師の後藤が、軍師の口眞似をして、假に軍師となつたやうな人物になつて了ふ。もし齋入自身には、後藤といふ性根が充分腹にあつても、柄なり、藝風なりに妨げられて、それが舞臺ぶりにも現は

帝劇で見せた
後藤は明治四
十四年十一月

れないのである。

齋入は藝にも柄にも重味のない役者である。そして一種の味はあつても、深みはない。然ういふところは幾分歌六に似てゐる。勿論齋入と歌六では、役者の質が違ふのではあるが、味ひに於て些つと似通つたところが無いでもない。殊に役者ぶりといふのではなしに、舞臺の人として色氣があり、當氣の多いところなどは甚だ似てゐるやうに思はれる。また役者ぶりから謂つても、品位にかけたところのあるのも輕つばいところも似てゐると謂はなければならぬ。もし齋入が右團次の頃から、もう少し藝の範圍を縮少して、そしてもう少し小手を利かせることを控えてゐたならば、其の役者ぶりに、もう少し味が出たかも知れぬ。齋入は藝のある割合に、藝にサビの無い役者である。同時に年と共に、右團次時代の光が目立つやうに減却して行く。それは勿論生理的關係もあるだらう。だが重なる理由は、齋入の藝にパツクが無かつたからだとしなければなるまい。茲にパツクといふのは、藝の深みとか澁みとかいふことも意味するのである。

若い頃の齋入は、何方かと謂へば才の役者であつた。一體大阪には、器用と才とで芝居をする役者が多いが、齋入は其の質の役者の大頭目である。大阪で斬髮物の芝居を始めたといふだけでも、齋入の才氣ぶりが想像される、それから仕掛物にも種々工夫をした人だといふ。今でこそ干からびて古臭いやうな役者になつて了つてゐるけれども、當年の右團次は才氣煥發、頗る進取的の役者で、今の言葉でいふと一種の新知識派であつたに違ひない。簡單に謂へば、齋入は、才氣と器用とを以て、種々變つた事を演て見せて、それで人氣を取つてゐた役者である。もしも此の「事」の才に働いた才が「藝」の才に働いたならば、齋入は一代の名優と仰がれる役者になつたかも知れない。

齋入は、何か名優になれさうなものを持つてゐながら、遂に名優にならずに了つた役者である。才と器用で若い時分から名を成し、囑望もされながらも、遂に芝居上手の老巧役者で終つて了つたらしい。修業のせるか、天分か、右團次の昔の人氣と才氣と、そして面白い芝居をみせたことを思ふと、何んだか此の老優の爲に惜しいやうな氣がせぬでもない。名優にはなれなかつたにしても、齋入は、團、菊の居た頃から、團菊に次ぐ大きな役者として、大阪劇壇の牛耳を握つてゐた。況んや團菊の歿後は、故團藏と並んで、東西劇壇の二大長老とも謂ふべき人であつた。今は其の團藏も歿くなつて、齋入も舞臺の人として甚だ衰へて了つた。

年を謂へば、天保十四年の生れだといふ。梅玉よりも尙だ二つ三つ弟になる譯であるが、舞臺の人としての年寄ぶりを謂へば、反つて二つか三つ兄のやうに思はれる。そして梅玉老

を以て、福徳圓滿な長者としたならば、齋入老は、世故に通じた淡々洒落なる長老といふ風格を備へた人と謂はなければならぬ。

齋入、梅玉、橋三郎、傳五郎——大阪には老大家が多い。其のうちでも齋入と梅玉とは、大阪に於ける長老といふばかりでなく、東西を通じて劇壇の大長老として、敬重しなければならぬ人であらう。

四十四、關三十郎



四世關三十郎の男、はじめ關花助。昭和五年死去。

世間ではこの人のことも、尾張屋の親方だとか、名優だとかいふ。當代若手役者で、名優の二字を冠せられるのは、權三郎と三十郎とに限られて居るやうである。ふざけた意味でも、名優と謂はれるのは役者冥利に大根呼はりされるよりも、聞いてくれただけでも氣が利いてゐると謂はなければならぬ。

權三郎は、羽左衛門を張つて納り返つてゐる。三十郎は九代目を張つて納りかへつてゐる。そして二人共に小芝居の大立者である。假に二人の名優ぶりに多少似通つたところがあつたにしても、役者は少々違ふと謂はなければなるまい。

何んと謂つても、三十郎は蓬萊座の座頭である。しかも三四年居据つたままで、ビクともせずに居る。權三郎には尙だ是れだけの腕も重味もないと謂はなければならぬ。

若かつた故もあらうけれども、花助時代には、もつとふツくらしたとこがあつたやうに思ふが、此の頃では親方、甚くゴツ／＼した役者になつて了つた。座頭どころの重い役ばかりやつてゐるので、役者も藝も段々固くなつて行くのかも知れない。

役者ぶりは優れて好い方といふのではないが、悪いとも謂へぬ。屢く九代目張の物を得意藝としてやつてゐるだけに、押出しも相當踏めれば、顔にも白にも、相應に重味もつてゐる。今の一座の蓬萊座の座頭として、先づ申分が無いと謂はなければならぬ。役者は小さからうが、安からうが、左も右三十郎は座頭役者に出来た役者である。しかし「鈴ヶ森」の長兵衛といふやうな大物を擔ぎ出して、白のうちへ、築地の伯父さんがどうとやらして、何んだとか、いふやうな文句を入れるのは、氣障でもあり、不謹慎でもある。好い氣持になるのも大概にして置かないと、舞臺ぶりまでが、お安くなつて了ふ。

その舞臺ぶりを謂へば、九代目張を心にして、祖父に當る關三の型を振廻したり、何うかすると菊五郎張で行くこともある。舞臺度胸があるといふのか、またそれだけの藝があるといふのか、それとも盲蛇といふ部類に屬するのか、些つと見當も附けにくい、何しろ奈何

淺草駒形に國華座といふのがあつた。三十郎はそれを買つて、蓬萊座として座頭になつてゐた。今は氷藏になつてしまつた。

なる大役も、難役も苦もなくやつてのける。三十郎のえらさがこういふところにあると謂へば然うも謂はれる。名優と謂はれるのもそんなところから來てゐるらしい。

以前二錢團洲から、六錢團洲十二錢團洲までになつた又三郎といふ役者が居た。この又三郎も團洲と渾名されるだけ、九代目畑のものを賣物にしてゐた。「毛剃」だとか「酒井の太鼓」だとか「嫩軍記」の直實だとか「河内山」だとか「地震加藤」だとか「文覺」だとかいふものをやつて人氣を取つてゐた。顔も幾らか似てゐた。加之白なら、物ごしなら、癖までも巧に模てゐたので、九代目張りといふよりも、眞箇九代目の影法師であつた。今から思ふと、團十郎の眞似が上手だつたといふばかりでなしに、腕も確かな役者だつたと謂はなければならぬ。

三十郎は團十郎に似てゐるといふよりも、何點か、此の又三郎に似通つたところがあるやうだ。顔つきにも幾分然ういふところが見えれば、白とか氣込——全て舞臺ぶりに少々ならずして然うらしい點が見える。或は勤める役々が又三郎に似てゐるせるでもあるかも知れない。しかし三十郎にしたら、何處までも團洲張の積で、又三郎に似やうなどとは思ひもかけぬことであらう。

假に、又三郎に似てゐるとして、三十郎は役者ぶり——或は其の木地に於て、遙かに又三

郎よりも優れてゐる。其の代り、舞臺ぶりに於て大分見劣りがする。解り好く謂へば、藝は又三郎よりも拙いが、見て呉れは又三郎よりも立派といふことになる。

三十郎は確かに見て呉れの好い役者である。また舞臺度胸とか、器用ぶりとかにも、感心する氣になれば、感心されることが無いでもない。もし夫れ、鶏口となるも牛後とならぬ人間がえらいとしたならば、三十郎もえらい役者と謂へるだらう。しかしこのえらさには實のないのは困つたものである。

四十五、中村翫右衛門



翫右衛門では新米役者であるが、梅雀といふと古い梅雀である。何しろ小屋掛のチヂ、コ芝居の時分から鳴らした人ださうだから、年も随分古い方と謂はなければならぬ。其の代り腕も随分叩き込むであるやうだ。柳盛座の座頭どころに居たのも長いこ

とであつたやうに思ふ。

若い頃には白く塗つた美しいところも見せたかも知れないが、椋右が知つてからは、役者ぶりも克明なら、舞臺ぶりも地味な人である。小芝居にゐると、何點か齷もあり、落付もあ

中村翫右衛門

四世中村芝翫の門。初め中村梅雀。大正八年四月死去

今の歌門、翫右衛門の父、翫右衛門の父、若い頃から柳盛座を常打小屋として十数年の間、座頭をしてゐた。今この芝居はない。

り、老役、老女役、家老役といふやうなところでじつくりした藝風を見せてゐるが、其の齎も落付も何んとなしお安く出来てゐる。

此の安つばいところに眼さへ瞑つたら、翫右衛門は老實な好い役者といふことが出来る。しかし歌舞伎座などに出ては損な役者と謂はなければなるまい。端役がつくからと謂ふばかりではない。翫右衛門の役者の質が、歌舞伎座でするやうな端役を爲活して、味を出して見せることが出来ないからである。翫右衛門から謂へば、爲活だけの端役もつかないといふかも知れないが、然うばかりではない。座頭どころの役を爲慣れて来た翫右衛門には、端役を生かして見せるといふやうな藝當は些つと畑違であるからである。人には能不能がある。それで翫右衛門を咎めることは出来ない。歌舞伎座の翫右衛門は役だけのことは神妙に働いてゐるのである。

雖然東京座や演伎座に行くと、翫右衛門の柄にあるやうな相應な役もつく。だが或る人は翫右衛門が出ると不思議に芝居が小さくなると謂つた。成程然う謂へば然ういふところもあるやうだ。藝が拙いからと謂ふのではない。藝は練れ過ぎる位練れてゐるのだが、役者ぶりが何んとなし安つばく出来てゐるからである。

安つばいには安つばいが、翫右衛門は見てゐて嫌氣の浸す人では無い。役者が枯れてゐる故でもあらうが、嫌味とか臭みの分子が餘り無いからである。要するに安く固まつた人といふのであらう。

芝居は確かに上手である。悪く騒がずに小さな舞臺をいめて行く腕も確かなものである。そして物も一通心得て居れば融通も利く。ふざけなければならぬ場合には、大いにふざけもすれば、落付かなければならぬ時には落付いて見せる。また軽い調子も持つてゐる。「紅かん」などをやるとナカ／＼器用ぶりも見せる。何しろ叩き込むで来た腕だからやらせたら種々面白いことをして見せるに違ひない。

昔は知らず今分では、翫右衛門は、實體にそして温順に出来た役者である。取立て、此うといふほどの味もなければ面白味もないが、稍格の悪い老巧役者として、腕の確かな人だといふことは出来る。

四十六、松本幸四郎

東西を通じて幸四郎ほど立派な役者ぶりの役者は居ないだらう。染五郎時代に見えた綺麗さとか、うら若さは年々に滅却して行くやうであるが、立派さは年々に加はつて行く。昔は知らぬ。近頃の若手と謂はず、中老古老と謂はず、幸四郎ほど氣持よく、立派な役者

振附藤間勘右衛門の男。九世市川團十郎の門。初め市川金太郎のち染五郎より高麗藏。



は居ない。顔も好い。柄もツンと大きくドツシリしてゐる。幸四郎の役者ぶりには、謂ふところの男性美といふ奴が鮮に生彩を放つてゐる。

其の役者ぶりから謂ふと、幸四郎は、幸四郎といふよりも、高麗藏と謂つてゐた方が甚だ適當であつたやうに思はれる。理窟ではない。只感じただけのことであるが、高麗藏といふと、幸四郎の役者ぶりが直ぐ眼前にうかぶ。

字づらから謂つても高麗藏といふ名は感じが好い。響も好い。幸四郎は、何んとなし高麗藏らしい役者である。

幸四郎の藝を何う此う謂ふのではない。また幸四郎といふ名に對して、役者の貫目が不足だとかいふ意味でも無い。高麗藏といふ名には、幸四郎の役者ぶりが能く表現されてゐるといふのである。同時に幸四郎といふ名は何んだか爺臭く、悪の分子があるやうで、幸四郎の役者ぶりにふさわしくないといふのである。

何も鼻高幸四郎といふ聯想があるといふのではないが、幸四郎と謂へば、深刻とか、辛辣とか、または奸とか佞とか、左に右險惡な、そして骨つばい、猛々しい氣分のある役者が思ひ浮ぶ。幸四郎といふ字づらからして、しぶといやうな感じもあれば、響もしぶつて、高

麗藏といふやうに滑らかなに行かない。高麗藏が高麗屋でもいゝから、幸四郎を幸四郎と呼びたくない。

これはしかし自分だけの感じかも知れぬ。また名前などは何うでも好い譯である。

幸四郎が幸左衛門でも幸兵衛でも、幸四郎は當代に稀らしい立派な役者である。そして役者ぶりの立派なことに依つて、當代に光つてゐる役者である。

雖然役者ぶりに依つて光つてゐる幸四郎は、また役者ぶりに依つて、幾分禍されてゐる氣味がないでもない。有體に謂へば、幸四郎の舞臺ぶりには何んとなしに纏のついてゐないところがある。不器用といふほどではないが、何うかするとぎごちないところが目についたり、混線することがあつたりして、左右器用には行かない。だらけてゐるとまでは謂へぬにしても、引締つたところが無いとは謂へる。役者ぶりが立派なだけに、それが際立つて目につきもすれば、また見てゐて齒痒いことのやうに思はれる。

これはしかし幸四郎の藝に尙だ出來てゐないところがあるからと謂へば、然うも謂へる。また頭の加減か、性のせいりで、舞臺で一生懸命になり過ぎて我を忘れて了ふ結果だと謂へば、然うも謂へるが、他の重なる理由は、確かに役者ぶりの立派すぎるせゐると謂はなければならぬ。

幸四郎は確かに自分の立派な役者ぶりを持ちあつかつてゐる役者である。自分の柄を自分で思ふやうに使はれないでゐる役者である。若も幸四郎がもう少し役者ぶりが悪かつたならば、反つてももう少し活達自在な舞臺ぶりを見せ得たかも知れない。よし然うでないにしても少々の混線や、ぎごちないところがあつても、左程に目立ちしなかつたらうと思はれる。色の白いは七難隠すといふ言葉がある。それと反對に幸四郎は、役者ぶりの立派な爲に七難を隠し得ない役者である。幸四郎を左や右と難する人は、此ういふところも考へて遣らなければなるまいと思ふ。

幸四郎は舞臺ぶりに閃のない役者である。確に鈍いところがある。見てゐても齒痒くなる役者である。相撲で謂つたならば、何處までも力づくで、ヒタ押しに押して行かうとする行方の役者である。此の眞ツ正直の行方は大まかな代りに大關式であるとは謂へる。男らしといは謂へる。大きさはある。氣持の好いところはある。しかし破綻は免れない。

幸四郎は舞臺ぶりは確かに大きい。これだけでも幸四郎は今の劇壇を濶歩するに足ると思ふ。

幸四郎は、染五郎時代、または高麗藏時代から、大器晩成の人として囑望されてゐたと思ふ。今でも現在の價値よりも、將來に望を繋いでゐる幸四郎黨は少なくはあるまいと思ふ。

繰返していふ。幸四郎は舞臺ぶりの大きな役者である。そして力もある、熱もある。皮肉に謂へば、餘りに力も熱も有り過ぎる結果、混線することもあれば、悪堅くもぎごちなくもなるのだと謂へる。聞くところに依れば、下廻り連は、幸四郎の立廻りに使はれるのを頗る怖をなしてゐる。何故かとなれば、幸四郎が頭を熱らして來ると、何時眞んると蹴飛ばされたり、突飛ばされたり、または向脛を拂はれたり、背を撲されたりするか知れないからだといふことである。以て幸四郎が奈何に舞臺に於ける熱と力が熾であるかを想像することが出来る。それで少し調子を張つた白をいふとなると、自然頰の筋肉が痙攣れるやうになる譯である。

幸四郎の白は、幸四郎の舞臺ぶりのうちで最も齒痒いもの、一ツである。幅はあるが底がない、大きさはあるが深味がない、力もないではないが、緊縮したところが無い。そして言葉の末がヒヨロついて、尻切となることが多い。また調子にも不自然なところがあれば、響もぼやけてゐる。聲量はあるが、筒拔氣味で、通りが悪い。質が好いにしても、何うも完全なものではないやうである。喉のあたりには力が籠つてゐるとしても、腹にこたへがないやうである。白から謂つても幸四郎は、何點か工夫が足りないとか、鍛方に不足があるとか謂へる役者であらう。團十郎直傳ともいふべき白廻しも巧く壺にはまッてこそ價値もあらうが、幸四

郎の今の調子では反って智慧がないやうに思はれもする。

大ざっぱに謂へば、幸四郎は全て道具の好く揃った役者である。白は好くないにしても、聲は悪いとは謂へぬ。殊に眼などは、讚美すれば明星のやうに大きく輝いてゐる立派な眼だといふことが出来る。強いから色氣こそないが、活々してゐて幸四郎の役者ぶりを發揮するには好適な眼と謂はなければなるまい。しかし此の立派な眼も、ともすると安ッぽくパチクリやるので、折角の明星も糠星が瞬するやうになつて了ふ。

詮議をすれば、種々駄目を出すことになるが、何んと謂つても幸四郎は、當代の立役者らしい立役者である。もし「勸進帳」の辨慶をしたならば、其の押出しの立派さに於て當代隨一であらう。「陣屋」の熊谷や「御所櫻」の辨慶、「十段目」の光秀「逆櫓」の樋口などにしても然うだと謂はなければならぬ。また「大森彦七」や「天狗舞」の高時「關の扉」の關兵衛や「毛剃」といふやうなものにしても然うであらう。其の他男之助だとか和藤内、または梅王だとか「曾我」の五郎といふやうな役どころは、其の役者ぶりから謂つて全て幸四郎の領分だと謂つて差支へはあるまい。殊に荒事式のものにかけては當代此の人の右に出づる者が無いと謂はれてゐる。これは正に其に違あるまい。もし幸四郎が、九代目の血筋でも引いてゐたならば、人氣も聲望もナカ／＼今のやうなものでは無かつたかも知れない。

顔や柄から謂へば立敵や色敵と謂つたやうなものにも向く。そして踊は鍛え込むである人である。よし大々してゐるやうが、時々こぐらからることがあらうが、「道成寺」を踊つても、「紅葉狩」を見せても、甚だ結構とは謂はれぬまでも藝の力で光つてゐるとこはあると謂はなければならぬ。又四天姿も華麗で能く似合へば、長袴や黒羽二重の殿様ぶりにも、どつしりした落付と品位とを見せる。御家老どころの貫目も備つてゐる。碎けたところで「河内山」や「長兵衛」なども應て極附の代物にならなければならぬものである。此う謂つて來ると、幸四郎頗る役の領分の廣い役者のやうである。役者ぶりから謂へば事實廣い役者に違ひない。

雖然今分では舞臺ぶりの單調な役者とは謂はなければなるまい。前にも謂つた如く力づくでヒタ押しに押しに行くといふやうな行方は、働を窮屈にして變化を見せない。また味も出し得ない。

要するに幸四郎は味にも乏しければ、面白味も少ない役者である。また立派ではあつても、華麗とは謂へぬ役者である。しかし何處か大きく光つてゐるとこのある役者とは謂はなければならぬ。假に舞臺ぶりに缺陷があり若いところがあるとしても、大きな役者とは謂へる。少なくとも大きな役者になるだけの素質のある役者とは謂へる。幸四郎は巧者な役者で

もなければ上手な役者でもないが、座頭式に出来た好い役者である。そして若しもう少し白の活殺が自在になり、舞臺ぶりが緊張して来たならば、目覚しい大成を見せて嶄然一頭地を抜くべき資格のある役者である。今は只高藏藏といふ名にふさはしい役者として、その立派な役者ぶりに多大なる敬意を表して引退る事にする。

牡丹半開をひらかざらめや幸四郎

四十七、中村雁童



雁童は、未だ行先の長い身を以つて、昨初冬其の生地なる大阪で白玉樓上の人となつて了つた。これは彼の生前に書いたのであるが、記念として、其のま、か、けて、故人を追憶することにした。

鴈治郎の秘藏弟子だといふことである。娘役とか、若衆役が本役らしい。東京には些つと此の人に似た役者が居ないやうである。強いて求めたら幾分龜藏に似たところがあるやうである。何も龜藏が上方出身だからといふのでは無い。

役どころも似て居れば、役者の質も地位も似てゐると謂へば似て居ると謂へる。娘役と謂

中村鴈治郎の門。大正二年十月死去。
橋姫に扮した中村雁堂。

伊賀越のお袖は、明治四十五年二月の新富座。

ひ、若衆役といふと、甚だ顔の綺麗な役者のやうに思はれるが、雁童は綺麗なといふほど顔の綺麗な役者では無い。姿とても然うである。姿にも取立て、何うと云ふ程優れたところは無い。と謂つて悪いといふ役者ぶりでも無い。假に「ゐらせられませう」の腰元役をしてゐても些つと目につく方ではあらう。顔にしても姿にしても、甚だ綺麗でなく、甚だ優れてゐないといふだけで、顔も相應に美しければ、姿とても安く購つても十人並以上とは謂はなければなるまい。白にしても先づ柄相應と謂へば可いだらう。格別耳に立つ嫌な癖もない代りに、亦これといふ長所もないやうである。雁童は全てが普通に出来た役者らしい。柄も然うなら藝も然うである。藝の質を謂へば矢張上方式に小器用に出来てゐて、尙だ巧者とか上手とかいふ方ではないが、嫌味のないのを何よりの取得とする。

確か一昨年の五月頃であつたと思ふが、鴈治郎が新富座に来て「伊賀越」の岡崎を出した時に、幸兵衛の娘お袖といふ役がついた。相手の志津馬は福助であつた。此の綺麗な志津馬と駢んで、雁童のお袖は、娘ぶりに於てさまで見劣はしなかつた。所詮雁童は其の程度に於て美しさもあり舞臺ぶりも悪くない役者と謂はなければならぬ。「菅公」の桐姫などで見ると、お品は餘り好くないやうである。しかし「車引」の杉王で些つと當て、見せたり、「梶久」の茨木屋おせいで軽い年増振を見せたり、「八百屋お七」の丁稚彌作の可笑味の手際を見ると

此の人をもまた一種、達者質の役者と謂はなければならぬやうである。眞つ直に進むだら矢張成太郎のやうな役者になる人かも知れない。

雖然成太郎にくらべると、雁童の方が餘程女性的に出来てゐるやうである。女性的だと謂つて、女形として雁童は成太郎に勝るといふ意味ではない。無論顔から謂つても柄から謂つても、成太郎に劣りはするが、雁童には女らしい優しきがある。此の優しきも、假に二人を女形として、成太郎を女房役、雁童は娘役といふ風に區別をつけるとしなければならぬ。雁童には娘らしい優しきはあるが、姫様らしい品も美しさも無い。そして顔が何んとなし無愛想で淋しい。顔の線は細いが尖つて出来てゐるからであらう。それで娘らしい優しさはあつても、色氣と柔さに乏しい。乾いた顔といふ程ではないが、うるほひも味も無い。一口に謂へば些ツと見には喰ひつけるが見覺のする顔とでもいふのであらう。

大づかみに謂へば、雁童は花形といふほどの花形役者ではないが、花形らしい質のある役者である。勉強次第では將來或は可成人氣役者になるかも知れない。何んだか其の質に人氣の出さうな點があるやうだ。が今分では些ツと花形らしく見える役者といふ他、取立て、何うといふ點も無いやうである。

四十八、片岡我藏



我藏聲を以て有名な役者である。實際我藏の聲帯には、特殊な仕掛、または組織があると見えて、所謂我藏聲なる一種特別なる聲を放つ。

顔もまた其聲の持主たる資格のあるやうに、役者としては一種別仕立に出来てゐるやうである。臉、頬、鼻、唇——全て筋肉がたるむで、大々したといふよりは、膨むで出来てゐる。それで顔が大きく見える。

顔が大きいばかりでない。我藏は柄も大きな役者である。それだけまた、よし何ういふ端役をしてゐても目につく役者である。大きいとか、太々しいとかいふことは、我藏の役者としての特色で、また長所であるとしなければならぬ。

本役は端敵どころであらうが、或種の老役も行く。歌舞伎座に來てからの當り役は、大藏といふ名でヤツた「新薄雪」の捌場の秋月大膳であらう。これは我藏聲と大きな柄が利いて、我藏がナカ〜光ツて見せた役であつた。大藏で成功した調子で行くと、端敵と謂はずに、相當重いとところも行きさうに思はれる。「菊畑」の湛海などは、卯三郎よりも押出しだけでも

十一世片岡仁左衛門の門。大正六年一月死去。

此の人の方が好かつたらうと思はれる。また「恨鮫鞘」に出る銀八は備役には違ないが、我藏の銀八は、其の柄なり氣込なり、または調子なりスツカリ銀八といふ人間になりきつてると謂へる。我藏は、大藏のやうな些ツと端敵ばなれのした敵役にも向くが、また銀八のやうな實體な俠氣のある役にも向く役者である。

其の藝の質といふよりも、多分其の役者ぶりのせらうと思ふが、我藏は上手拙はさて置き、一風變つた役者である。して其の變つたところに一種の面白味もあれば、味もある。言葉を換えて謂へば、上手といふ程の役者ではないにしても、一種の面白味と味とを持つた役者といふことは出来る。

端敵にしても立敵にしろ、何れにしても我藏は敵役に出来た役者である。よし其の顔にも柄にも、剛悪だとか奸悪だとかいふ、しぶとい分子は無いにしても、憎々しい點はある。そして此の憎々しいのが、憎體といふまでに強味のあるものになつたら、我藏も敵役として大きな役者になれるだらう。所詮我藏の憎々しさには尙だ骨が無い。それで柄のどツしりしてゐる割合に、役者に輕ツばい、ふやけた點があつて腹の底にこたへがない。

我藏の役者ぶりを考へると、何時も中津川勇範とか佐々木巖柳といふやうな役が思浮ぶ。無論見たこともなし、やつたことがあるか何うか、それも知らないのだが、何故か然ういふ

役柄が思出される。

假に我藏を端敵役者としても、軽い味を出すやうなものは全て可けない。従つて可笑味のある役をしたとしても、それは重くるしいものでなければならぬやうである。世話物の方でいふと、善六や太兵衛といふやうな役は、頭で柄にない。時代物の方で謂へば「勘當場」の軍内とか「扇屋熊谷」の忠太とか、然ういふ三枚目式の役にも縁が遠い。「忠臣藏」でいふと伴内役者では無い。少々おかつたるいにしても何ンでも、九太夫役者、または師直役者である。

我藏の柄に最も適した役は稍分別のありげな悪侍である。それも覆面をして、朱鞘の落しざし、黄八丈の着つけを尻端折にして、二三人の一味と誰かを闇討にするといふやうな奴が能く似合ふ。要するに我藏は、端敵役者といふうちにも幾分の重味と大きさのある役者である。その舞臺ぶりを謂へば、ぶツきら棒なところがある代りに、悪騒をしたりコセコセしたりせぬのを取得とする。

四十九、市川箱登羅

珍顔先生の箱登羅も近來大分賣出して來たやうである。以前は死んだ壽美藏の弟子だった



といふが、鴈治郎の幕下となつて出世した人と謂はなければならぬ。大阪では一部に人氣があるらしいが、東京に來てもナカナカ箱登羅の聲がかかる。

役者の筋は違ふけれども、東京では新十郎といふやうな格の役者らしい、一部のひねり屋さんからは、箱登羅はツツだとか、樂屋名人だとか謂はれてゐる人である。

種々な名人のゐる世の中だから、箱登羅も何んとか名人と謂つて可い人かも知れない。講釋にかけては、新十郎ほどに口前が達者でもなければ「知つてゐる」を振廻すのも新十郎ほどでは無いやうだ。其の代り舞臺の方が、新十郎よりも少々達者のやうに見える。舞臺が達者といふことは、聴て役者が好いといふことになるが、先づ好いといふよりは、役に立つと謂つた方が適當のやうである。

大阪では、箱登羅のことを、芝居上手だとか、キビ／＼してゐるとか、嫌味がないとか、男らしいとかいふ人があるさうだ。一應は御尤のやうである。だが拙者の見方によれば、此の人は尙だ其程擔上げるほどの役者ではないやうである。

成程箱登羅は巧者な役者には違ひない。雖然尙だ味といふ奴を持つてゐない。此ういふ質

の役者には最も必要な面白味が無い。假に有るとしても生々しい、所故らしい。不自然とは謂はれぬまでも、至て行方が理に落ちてゐる。考へた拵へ物である。當氣が無いやうに見せかけて一部の人に當てやらうといふ爲方が微見える。叮嚀に謂へば、芝居をせず芝居をしてゐる、ひねつたところを見て下さいといふ心もちが鼻先にブラ下つてゐる。箱登羅の心もちは然うでないかも知れぬが、拙者の眼には然う見える。従つて、臭味を見せまいとするところに臭味があつて、嫌に感じられる場合が多い、そして何んとなし役者を安ッぽくしてゐる。

箱登羅は安ッぽい役者である。安ッぽい役どころにゐる役者のうちでも安ッぽい役者である。それは那の變に耳につく聲の故意もあると謂はなければならぬ。

變に疝立つた箱登羅の聲は、其の顔と藝と共に劇壇の珍である。何うかすると齒の浮くやうな感じのする一種變ちきりんなる箱登羅聲である。

箱登羅は確に此の聲で損をしてゐる役者である。折角の何んとか名人張の舞臺ぶりも那の浮はつた聲に依つて氣障といふ色を塗りつけられて、あたら名人を滅茶々々にしてゐる。惜しいことでもある。

然うは謂つても腕は正に相應にある役者と謂はなければならぬ。芝居が上手といふよりも

他に芝居をさせることの巧い役者である。殊に鴈治郎の舞臺を引立てることに妙を得てゐるやうである。永年鴈治郎についてゐて、よく其の呼吸を會得むでゐるもあらうが、鴈治郎の引立役は確に巧いといふ正札がつく。もし聲が箱登羅聲でなかつたならば、其の役者ぶりに一段と箔がつき、鱧がつき、さびがついて、箱登羅は眞に何ンとか名人の役者になれたかも知れない。

要するに箱登羅は、巧さうに見える割合に巧くない役者である。よし巧さがあつても、味が無い。軽さはあつても妙といふところまで行つてゐない。

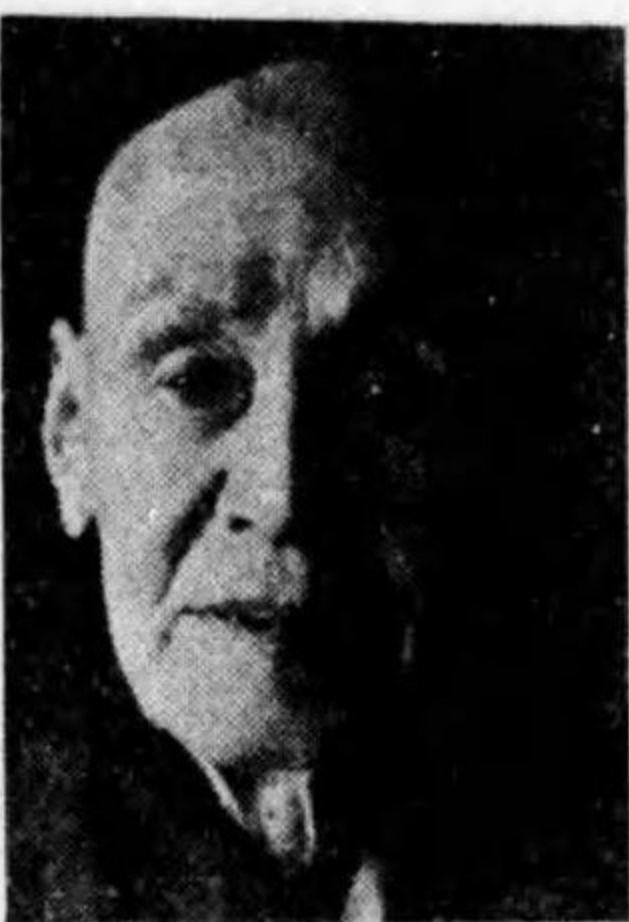
大づかみに謂へば、形だけに巧者質の見える平凡な役者とでも謂はうか。平凡と謂ふには些ツと變つた點もあるが、さればとて其がどれだけの價値があるといふ程のものでもない。そして何點かに一味の俗氣がある。俗氣と謂つても臭味とか嫌味とかいふ程のものでもないが、何ンだか俗な點がある。結局箱登羅は、一部の芝居好から買被られるだけの長所はあるが、それは決して大した物ではないといふ結論になるのである。

其の得意藝は端敵どころの悪侍であらう。箱登羅は殆ど其が専門の役者と謂つて可いかも知れぬ。全て碎けたものならば少し固いとこのある物の方が可いやうだ。また珍な顔が利いて、種々の道化役も其の領分らしいが、「伊賀越」の遠眼鏡の飛脚などの腕前で見ると、尙

「伊賀越」の助平は、明治四十五年二月の新富座。

だく、あくが抜けてゐない。道化以外の物で、「車引」の金棒引などは、柄にありさうな役でありながら、これで箱登羅の役者がグツと下落して、遂に凡々な役者になつて了つた。箱登羅は舞臺の巧い役者であらう。しかし巧いと思ふうちに、小骨の多い魚でも喰べてゐるやうな些ツと危ツかしい感じのする役者である。

五十、尾上松助



動きも動かしもならぬ當代の大家である。昔から名人藝と正札のついた上手役者である。

松助が帝劇に入つてゐるのは、政治家で謂つて見ると、丁度何

度も大臣を勤めた人が樞密院に祭り込まれたやうなものである。地位は、名譽を表彰されてゐるかも知れないが、仕事は何ンにも出来ない。名づけて、光榮

ある閑職といふのださうだ。時代といふ奴はナカ／＼皮肉である。江戸といふ古い空氣に育まれて来た老優を、金壁燦爛、お寺のやうに莊嚴な、ルネサンス式の大建築の裡に押籠めて、手も足も出ないやうにしてゐる。

尾上松助

五世尾上菊五郎の門。初め尾上梅五郎死去。

永らく歌舞伎座附となつてゐたが明治四十四年四月から帝劇専屬となる。

これを活きながら葬つたと謂つては、尙だ尙だ餘命幾何もありさうな松助の爲に鶴龜々々である。帝劇が松助を迎へたのは、蓋し藝壇の元勳に敬意を表し、且つ老後を安らかにする爲の一種の優遇法であらう。

何れにしても松助は、帝劇に入つてから、頓に過去の人となつたやうな観がある。腕前が衰へたといふのではない、松助といふ江戸前の役者の藝風が、帝劇といふ芝居小屋の空気に調和せぬらしい。適材を適所に置くといふ人物經濟の奥義は、芝居道にも應用しなければならぬやうだ。

松助は何うしても歌舞伎座に居るべき役者であつたのだ。そして、「蝙蝠安」役者、「丈賀」役者として、羽左衛門のワキ役者になつて居れば可かつたのである。

樞密院の閑職も結構なことであらうが、役者の元勳には矢張舞臺で腕をふるつて貰ひたい。腕をふるつてふるひ榮のするところに置きたいものである。

幾ら鍛込むである腕だと謂つて、對手次第物次第では、思ふやうに働けぬこともあれば、働いてもはえないこともある。何様な名人でも一人では芝居は出来ない。また得手不得手といふ奴もある。

松助の辣腕を以てしても、「九段目」の本藏なぞといふ代物は、畑違ひのものとしなければ

ならない。松助とて其を知らぬでは無からうが、幹部のお指圖とあれば、此の畑違ひのものも甘んじて御覽に入れなければならぬ。他から見ると役者の樞密院の閑職は餘り樂なものでもないやうである。

繰返していふ。松助は歌舞伎座に居れば可かつたのだ。梅幸、幸四郎——對手の役者の立派には違ひがないが、松助はワキ役者として働くには勝手が悪い。加之、女優といふ藝術家が一人前の働をする帝劇といふ芝居小屋の空氣や色彩は、妙に松助といふ古い名人肌の役者とは一致しない。松助は眞の下廻りから上つて、今の地位までになつた人だといふ。單是だけでも人間に何點か餘程えらいところのある人としなければならぬ。

松助の人間としてのえらさは顔付にも見えてゐる。腮の骨の角ばつて大きいには、意志の強さが見え、眼の凹んでギロ／＼するには、人間の伶俐さと深さが見える。

其の人格を謂へば、人を抱擁するやうな大きなところは無いが、他を陥さぬとか、傷つけぬとかいふ練れた點はある。それはしかし、持つて生れた性分といふよりも、松助の境遇と經歷によつて、鍛えられて來た結果であると謂はなければならぬ。所詮先天的のものでなしに、後天的のものである。

藝にしても、また役者ぶりにしても然うである。何れの點から見ても、松助といふ役者の

出来方は、後天的といふ色彩を帯びてゐる。地金は左もあれ、鍛えに鍛えて業物になつたといふ風がある。

今の東京役者のうちで松助ほど、此の鍛えて来たといふ色の出てゐる役者は少い。眼の配りにも、白にも、鍛えて来たといふ調子が漲つてゐる。そして鍛えて来たといふ事實の裏には、多大の苦勞といふ奴が潜むでゐるとしなければならぬ。

實際松助は、舞臺にも藝にも、また普通の人としても苦勞をして来た人であらう。虚實は解らないが、何んだか花を咲かせずに實つたといふ感じのする役者である。

其の役者ぶりから謂つても、また舞臺ぶりから謂つても、松助は飽迄も「實」の役者である。花らしいところが微塵もない。言葉を換えていふと、役者らしくない役者であるが、名らしい役者だといふことが出来る。假に眞の名人と謂ふことは出来ないにしても、名人質の役者といふことは出来るだらう。

名人と謂ひ、業物と謂つても、松助は器の大きい人とは謂へぬ。また品質も餘り高くはない。刀でいふと、頗る切味の好い七首である。自分だけでは大した働は出来ないが、副となつて縦横無盡の働もすれば、奇功もあらはす。要するに差添である。しかも能く鍛へられた差添である。

松助が幾ら能く鍛えられた業物だと謂つて、松助には松助の芝居の出来ない人である。雖然他の芝居の副となつて、殆ど自分の芝居のやうにして見せるだけの腕はある。此の腕がまた頗る狡ツ辛く出来てゐる。

松助は、其の役者ぶりといふよりも、其の舞臺ぶりが何んとなし狡ツ辛く出来た役者である。悪い意味ではない。人間の狡ツ辛いのは恐らく困りものであらうが、藝の狡ツ辛いのは琢磨鍛錬の賜といはなければならぬ。

しかし役者は大きくもなければ、貫目とか品位とかいふものもない。またうまみとかうるほひとかいふものも微塵もなければ、ノンビリした點もない。一口に謂へば固まつて出来たやうな役者である。叩けばガン／＼音のしさうな役者である。同時に張りきれただけ張りきつたといふ調子である。

松助は調子の高い役者ではないが、しかし緊張したところはある。否、とこといふよりも緊張した役者である。そして其の舞臺ぶりの何點かに恐ろしく皮肉な、意地の突つ張つたところが微見える。根はと謂へば利かぬ氣の、稜々しい奴ではあるが、それが世故を経て磨り減らされたといふ風が見える。従つて當込むでゐるといふ人の悪い行方も見える。

何にしても松助といふお爺さんは一と筋繩で行くお爺さんでは無いやうだ。何も彼も知り

抜いてゐながら知らぬ顔して空恍けて通してゐるやうなお爺さんである。第一役者に共通なえらがつて見せやうといふ道樂のないだけでも、喰へないお爺さんと謂はなければならぬ。要するに松助は、藝で光ツてゐる役者である。腕で大きくなつてゐる役者である。しかし藝の質が廣いとも高いとも謂へぬ。専賣物といふ松助獨特の物を持つてゐるだけに、専門的と云ふ色を帯びてゐる。但し此の専門的は餘りピカ／＼せぬ代りに、餘程頭抜けた代物としなければならぬ。

其の味を謂へば、甘味もなければ苦味もない。殆ど辛味一點張りに、幾分滋味が加はつてゐるといふ奴である。其の色を謂へば、鮮かな茶褐色である。其の質を謂へば、練れに練れ、達しに達した巧者といふ方である。そして、對手次第で何様なにでも芝居をして行く人である。其の舞臺ぶりを謂へば、無論賑と云ふ方ではないが、さればと謂つて燻むでゐるとか沈むでゐるとかいふ方でも無い。一言にして盡せば、何れの點から見ても松助は程好く出来た役者である、其の程好いに名人らしいサビが付き、傑物らしい箔がついて、白銀にいぶしをかけたやうに光ツてゐる役者である。

其の本役は、これを月並に謂へば、端敵と老役であらう。雖然松助の老役は何處までも松助一流のものである。何點かに氣の利いたとこがあり、きかぬ氣のとこがあり、そして人の悪さうな點がある。別な言葉でいふと、實體なとこもなければ、素朴なとこも無い。具體的に謂へば、「佐太村」の白太夫とか「沼津」の平作とかいふ役は其の人にならない。「逆櫓」の權四郎とか、または「日吉三」の五郎助といふやうな幾分腹のあるきかぬ氣の奴にしても、藝といふよりは寧ろ其の仁體に何がなし不足があるとしなければならぬ。またお品のある役も餘り感心出来ないやうである。

畢竟松助の老役は幾分惡の分子の加はつた世話的の物に於て眞骨頭が見えるやうである。されば「野崎」の久作などのやうな世話的の老役にしても、よし爲ることや性根とか心もちに、人を點頭させる力はあるに於て、久作が少々お假面を被つてゐるやうな趣があつて、一應は感服しても、感激といふ奴がない。

然らばと謂つても、其の出来不出来は別として、松助の老役は、何れも人間味といふ奴を持つてゐる。芝居の人物といふよりも、眞に血の流れてゐる生きた人物を見てゐるやうである。そして其處に、松助といふ役者の價値もあり味もありまた個性も見え、役を離れて、只松助といふ役者を見てゐるだけで、相應に藝術味を感受することも出来れば、興味も堪能もある。極言すれば、松助といふ役者は、只舞臺に出てゐるだけで一種の藝術品になつてゐるとも謂へる。老役以外の役々とても然うだと謂はなければならぬ。

端敵役者としての松助は、天下に定評がある。松助の持つてゐる悪の質は、奸とか、剛とかいふやうな、大きな物でもなければ重い物でもないが、軽い意味の辛辣といふやうな點はある。また深刻なところもある。加之一味のユーモアが加はつて、皮肉で、そして小面の憎い松助といふ端敵役者が出来てゐる。

日本式の喜劇役者として、松助の腕前はまた素適である。歌舞伎役者のうちで、恐らく松助位自然に滑稽味を出し得る人はあるまい。それが古い物であつても、また新しい物であつても、松助の巧妙滑稽は、揆なしにまた嫌味とか悪腕なしに、人を笑はせる力と技術がある。ウカ／＼書いて来て、つい豫定の紙数を超過して了つた。松助に對しては、まだ／＼謂ひたいことがある。しかし今度はこれで切上げて置くとして、要するに松助といふ役者は決して品質が高いとか、大きな役者とかいふのでは無いが、鍛えに鍛え練れに練れた藝の腕前には、含蓄があり、生氣があり、名人らしいサビがついて、繪畫的といふよりも彫刻的に出来た或る種の名優といふことが出来るだらう。否確に一種變型の名優である。

五十一、中村又五郎

今のところ又五郎は些つと役者になり損つたといふ形がある。氣にしては可けない。何も

中村紫琴の男。大正六年より大劇場を去つて公園劇場に出勤。大正九年四月死去。

又五郎は公園劇場へ出てから、盛り返りかた。死んだところまで進



少年役者時代の又五郎の人氣は實にすばらしいものだつた。小傳次以後の寧馨兒として、吉右衛門と轡を并べて、劇壇の寵を恣にしてゐた。人氣から謂つて、宗之助の如きは、到底又五郎

の敵ではなかつた。

然に吉右衛門は、今や菊五郎と頽頽して、歌舞伎座側若手役者の巨壁となつてゐる。宗之助は客將分である明治座を去つて、帝劇の幹部といふ榮位を占めるやうになつた。二人の此の躍進的雄飛に對して又五郎は、嘗ては遙に下風に立つてゐた壽美藏等と伍して、左團次組の一部將に甘んじてゐる。又五郎の藝の至らぬせいか、それとも運命の支配か。何れにしても又五郎の爲に、切實なる悲哀が感じられる。

一部には又五郎を嫌味な役者と思つてゐる人がある。成程然う思はれるやうな點がないでもない。

また一部には又五郎は心もちの鷹揚な感じの好い役者だといふ人がある。成程然う謂はれ

て見ると、然うのやうにも思はれる。

更に一部には又五郎のことを女たらしの血の冷い人間に思つてゐる向もある。例へば政代一件の如きは、又五郎の女たらしの一證據として、所謂流言蜚語といふ奴が可成熾に撒きちらされた。

雖然裏に裏がある、底には底がある。參差錯雜なる人情的事件の機微を洞察するといふことは、佛蘭西の名探偵にも出来ないことである。政代が果して、又五郎を怨むで死んだか何うだか、それは大なる疑問だといふ。否、或消息通は、事件の真相は寧ろ世間の噂とは正反對だとさへ斷言してゐる。

これはしかし何れにしても、深く詮議する必要は無い。事實又五郎が噂通の女たらしだとしても、又五郎の私行は、又五郎といふ役者の價値に何等の影響も無い。

雖然吉右衛門に人氣のあるのは、吉右衛門といふ人が何んとなしおとなしやかに見るといふことが、重なる要素になつてゐるとしたならば、それとは反對に、又五郎の人氣が、政代事件の如き噂の傳播に依つて、幾分の傷害を蒙つて居らぬとは謂へぬ。

藝か、人氣か、左に右又五郎は今のところ役者になり損つてゐるといふ形である。好い心もちも結構だが、少しは悪い心もちになつても可いから、うんと腹帯をしめてか、つて、人

氣を盛返して貰ひたい。

役者の質を謂へば、役者らしい役者で、可成融通も利き、顔も姿も相應なら、舞臺にも熱があり過ぎる位熱がある。役者の資格には先づあらまし申分がないとして、聲だけは如何にしても悪のやうである。悪と謂つて、必ずしも悪聲といふのではない。また量もなかくあるやうだ。それでゐて何か引つか、つてでもゐるやうな、嫌な響がある。殊に白く塗つた役をすると、それが際立つて耳につく。もし又五郎の役者ぶりに嫌味があるとすれば、此の何んとなし嫌な響のある聲が、あづかつて力があると謂はなければならぬ。がしかし此の嫌な響のある聲が何様な風に嫌に響くと謂はれては、其の説明は難かしい。只剛情に何んだか嫌な響のある聲だと云ふだけである。

又五郎に感心な——といふよりも、面白いのは、何様な舞臺でも、また同様な役をも、有ツたけの力を出して汗だくなつてやることである。殆んど眼が眩むでゐるかと思はれるやうに、一生懸命になることである。これを下廻りに聞くと、幸四郎の立廻りと、又五郎の立廻りには、命掛でか、らなければならぬさうだ。それは二人ともに舞臺に氣の入る過ぎる結果、約束も寸法も忘れて、無茶苦茶に奮闘して了ふからだといふ。

又五郎は正に判然と舞臺を一生懸命に勤める役者である。これを取柄だとか長所だとか謂

現在の又五郎は、その子である。

へば然うも謂はれる。舞臺熱の高いとは、何う悪く考へても役者の美徳に違ひない。雖然又五郎の車輪には、何んだかあくどいところがあり、ぎごちないところがあり、生々しいところがある。難しく謂へば藝術化されてゐない。それで折角の努力も何んにもならないことになつて了ふ場合も少くないやうである。

ぎごちないと謂ひ、あくどいと謂つても、又五郎の舞臺ぶりは窮屈といふのでもなければ、またこせつとくとか、悪く巧者ぶるとか、當氣が多いとかいふのではない。只少し好い心持になると、騒々しくなつたり、力瘤が入過ぎたり、熱が發し過ぎたりして、つい、ぎつくりばつたりするやうにもなるのであらう。

又五郎はまた何うかした場合に甚く納つた舞臺ぶりを見せることがある。其の場合の又五郎は、又五郎自身、大に好い役者になつた積であるやうに見受けられる。

思ふに又五郎といふ人は舞臺に出てゐるのが面白くてならない人らしい。また性質も至極の樂天家らしい。藝にしても然うである。

又五郎の藝には少しの迷も屈托も、また滯滞もない。全て自分を是認して、思ふまゝ、にすらく〜とやり飛ばして行く。是認といふよりも無頓着と謂つた方が至當かも知れない。謂はば見物が何んと思つても、其様なことはかけかまひがないといふやうな行方である。しかも

見物を眼中に置かぬといふやうな驕慢なものではなしに、見物はきつと上手だとか巧いとか好いとか思つて呉れるに違ひないといふ好い心持から來た奴である。これを自惚だとか自信だとかいふと、些か罪も深くなるが、又五郎のは何うも其程あくどいものではないやうだ。

何故となら、自信が強いとか、自惚があるとかいふには、又五郎は餘り好い心もちの人であり過ぎる、所詮又五郎の自信とか自惚には、邪氣とか分別とかいふ奴が無い。好く謂へば悪ずれをしないで、ノンビリと育つてゐるといふのだが、取様では臆面がないのだとも謂へる。

又五郎は舞臺馴れた役者であるが、舞臺ずれのした役者とは謂へぬ。同時に其の放膽的に見える舞臺ぶりも、舞臺度胸だとか藝度胸だとかいふ性質のものではないとしなければならぬ。

又五郎の舞臺はすれてゐるやうに見えてゐて、案外正直で純なところがある。こせつとくやうに見えてゐて、案外鷹揚なところがある、脂濃いやうに見えて、案外さつぱりしてゐる、何も彼も會得むでゐるやうに見えて、案外うぶな子供ツぽいところがある。

又五郎に嫌味があるとすれば、それは子供役者として大役をこなしたのが祟つてゐるのであらう。しかし又五郎には、よく子供役者上りの役者に見受けるやうな、好い役者ぶつ

て見せやうとするやうな悪腕もなければ卑しげなところもない。
又五郎は多くの缺點を持った役者であらう。代りには抜ければ可成抜けることの出来る質のある役者のやうである。

本役を謂へば、若衆役とか、和事師とかいふ方であらうが、若女形も行ければ「酒井の太鼓」の酒井や「先陣館」の盛綱と謂ふやうな固い腹藝式のものもこなして見せる腕前はあつた。また板面式のものでも「板額門破り」の藤澤四郎位のものなら苦もなくやつてのける。それは的確な領分とは謂へぬにしても、又五郎の活動區域は可成廣い。そして贅澤さへ謂はなかつたら、また難しい詮議をしなかつたら、可成に見られる役者と謂はなければなるまい。

又五郎は全て可成といふ程度に出来た役者である。其の味を謂へば澁が抜けきつたか抜けきらぬ位の青柿を噛むだやうだとも謂はうか。うまみは尙だく出てゐないが、幾分の甘味は持つてゐる。

要するに又五郎は、尙だ熟さない果物といふやうな感じのする役者である。熟したら甘味が出るか、澁味が出るか、また酸っぱい奴になるか、それは解らない。何しろ尙だ骨が固まつてゐないやうなところがある。其處に伸びる見込があると謂へば然うも謂はれる。今分

は只数多い若手役者のうちでも、特に華美などこのある役者らしい役者といふのを購つて、望を將來につないで置く。

五十二、中村芝鶴



先代菊五郎には、いろはからやりなほせと警告され、團藏には器用者と謂はれた人である。

一と頃の芝鶴は、低級な芝居好から一とかどの立者と思はれて人氣もナカクあつたやうである。殊に本郷では、新駒屋の人氣は頗る振つてゐたらしい。しかし近年はスツカリ旅役者になつて了つて、東京の舞臺には滅多に顔を出さないやうである。

一體芝鶴は何んとなし旅役者らしい感じのする役者である。藝も然うなら、柄も然うのやうである。しかし旅役者としては大した傑物と謂はなければなるまい。團藏が器用者と推稱しただけに、芝鶴が芝鶴の芝居をすると、大いに團藏を張る。張るといふよりも模倣ると謂つた方が適當であらう。白など殊に然うである。

團藏の骨と腸とを抜いて、芝鶴の癖を加へたのが、芝鶴といふ役者の舞臺ぶりであら

中村 翫雀の
門、のち中村
傳九郎と改
名。大正十二
年死去。

う。がしかし芝鶴には、團藏の光秀式剛毅なところもなければ、彈正式猛々しいところもない。それは假に眞似て眞似られぬこともないとして、鬼薊の清吉だとか和國橋の藤次、また「笠森おせん」の仲間市助といふやうな江戸的の物になると、頭で柄にも藝にもないとなればならぬ。

出来る役々からいふと、芝鶴の團藏張といふのは眞の一部分である。しかし其の舞臺に於ける呼吸とか行方は大いに團藏張といふところを見せつける。

「陣屋」の熊谷をやる、佐倉宗五郎をやる、梅の由兵衛をやる——芝鶴の團藏張は、一種の臭味をつけて可成器用にこなされる。芝鶴の聲は、以前から嘎れてゐたと覺えてゐるが、其の嘎聲を團藏化した芝鶴の白は、白からして既に座頭式に出来てゐると謂はなければならぬ。

芝鶴は其の柄から謂つても、藝の質から謂つても、立役者式、または座頭式に出来た役者である。顔を謂へば中高で、少し尖り氣味ではあるが、役者らしい柔な調子を持つて、何様な役にでも廻れやうといふ重寶仕立に出来てゐる。そして役者ぶりには、相應に儲がつき、重味もあり、旅に出たら立派な千兩役者で通れるに違ない。東京にゐても、押出だけを購つたら、八百藏段四郎につぐ役者と謂はなければなるまい。事實管ては、春木座、東京座あ

たりで、八百藏、段四郎と同格の役者として働いてゐたこともあつた。また團藏と一座しては、其の五右衛門に木下藤吉といふやうな役者に廻つて、大いに芝鶴を發揮してゐたこともあつた。そして大向から三好屋と聲をかけられたり、やがては九藏になるやうに謂はれてゐたこともあつた。

左にまれ芝鶴は出来損なつた好い役者ともいふやうな資格がある。洒落ではない。役者の踏むべき正しい道を踏むで進むでゐたら、歌舞伎座に入つても、可成幅の利く役者になつてゐただらうと思はれる。芝鶴は確に役者になり損つた人である。なり損つたといふよりも、ならうとしなかつた人かも知れない。

歌舞伎座では「堀川」の與次郎の母で、持前の器用が役に立つて、些々と好評を得て居たが、後は散々な體たらくとあつた。旅の千兩役者も、歌舞伎座の端役は頭でお齒に合はなかつたらしい。

芝鶴は飽迄も中芝居以下の立役者に出来た役者らしい。若い時分から其で腕を固めて來た人だから、離用には間に合はない。好く謂へば、大將で育つて來た人は雑兵の役には立たないといふのだが、實は芝鶴の役者修業が正則でなかつたからだと言はなければならぬ。何んにしても芝鶴の舞臺ぶりには臭味といふ奴がついて廻る。臭味もくさやの干物と言は

明治四十四年
十一月から、
小芝居を去つ
て歌舞伎座つ
きとなつた。

れる歌六式の奴になるとまだく、取柄もあり味もあるが、芝鶴の臭味は臭味を辛抱するだけの味も無い。

芝鶴は器用と達者と臭味で固って出来たやうな役者である。藝の質は、何方かと謂へば固いといふ方であらう。老役や立役も自在に行くが、それは世話物役者といふよりも、型物役者と謂った方が適當なやうに出来てゐる。型物も世話物的の物よりも、固いとか武張つたとかいふ物の方が得意としてゐるやうである。其の武張つた役も、白く塗つた顔よりも、このでつぶした顔の方が、役者ぶりを上げる。

澤村訥子、淺尾工左衛門、中村芝鶴——これを中芝居の三大名家とする。卯三郎、翫助の大芝居役者が幾ら威張つても、座頭役者として、此の三人の前には尻尾を巻かなければならないだらう。

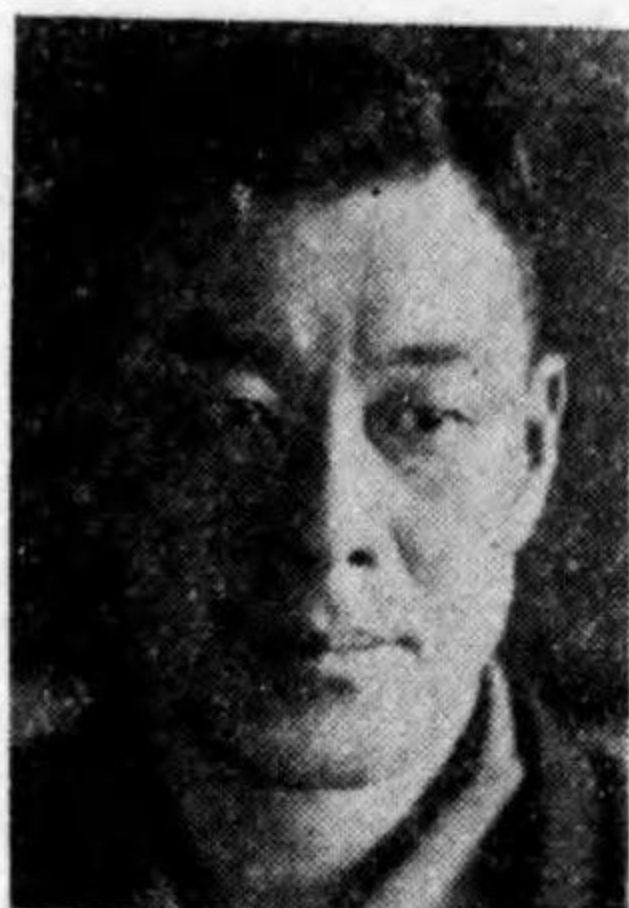
一つしよくたに三名家と謂つても、名々役者の質が違ふ。工左衛門は多藝を以て優り、訥子は活躍を以て優り、芝鶴は其の器に於て優る。

何んと謂つても、芝鶴は達者役者組の大頭の一人である。質の好い悪いは別問題として、芝鶴は芝鶴の芝居を見せて押通して行かれる人である。普請はヤツでも、自分の家を持つて、頑固に其に棲つてゐる役者である。そしてお安いながらも、的確に一家をなしてゐる人である。

先代坂東壽三郎の男。

「菅公」の多紀彦は大正二年二月の新富座

五十二、坂東壽三郎



ついで此の頃まで長次郎と謂つてゐた大阪若手役者の俊才組の一人である。そして大阪流に上つ滑りのした才氣縦横とでも謂つたやうな達者役者である。

顔も好い、柄も好い。踊も踊れる、新味もある。舞臺の踏み方にも、しつかりしたやうなところがある。何う安く購つても、大阪の若手役者のうちでは有望といふべき資格が充分にあるやうだ。

上つ滑りがすると謂つても、壽三郎の才氣は、必ずしも薄つべらだといふのではない。「菅公」の多紀彦など、といふ役のこなし方を見ると、才氣の底には、力もあり、骨もあり、また一味真率の氣も流れてゐるやうである。しかし其の力も、骨も、真率も、底が見え透く。多紀彦といふ奴は、ナカ／＼根強い悪人である。血袋の大きな、骨の太つく出来た奴である。少しも人間らしい殊勝さのない悪黨である。役の性質からいふと、役者の腕次第で、何様なにでも大きな役にも出来れば、また充らない役にもなるといふ危つかしいところのある役である。所詮多紀彦が大きな悪黨に見えたら、それは役者の腕が優れてゐるのである。ま

坂東壽三郎

た充らなく見えたら、それは役者の腕がヤワなのである。

壽三郎の多紀彦は、其の何れであつたかと謂へば、無論其様な大きな悪黨ではなかつたが、また充らない悪黨でもなかつた。謂はば好い加減な悪黨で、相應に骨が太いやうに見え、根強い性根も見えた。先づ普通の出来榮で、大して讚めることも出来ないが、悪くも謂へぬといふ程度であつたらしい。只しかし其の行方に、左團次または左團次一派にみるやうな新味のあつたのは、反つて役者を薄つべらにしてゐたやうであつた。

壽三郎といふ役者の價値は、多紀彦の出来榮に依つて、殆ど其の見當をつけることが出来ると思ふ。

壽三郎は、役者ぶりから謂つても、大して何う此ういふ程の役者ではないが、さればと謂つて隅つこへ片附けて置くことも出来ない役者である。全てが相應に、そして好い加減に出来てゐて、融通は、ナカ／＼利くらしい。同時に實力よりも、才でもつて「おのれ」を光らして行かうとする役者らしい。舞臺ぶりが何んとなし薄つべらに見えるのも、上つ滑りがしるるやうに見えるのも、多分其の故であらう。

單に顔と柄から謂へば、随分大きな役者になれさうに思はれる。柄は格段に大きいといふ方ではないが、好い加減に大きく出来て、どつしりしたところもある。顔も然うである。壽三

郎の顔は優れて綺麗だとか立派だとかいふのではないが相應に美しくもあり立派でもあり、またしつかりしたやうなところもあつて、先づ調子好く出来てゐると謂ふ方であらう。

此の柄と顔が利いて「車引」の時平などは、見てくれに於て其様に見窄らしいものではなかつた。雖然壽三郎といふ役者には、尙だ威力とか位とかいふものが備つてゐない。位どころか尙だ貫目とか、鰭とかいふ奴さへついてゐない。時平の悪かつたのは固より當然のことである。

顔のそなへや、柄からいふと、壽三郎は、敵役も行けば立役も行く。また大阪式の二枚目物も樂に行けらしい。加佐として女形も行けさうである。然ういふ所は成太郎などと似通つたところがあるが成太郎よりも骨に剛いところがあるやうだ。それだけ敵役に適する代りに、女形の方で蹴飛ばされなければならぬ。藝をいふのではない。役者の出来方をいふのである。音量はナカ／＼ある。それで些つとドスも利く。聲から謂つても壽三郎は、成太郎より男性的に出来た役者と謂へる。

壽三郎は今のところ尙だ上手だとも巧者だとも謂はれぬ役者——謂つて見ると、海の者とも山の者とも解らぬ役者ではあるが、役者ぶりの好いのと、何うかすると大阪式オツチヨコチヨイを見せつけることはあつても、割合に舞臺ぶりのしつかりしてゐると、相應にはた